

て見せた。寫生帖にはいろ／＼に其時／＼の人物の態度を寫生したものなどもあつた。繪を一枚／＼見て行つた玉子は、ふと藝者を描いた一枚の繪に眼をつけて、

『これ、誰が見たやっね。』

『どれ？』

雪助は顔を其方へ向けたが、『お前さん、それは照香さんぢやないかえ？』

『わかつた、わかつた。』玉子は面白さうに手を拍つて、『照香さん、此處に来るのねえ。わかつた／＼。』

随分ねえ、貴方は？ 好いわ、そんなら、その積でゐるから。』畫家は黙つて笑つてゐた。

『裸體畫はなくつて？』

『いくらもあるぢやないか、其處に……』

『いゝえ、照香さんのよ。』

『馬鹿を言つてら、そんなものはないよ。』

『あるのよ、屹度、隠して置くのよ。憎らしいねえ、雪助さん。』

『昔のことだよ、それはもう……。』

『いつの昔？ 此間、變たと思つたことがあつたのよ。』

『もう好いぢやないか、そんなこと』

その日は一時間ほど遊んで歸つて來たが、一月後には、玉子は度々其處へ出かけて行く様になつてゐた。夕方に出かけて行つて一緒に角の待合に併れて來たりした。畫家の寫生帖に、玉子の横顔だの後姿だの正面の顔だのが澤山に描かれる頃には、『此位で好いの？』など、言つて低頭き加減にして、三分位黙つて坐つて居た。『照香さんも、矢張かうして書いて貰つたのね。貴方と二人きりだから何をしてもたかわかりやしないわね。』など、玉子は言つた。畫家の口裏から判じて見ると、照香は裸體のモデルを勤めたこともあるらしかつた。『いやなこと、私は照香さんぢやないんですからね。いやなこと、』など、玉子は言つた。畫家は畫家で、『君のも一枚記念の爲めに書いて取つて置かうか。』こんなことを言つて眞面目に繪の具を畫板に塗つた。

面白い稼業もあるものだなと、玉子は思つた。懶惰で放縱で、いつ行つて見ても、酒を飲んでゐたり寝てゐたりすることが多いと思ふと、時には玉子が訪ねて行つても相手にしないほど眞劍になつて、繪具を塗つてゐることなどもあつた。金離れが綺麗で、ちよつと見ては何處かの書生か何ぞのやうな構はない服装をしてゐながら、十圓や二十圓の金は何とも思つてゐないやうにすん／＼出した。待合の勘定も綺麗に拂つて行つた。

不思議にも客の金の拂ひやうなどが此頃玉子に飲み込めて來てゐた。『あのお客はもう縁が切れたよ。』など、いふ女將の言葉もわかつて來てゐた。『あのお客はもう長いことはないよ。用心してお出でよ。』か



うある女將から言はれた客は、果して次第に足が遠くなつて行つた。『急に澤山つかふやうになつたら、此方でも用心しないと、ひどい目に逢ふよ。』かう姐さんの言つた言葉が成ほどと點頭けたやうな時には玉子はもう少しで警察に招かれて行く處であつた。『さうなの？ あの春月のお客さん、そんな人でしたの？ さう言へば、何處かに調子の變なところがあつたけれど、まさかと思つてゐましたよ。さう？』榮さん、呼ばれたの？ よかつたわ、私、早く手を引いちやつて、今頃まで聘ばれてゐれば、私もさういふ恥しい思をしなくつちやならなかつたのね。さう？ 榮さん一晩留められたの？ そんな事を言はれたんですか？ お金を貰つたら、すつかり吐出せつて？ 刑事さんに？ いやねえ。』かう玉子は言つて思ひ出すやうにして、『何うして、そんなことをしたんでせう？ 矢張つかひ込み？ 會社の金を餘程つかつたらしいの？ あの人も行つてゐて？ さう？ 何んなでせうね、いやね。』玉子の眼の前には、暗い警察の留置場の一間が見えた。若い色の白い會社員と榮といふ加賀屋の抱妓とが一緒に並べられて無残な調べを受けてゐるさまも歴々と見えた。話してきかせた女中は、『それでも私の家では、あのお客は二三度來たばかりだから、すぐわかつて何でもなかつたけれど、金寶亭では、何でも大變らしいよ。あそこのお鶴さんが矢張來てたよ。』おい、こら、白狀せんか、』なんて、あのお客ギウギウ言はされてゐたよ。』

『榮さん、何んな顔をしてゐて？ いやだわねえ。』玉子は顔を曇らせて言つた。

玉子の肖像がその青年畫家の畫室の一隅に置かれる時分には、玉子のよく出かけて行くレストランの

卓の上にアネモネの花が鮮かに咲いてゐた。夏がまた來てゐた。下の球突場には、客が二三人來てゐて、いつも賑かな聲がした。

ある夜、若い二十七八の色の白い役者のやうな男と一緒に其處から出て來た玉子は、

『話があるのよ、今日少し……』

『何んな話だえ？』

『あつちへ行つてから話すわ。あそこへ行くわね。』

『作日の今日だからね。』

『なアに好くつてよ。構ひやしないわ。』

で、二人は纏れるやうにして、いつも行きつけの待合の裏から入つて行つた。お増といふ上州生れの唇の厚い髪の薄い女中は、『誰かと思つたら貴方？ 今日女將さんお留守よ。』

『何處へ行つたえ？』

女中は笑つて小指を出して見せた。

『フム。』

など、男も笑つて、取ツつきの六疊へヅカ／＼入つて行つた。

『矢張そこが好いの？』



『だって、此處が一番静かで好いよ。向うとかけ離れてゐて、ね、雪ちゃん。』  
女中が出て行つた後で、玉子は、

『貴方妬けて?』

『何が……』

『しらばくれてゐるよ、貴方は?』後を言はずに玉子は聲高く笑つた。

『だって何が妬けるんだかわからない。』

『仰しやいよ。ちやんとわかつてゐますよ。お上さん、あれでいくつだと思つて?』

『何だ、それを言つてゐるんですか。』男は大きく笑つて見せた。そしてあとは女が何を言つても、相手にせずに唯笑つてゐた。

女中が来て、キャツ／＼騒いで行つたりした。『二階に来るのは誰? 秀香? ぢやお客はあれだらう。』

男は颯でしやくつて見せて、『あれでもちつとは金があるのかしら。華族は華族でも、貧乏華族だつて評判だ。秀香の方で惚れてゐるんだらう。』

『矢張氣になると見えるのね。』女中はかう言つて手を拍いて笑つた。

『貴方も餘ほど箒ね。……少しは女といふものゝ心を汲んでおやんなさいよ。』

玉子が言ふと、

『でも、秀香には閉口した。』

『あんなことを言つて? 秀香さんは情がありすぎるの何のつて言つてゐたぢやありませんか。君のやうぢやないなんつて言つてた癖に。』

『それが厭だつて言つたんぢやないか。』

『仰有いよ。』

玉子は打つ眞似をした。

二階からはやがて三味線の音が聞えて來た。便所へ行つた玉子は、『照吉姐さん今上つて行つたわ。』かう言つて徐かに入つて來た。枕屏風には藤原時代の男女の色紙形の小さな繪が處々に張つてあつた。

『話つて何だえ?』

『何でもないので。』かう言つた玉子は、わざと甘えるやうに男の傍に寄添つて、『本當に何でもないので。唯ちよつと。』

『何うしたんだえ?』

『話ませうか、此間の話ね、そら、あのお客の話よ。大變向うで乗つて來てるのよ。』

『此間のお客つて? 何方だえ?』

『稻垣の方よ。』



『フム。』

『私、成るたけさうならないやうにしてるんですけれどもね。』

『でも、麻布の大杉ツて言へば、中々幅が利く方だよ。世話になれば好いちやないか。』

『また、あんな事を言ふ？ 好かないわねえ。さうぢやないんですよ。だから、貴方に相談するんぢやないの？』

『そして向うでは何う言ふんだえ？ 世話をしてやるツて言ふのかえ？』

『まア、さうねえ。』

玉子は吸ひかけた敷島の灰を傍にある灰吹きに落して、『いろんなことを言つちやいやよ。本氣で言つてるんですから。私、此間、少し加減がわるかつたでせう。と、お前體がわるいのに、こんな稼業をしてるのは可哀相だ、少し保養した方が好いよ。なんなら何うかしてやつても好いつてかう言ふのよ。お金はあるらしいわね。』

『少しはあるだらう。護謨か何かの會社を持つてるから。』

『借金のことなども聞くのよ。私、そんなに望んではないんだから、好い加減には聞いて置いたけれど……。』

『此頃考へて來たツて言ふんだね……』

『さうぢやないのよ。ちよつと、貴方に話して見るのよ。』

『好いことぢやないか。』

『でもね、何うせ長持なんかしないには決つてるわ。此方がいくらかでも好いと思つてるんなら、未始終のことを考へて行く氣になるけれど、何うせ駄目なものにはきまつてるんですものねえ。圍ひ者なんて、それはイヤなものよ。』

男は考へるやうにして、『引かせて、立派に家まで持たせてやるツて言ふんだね。』

『まア、さうなの。』

『いつ頃から出てるんだえ？』

『つい此間よ、まだ五六度しきや逢つてはしないわよ。』

『えらい腕だねえ、矢張すぐ引張られて了ふんだねえ。』

『またあんなことを……』

吸ひさしの巻煙草を男の顔にちよいと押附ける眞似をして玉子は笑つた。

『そして何んな人だえ？ 一體？』

『お爺ちやんよ。』

『お爺ちやんはわかつてるるけれど、これまでに遊びになど餘り來なかつたやうな人かえ？』



『まあさうね。……いやに窮屈な人よ。お酒を飲むと、それでもちつとはまづい長唄なんか唄ふけれど、お座敷にゐても餘り膝など崩さないっていふ方ですからね。遊んだことはない人でせうね。』

『いつも一人きりで来るの？』

『え、。』

『君の爲めから言へば、しかし、本當に好いことぢやないか。』男はいくらか眞面目な聲で、『それは、末の見込つて言ふことから言へば、わからないやうなもんだけれど、兎に角、そんなお客は今時分滅多にありやしないよ。君の爲めには、一時でも好いからさうして貰つた方が好いね。……しかし本當にさう言ふのかえ？』

『それは本當よ。』かう言つて、『しかし、私、考へるわよ、もう少し。それに、もし、さういふことになつたにしたらところで、貴方と別れて了ふことなんかイヤですからね。貴方はそれでも好い？ 私やさういふ風になつても、貴方は私を捨てない？ それを聞かして頂戴……』

男はちよつと考へて、『でもね……他人に圍はれちやつてはねえ。』

『そんな女は厭だつて言ふの？』

『さうぢやないけれど、何だか變ぢやないか。』

『ちつとも變なことなんかないぢやないの？ 私は金で買はれて行くんですもの。私が貴方を思つて

さへすりや好いぢやありませんか？ それで、向うで厭になればやめるだけのものだわ。』

『圍はれちやさうは行かないだらう。』

『行かないことなんかありやしないわ。いくらもあるぢやないの？ さういふ人は？ 私だつて、貴方がそんなことは厭だつて言ふなら、無理に行くつて言ひはしないわよ。やめるわよ。でも、私、構ひやしないと思ふわ。行つたつて、今と同じやうにしてゐるわよ。何時でも日をきめて逢ふわ。』女はちよつと途切れて、『私だつて、貴方でもゐなげりや、あんなお爺ちゃん機嫌なんか取れやしない。それに、私考へると、かうして澤山のお座敷をしてゐるよりか、さうする方が好いと思ふわ。お金だつて、さうすれば、今よりは融通はきくし……體も樂だし……。何んな面白い眞似でも出来るぢやないの？』

『それはさうだね。』

『今ぢや、抱妓だから、いくら稼いだつて駄目よ。姐さんの機嫌の好い顔を見る位のもんですからね。』

……しかし、達つて言ふ譯ぢやないんですよ。まだ母さんにも誰にも話さないんですから。』

『母さんに話して見給へな。』

『え、話して見るわ。けども、貴方の心を聞いてからと思つたのよ。』

『僕はしかし何うでも好いよ。』男は笑つて、『その方が好いかも知れない。君の爲めには少くとも好いね。僕が女房でもなくつて、金でもありや、かういふ時には、男の意地で大騒ぎをするつていふ幕なん



だけどね。僅かな月給を取つてゐる身ぢやさういふことも出来ないからね。』

『また、あんな厭味を言ふ。好う御座んすよ。さうなりや私なんかなくなつて、秀香さんとも誰とも思ふやうなことが出来て、結局好いんでせう。』

こんな話が長く續いた。廊下を通る女中は靜かに睦ましさうな話聲が其處から洩れて來るのを聞いた。二階では照吉姐さんの錆びた端唄の聲が靜かにしてゐた。

『ね、さうしませうね。暫くしてから急にかう言つた玉子の聲ははしやいで嬉しさうに聞えた。』それが面白いわ。こんな處で逢つてゐるよりかね。さうすれやね、何處か靜かな海岸へでも何處へでも行けるわね。先だつて毎日來てるッていふ譯ぢやなし、本宅もあつて忙しい體なんだから……。本當にね、さうしたら、何處かへ行きませうね。こつそり逢ふのね、昔の唄にでもありさうよ。かうしてきまつて逢つてゐるよりも、その方が何んなに嬉しいか知れやしないわ。隠れあそびッていふことが一番面白いもんですよ。』

『鈴木さんは何うするんだえ？』

『鈴木さん？』玉子はちよつと笑つて、『鈴木さんなんか構はないけども、けどもあの人も好い方よ。繪かきなんてあんな無邪氣なもんかしら、それや罪はないわよ。貴方見たことはあるわねえ。顔はあんな顔をしてゐるけれど、あれで、やさしい處があるのよ。氣分がさつぱりしてゐるわ。』

『ぢや鈴木さんにも内所で逢ふのかえ？』

『まさか……。私がいくら何でも……。』笑つて見せて、『ね、さうしませうね。嬉しい。』玉子は男の胸に顔を押し當てた。

## 十九

その年の秋の彼岸の中日の前の日から、旦那は來て泊つてゐた。二階の間からは、小さな貸家の混雑した低地を隔て、濁つた汚い色をした海が見渡されてゐた。昨夜の雨は此頃には似合はないほどの強い降りで、折角の大祭日も無駄になるなど、思つて寝てゐたが、今朝起きた時は、眩しいやうな好晴で、軒には雀が楽しさうな饒舌をつゞけてゐた。

旦那がまだ寝てゐる中に、階下に入りて來た玉子は、其處の机の上に、女の名で書いた手紙が一通そつと載せられてあるのを見た。それは昨日旦那が來てから出した手紙の返事であつた。玉子は急いでそれを取つて、走り讀みに讀んで帶の間に挟んだが、それから俄かにそはく、と落附かなくなり出した。で、旦那と一緒に取膳か何かで朝飯をすまして茶を飲んでゐるが、『小づかひを少し置いて行かうな。』かう言つて旦那が財布を出しかけたのを見て、

『貴方、そこにもう十圓なくつて？』



『何うするんだえ？ いるのかえ？』

『え、ちよつと買ひたいものがあるのよ。此間、銀座を通つたら、それは好い襟があつたのよ。震ひつきたいやうなのよ。それに、紙入がわるくなつたから……』

『襟は此間買つたばかりぢやないか。』

『でも欲しいのよ。』

『此處にはあるけれども……少し入用な金だけでも……』

旦那が躊躇してゐるのを、

『好いわよ、頂戴よ。』

かう言つて無理に貰つて、『これで買へるわ。本當にそれは好い襟よ。夢にまで見たんですもの。』嬉しさうな顔をして、

『本當に、お金ツてよく要るものね。お小遣なんてぢきなくなつて了ふのよ。母さんの許へも無沙汰をしてるし、叔父さんの許へも近い内に行つて来ようと思つてゐるのよ。また、土産を買つて行かなくちやならない。』

旦那は五五六の、何方かと言へば瘦せた方の人であつた。イヤにむつゝりして、容態振つて、朝起きて来た時に、『お目覚めですか、』とか何とか言つて下女が丁寧挨拶しないと機嫌がわるいといふ風で

あつた。市會議員はこの前の選挙で落選したが、區では羽振の好い方で、護謨の店が銀座の通りにあつた。子供は總領が中學校に通つてゐた。

胸の處に赤い大きな痣のあるのが玉子には常に氣になつてゐた。それを見ると、厭な氣がした。『何うしてこんな人の世話になる氣になつたのかしら、』など、自分で後悔するやうなこともあつた。その痣が胸一杯に蔽ひかぶさるやうに大きくなつた夢から覺めた時には、玉子はゾツとして體が震へた。

『お咲、お咲。』

かう呼ぶ聲が常に二階から聞えて来た。

いつも来た翌日は、屹度早く歸つて行くのに、その日は午近くまで長火鉢の傍で新聞などを讀んでぐづぐづしてゐた。段々玉子は氣が氣でなくなつて来てゐた。帯の間に挟んだ手紙のことが絶えず玉子の頭の中にあつた。『今日は緩くりしていらつしやる？』かう訊くと、『うむ、さうもしてられないが……用も少しあるけれど、』など、言ひながら、矢張ぐづぐづしてゐた。手紙にはかねて約束して置いた時間が書いてあつた。實は来るか来るかと思つて居た返事が昨夜来ないから、今日は駄目なのかと今朝まで思つてゐた。それにあの雨でもあつた。『明日は駄目。』かう玉子は思つて失望して寢てゐた。それなのに……手紙が来たのに……天氣が好いの……

『貴方お午の支度をするの？』



『何アに好い。』旦那はかう言つて矢張其處に坐つてゐた。

まに時間はあるけれど、髪だつて直して行かなければならないし、支度もしなければならぬし、困つて了つて玉子がゐると、運好く其處へいつも借りつけてゐる酒屋から、『電話です、』と小僧が言つて来た。

肥つた中年の田舎出の下女が出かけて行つて訊くと、店から、旦那にすぐ来て下さるやうにッて番頭さんが掛けてよこしたとのことであつた。『ウム、今すぐ行く。』かう言つて漸く旦那は出かける支度をした。

旦那を見送つて、茶の間へ歸ると、玉子はすぐ鏡臺を出して髪を直し始めた。髪結さんを呼んで来て、大急ぎで結つて貰はうかとも一度は思つて見たが、時計がもう一時半の處を指してゐるので、すぐ思ひ返して、亂れた髪を自分で梳いた。

『二時頃、向うの停車場へ行つて待つてゐますから。』かうその手紙には書いてあつた。

大島お召の一枚着に黒い鶉縮緬の羽織を着て、成たけ眼に立たないやう扮装をして、旦那に買つて貰つたダイヤの指環と小林に買つて貰つた金の浮彫の指環とをはめて、『ちよつと、家まで行つて来るからね。歸りはそんなに遅くならないつもりだけれども……殊によると夜になるかも知れないからね。』かう下女に言つて出がけに、財布の中のさつきの金を改めて見て、浮々した顔をして玉子は出かけて行つた。

電車のレールを横切つて、大きな停車場に來た時には、時計はもう二時半の處を指してゐた。汽車の時刻を見ると、あと二十分待たなければならぬ。いつそ向うの電車で行かうかとも思つたが、先に乗替の場所があつたり何かするのを思ひ出して、仕方がないから其處で汽車を待つことにした。

山手の方へ行く電車が絶えず待つてゐる玉子の前を通つて行つた。種々な人達がぞろ／＼と乗つたり降りたりするのがほつねんとして腰を掛けてゐる玉子の眼に映つて行つた。『汽車で行つたかしら。電車で行つたかしら？ 屹度電車で行つた。もう遅いつて待つてゐるだらう。』こんなことを考へた玉子の眼には、此前嬉曳した土藏に近い一間が浮んで見えた。障子を開けると、黒い色をした土藏と裁込の松とが見えた。それは午後の三時頃で、向うの待合の座敷に客がゐて、三味線の音などが聞えてゐた。玉子が勘定をしようとするに、『好いよ、今日は僕が出すよ。持つてゐるよ、』など、言つて、男は玉子のやつたお揃ひの古代更紗の縫ひつぶしの財布を懐から出した。

やがてやつて來た汽車に待乗るやうにして乗つた玉子は、其處にかねて中のよかつた若い妓が大丸髷に結つて、洋服姿の中年のお客と一緒に乗つてゐるのにはつたり顔を合せて了つた。

『まアお琴さん。』

『雪江さん。』

かう言つて二人は寄つて行つた。車中の人達は皆な視線を此方へ向けた。



『まあ好いわねえ、京都？ 奈良？ 羨ましいわねえ。』玉子は一緒に来た客の方を見ないやうにして見ながら、『本當に羨ましいわ。今は好いでせうね。氣候が好いから。さうね、紅葉にはまだ早いけれど。幾日位？ 五日位？ 大阪にも行くの？ 好いわねえ。』

玉子は小聲で何か言ふと、若い妓は笑つて點頭いて見せた。客は玉子の方を頻りに見てゐた。

やがて次の停車場が来た。挨拶して下りて行つた玉子は、プラットホームにも何處にも男の姿を見出すことが出来なかつた。わざ／＼二等待合室までも入つて見たが、矢張其處にもゐなかつた。何うしたんだらうと思つてゐると、向うの茶屋から急いで此方へ驅けて来る男の姿が見えた。

『何うしたの？』

『ちよつと其處に休んでゐたんだよ。電車で来るか、汽車で来るかわからないもんだから、彼方へ行つたり此方へ來たりしてゐたんだよ。』

『待つたでせう？』

『随分待つた。』

停車場を出て並んで歩きながら、

『私、何んなに氣を揉んだか知れないわ。歸りさうにしてゐて、中々歸らないんですもの。私何うしようかと思つて、立つたりゐたりしてたわ。電話が家からかゝつて來なけれやまだゐたのよ。だから、

御覽なさいよ、髪なんか壞れたまゝよ。』かう言つて髪を見せるやうにして、『まあ、好かつたわ。まさか、貴方は歸りやしないとと思つたけれど……。それに、今お琴さんに逢つた。』

『何處で？』

『汽車の中で、大丸鬻か何かで上方見物よ。』

『四十位の髻の生えた男が一緒だつたらう？ あれは立花ツて言ふお役人だよ。』

『よく知つてるわねえ。……けども、お琴さん、濱町の方が大切なんぢやないの？』

『それはさうさ。』

二人はいつか踏切の處へ來てゐた。車夫があとから煩さく附纏つて來た。

『彼處に行くんでせう？』

『何うでも好いけど……』

『彼處へ行きませうよ……ね、歩いて行きませう。』

二人は靜かに戀人のやうにして歩いて行つた。晴れた秋の日が長い／＼路を照してゐた。そこには枝柿の紅いのが並べてある店があつたり、鶏を澤山飼つた養鶏所があつたり、蒼い顔をして若い男がせつせと板を削つてゐる指物師の仕事場があつたりした。二人は成たけ裏道のやうな細い通りを歩いて行つた。三十分程経つた後には、二人は崖に凭つた大きな家の見晴しの好い一間から、野を横ぎつて行く汽車の



白い烟などを見てゐた。風呂場は三和土になつてゐて、内から鍵が掛るやうに出来てゐた。湯に入りながら二人は遠い海を眺めた。

『さうなの？』

ふと玉子は思ひ出したやうに言つた。途中で、二人は鈴木のことを話しながら歩いて来た。『さうなの？ 千鳥さんが聘ばれてゐるの？』

急に玉子が引いたので、晝を書きに田舎の方へ行つてゐた鈴木は、歸つて来てから一方ならず落膽した。其處の待合の女將が一生懸命に別の女を取持たうとしても、容易にそれに應じなかつた。取替へ引替へ聘んで見せた女も一人として氣に入つたものはなかつた。酔ふと、あのおとなしい人があばれて騒いで、『俺の雪江を伴れて来い、』など、女中を困らせた。

『矢張、君の腕だね。』かうその話をしながら男は笑つた。玉子は生効のあるやうな氣がした。自分の持つてゐる容色が、さうまで容易に男を引きつけることの出来るのが玉子には嬉しかつた。身を投げて死なうとした去年の自分、あれは矢張この自分だつたかしら。といふ風にすら思はれた。世の中には面白いことが澤山に澤山にあつた。玉子は湯から上がつて了ふまで鈴木のことを頭から離さなかつた。

何をしてても差支ないやうな一間に二人は日の暮れる頃までゐた。前の野には茫と靜かに靄が下りて、光鈍のない赤い丸い月が浮び上るやうに海から昇つた。玉子は圍ひ者の厭な生活を絶えず男に話して聞か

せた。『それや、私、随分我儘にしてゐるのよ。厭な時には遠慮なく厭な顔をしてやるわ。金だつて、随分出させてやるのよ。今度一度来て御覽なさいな。大丈夫ですよ。下女が田舎者で知らないから大丈夫ですよ。旦那が来てたつて差支ないわ。従兄とか何とか言つて置くわよ。それや、いろんな道具なんか随分買つたわ。あ、いふ處で、二人で暮らすんだと嬉しいけども、貴方には奥さんはあるしね、何うせ駄目ね。』

男は男で、父親の病氣の段々重くなつて行く話などをした。『君も知つてゐるけども、僕の父はお濱奉行か何かしてゐて、昔は随分遊んだ通人なんだけども、あゝなつて了つてはもう駄目だね。それに昨日あたりから大分悪いんだよ。今度は駄目かも知れないよ、』など、言つた。玉子は引かされてから、一度男の家に訪ねて行つて、粹な父親と綺麗な細君と可愛い三つ位になる男の子とを見た。男は市役所の方に勤めてゐて、月給はさう澤山は取つてゐないけれど、家にはかなり財産があつて、庭に面した座敷などは瀟洒なつくりが出来てゐた。父親に望まれて、玉子は其處で清元などを弾いて一日面白く遊んで来た。引かされない以前に家で聘んでゐた藝者位に男の細君は思つてゐるらしかつた。

『好い月だね。』

『歸るのはいやねえ。今夜泊つて行きませうか。大丈夫ですよ。今日歸つたばかりだから、來る心配はないわよ、さうしませうよ。』



『でも今日は歸らう。家の父の方も心配だから。』

『ふい。』

いかにも残念さうに玉子は言つた。沈んだ銀色をした野の靄の中に、白い烟を立て、通つて行く汽車はまるで繪か何ぞのやうに見えた。月の光は流るゝやうにあたりを照らした。

二人が其處を出たのは、もう彼是十時に近かつた。頼んで置いた車はずつと離れた門の處に置いてあつた。樹の間を洩れる月の光を受けながら、二人は其處まで靜かに下りて行つた。

汽車の時間の都合がわるいので、歸りに二人は電車の方を選んだ。空いてゐる電車の中では、二人は隅の方に腰を掛けた、蔭で手を握り合つたりなどした。電車を下りた處で、二人は重ねて逢ふ日と所とを約して別れた。

玉子は遊び勞れてゐた。行く時歩いた長い路の疲勞なども出てゐた。樂しかつた一日の逢瀬を繰返しながら、『歸つたらすぐ寝よう、』など、思つて歩いた。

座敷に灯の明るくついてゐるのを不思議にして上つて行つた玉子は、其處に旦那の來てゐるのをすぐ知つた。『おや、旦那がいらしたの？』かういくらか慌て氣味で迎へに出た下女に言つて、すぐ座敷の方へ行つた。『遅くなつちやつて……家へ行つて、妹をつれて銀座へ行つて、彼方此方ぶら／＼歩いたり何かしたもんだから、つい遅くなつちやつて……母さんがよろしく言つてゐましたよ。その中來る』

ツて。『こんなことを言つてゐる玉子の聲が其處から聞えた。』

やがて此方へやつて來た玉子は思はず溜息が出た。緩くり寝ようと思つて來たのも駄目だつた。これから一夜過ぎなければならぬ二階の間が、すぐ玉子の眼の前に浮んで見えた。玉子は疊んだ着物の上に帯やら赤い帯揚やらを載せながら、また深く／＼溜息をついた。

二十

座敷の違ひ棚の上に置いてある幅物をひろげて見せたり、此間買つた箆笥の鍵を明けて新たに作つた派手な長襦袢を見せたり、旦那が好きで本宅から持つて來た貴重な花瓶や茶器を見せたりなどしてから、玉子は男を二階の方に伴れて行つた。其處には玉章の秋景山水の幅物がかけてあつて、伊萬里燒の花瓶に大輪の菊が見事に生けてあつた。『私なんかとても出來ないわ。皆なあの人が來て生けて行くんですよ。大變よ、花をいぢり始めると、半日位すうつと坐つてゐるんですからね。』

ふと思ひ出したやうに、

『さう言へば、此間、本宅のお上さんが來たわよ。私を圍つて置くことが段々知れたんだわねえ。是非行つて見るツて、誰がとめてもきかないんですツて。それは勝氣な人よ。年はうちの母さん位だわ。前から來るかも知れないとは聞いてゐるけれど、其時は吃驚してよ。突然に下女を一人つれて遣』



つて来たんでせう。私、どきまぎして何うしようかしらと思つたわ。さうね、それでも一時間位ゐたわ。襟なんかお土産に持つて来て呉れてよ。變なもんね。私、あの時ばかりはつくづく厭になつて了つた。』

こんな話を玉子は長々とした。男は二階からおりて、縁側から庭石傳ひに裁込みの中に入つて行つて見たりした。『圍ひ者の暮しッて、かういふもんかね。のんきなもんだね。一日何をしてゐるんだえ？』こんなことを言つて男が笑ふと、『だから、始終、貴方のことばかり考へてゐるッて言つてるぢやありませんか。』などと玉子は笑つた。一時間ほど男は其處にゐた。

下女のゐる前で、

『そこら歩いて見ませうか。』

『さうだね。都合がわるくないかえ？』

『ちよつとなら好いでせう。』

『ぢや、行つて見ようか。』

こんなことを言つて、二人は出かける支度をした。下女は別に疑はしいといふやうな様子をも見せなかつた。『ぢや行つていらつしやいまし。』

と言つて立關まで送つて出て来た。

公園前で電車を下りて、菊の花壇などのある處を二人は並んで靜かに歩いた。娘達の派手な蝙蝠傘や、

母親の伴れた女の兒の綺麗な友禪などに、午後の秋の日影は晴れやかにさしわたつて、黄くなつた葉は風もないのにヒラ／＼と靜かに舞つて散つてゐる。うね／＼曲つて上つて行つた丘の上からは、樹の間を隔て、海が明るく遠く眺められた。其處では赤い襷をかけた若い女中が二人の方へ茶を運んで來ながら、二人の姿を見ぬやうにしてじろ／＼と見て行つた。色の白いすつきりとした男の姿が玉子には此上なく嬉しかつた。

やがて暗い樹の間の路から池のある方へと出て行つた二人は、其處で、二錢銅貨を小さな箱の中に入れて麩を池の中に投げてやつた。大きな鯉は彼方からも此方からも集まつて來た。麩は浮いたり沈んだりした。

池の向うには、廣い綺麗な通りがあつて、自動車や馬車が絶えず通つてゐた。日は麗かに樹の間の紅葉を照してゐた。

池の方からその通りの方へ出て行かうとした時、玉子は急に顔を背けて向うを向いて了つた。其處には一臺の車が通つてゐた。男は知らずに歩いて行つたが、その車をすこしやり過してから傍に寄つて來た玉子は、小聲で、

『御覽なさいよ其處を。』

『え？』



『あれがさうよ、大杉よ。』

『え！』

男の眼にはフロックコートを着て山高帽をかぶつた車上の老紳士の後姿が見えてゐた。

死の床に臥つてゐる男の父親の経過を玉子は常に詳しく聞いて知つてゐた。とてもあと十日とは持つまいといふ醫師の宣告を受けてからでも、もうかれは一月以上にもなつてゐた。此頃では子供の世話と看病とに追はれて細君が朝の化粧をする暇もないといふことや、田舎からその父親の姪に當る女が頼まれてやつて來た話や、財産の後見を姉の嫁いでゐる義兄に頼んだことや、さういふことを玉子はかなり詳しく知つてゐた。男の姉は濠端の町の金銀寶石商に嫁いでゐて、玉子はその店から月賦で金の指環や金の簪などを買った。

『さう？ 困るわねえ、もうすつかり立てなくなつたの？』などと、玉子は言つた。

思ひもかけない玉子から父親の容體などを訊かれた男の姉は、『さうかえ？ お前が知つてゐる藝者だつたのかえ？ 今は何處にゐるの？ 圍はれてゐるのかえ？ うちにも來て、父さんも知つてゐるんだつて？ さうとは知らないから不思議だと思つたよ。』かう姉は弟に言つた。

男はまた男で、玉子の家の細い事情や、大杉の店の話などによく熟してゐた。大杉の銀座の店に、つい近頃つかひ込みをした番頭があつて、それが訴へられた話だの、中學に通つてゐる大杉の息子が今から浅草のわるい處に出かけて行つて困る話などをも知つてゐた。人の知らない蔭の方に身を置いて、互に思ひもかけない人の身の上を深く知つてゐるのを、男も女も不思議なやうな心持で見つてゐた。玉子の母親は玉子の引かされる時から、さういふ男の蔭にあるのを知つて許して置いたのではあるが——四五度は男も玉子の父親の家を訪ねて行つたことがあるので、それでも時々心配して、意見がましいことを母親が言ふことがあると、『大丈夫よ、もし大杉に知れたら知れたで好いわ。もう、少しは知れてるかも知れないわ……でも、好いぢやないの？ 母さんなんか、そんなことを心配しないで、月々の手當さへ私が上げるやうにしてゐるさへすれや好いぢやないの？ 何も言はないで此頃は何うやら彼うやら御飯が食べて行かれるぢやありませんか。』かういつも玉子に言はれるので、後には母親も口を噤んで了はなければならなかつた。何も彼も玉子のお蔭と言へばお蔭であつた。小林とわかれた時に貰つた金も、今でもちやんと貯金に残つてゐる身分になつてゐた。

男の父親が愈いけなといふ二三日前に、玉子は自分の父親が同僚の連帯責任の證文の判を捺して必死に困つてゐるからと言つて、旦那から金を無理に五十圓工面して貰つた。そして、其日の午後、銀行に行つて、自分の貯金から五十圓出して、それを小さな財布に入れて、帯の間に挟んで其處から出て來た。玉子の貯金帳にはかなりの金額が記されてあつた。玉子は一生懸命になつて稼いだ時のことなどを考へながら歩いた。大勢の客から二圓三圓と貰つた金をせつせと貯めて置いた頃には、何でも金でなければ駄



目だといふ風に考へてゐた。『お寶さへあれば何んな好きなことでも出来るわねえ、』など、言つてゐた。いつも逢ふ處では、其日は男は先に行つて待つてゐた。『何う？ お父さん』かう言つて、玉子はさも氣前が好さうに、帯の間の財布から四つに折つた札を出して、『私、持つてるから、融通して置くわ。つかつて下さいよ……氣の毒なことなんかちつともないわ……貴方のお父さんの役に立つんですもの……返すのなんかいつだつて好いわ、』玉子の顔には得意の色が上つてゐた。

男の父親の通夜に出かけて行つた時には、玉子は不愉快な思ひをして歸つて來た。『私、本當に行つても好いかしら？ をかしくないかしら？』かう度々念を押したが、『さうして呉れ、ば死んだ佛が喜ぶよ。』かう男は言ふし、男の細君も二人の今の關係には疑を挟んでゐないと言ふので、それで玉子は出かける氣になつた。秘密の好奇心にも二人は誘はれてゐた。其處には大勢人が集まつてゐた。『佛さまには一度お目にかゝつたきりですけども、惜しいことを致しました、』など、玉子は細君や男の姉などに挨拶した。

『まあ、何うぞ此方へ？』など、姉は座敷の方に玉子を伴れて行つた。

棺の前に行つて線香を上げたり、白い手を合せて長い間祈念したりする姿は、一座の中に際立つて見えてゐた。玉子は落附いて、つゝ、まじやかな口の利き方をして坐つてゐたが、その眼は絶えず細君と男の跡を追つてゐた。惚れ合つて一緒になつたといふだけに、何處か睦ましいところのあるのを玉子は見た。細君は綺麗におつくりをして、指環などをはめて、來る人達にしとやかに挨拶してゐた。『貴方、貴方、ちよいと、』など、呼ぶ聲が艶に聞えた。

この大勢の客の中で、誰も知るまいが、自分が一番蔭で力になつてやつてゐるといふ玉子の最初の得意は、次第に男と細君との睦ましい態度に崩されて行つた。何となく此大勢の客が——殊に女客達が自分を見て笑つてゐる様にすら思はれて來た。『あ、左様ですか、御深切にまア、』など、丁寧に不思議さうに挨拶されると、玉子は益々堅くならずには居られなかつた。わざと避けるやうにしてその傍を通つて行く細君の冷かな態度も、痛く玉子の心に觸れた。玉子は神経の昂つたやうな顔をして、隅の方に小さくなつて坐つてゐた。

忙しいと言ひながら、その傍に男の遣つて來ないのも玉子には口惜しかつた。やつと來て其處に坐つてもさも落附かないといふやうな風ですぐ向うに行つて了つた。

夜遅く鮎だの酒だのが出て、客が賑かに話し始めた頃、縁側で、男と摩れ違つた玉子は、小聲で、

『私、歸りませうかしら？』

『何うして？』

『でも、家の方も少しは心配になるわ。これでも……』

『でも斷つて來たんだらう？』



『それは断つて来たには来たけれども……』

『もう一時だよ。歸れやしませんよ。』男はかう言つて、『此方に來て鎚でもお上がんなさい。』

三時過ぎになつて、起きてゐたものも多くは別室に寢に行つた時分男は言つた。『僕も御免蒙つて、ちよつと寢かして貰ふから。明日もあるからな。雪ちやんは何うです。』

『私は——』と言つて玉子は起きてゐるといふ顔をして見せた。

『お寢よ、お前、本當に明日があるよ。昨夜も寢なかつたんだらう。私が今夜は代つて上げるから、かう姉は傍から言つた。』

男が向うの一間に行つてからの氣勢は絶えず玉子の耳についてゐた。細君は續いて入つて行つたが、容易に其處から出て來ようとはしなかつた。靜かな陸しさうな話聲が長い間聞えてゐた。しかし後にはそれもぱつたりやんで了つた。細君も其處に寢て了つたらしかつた。棺の前の線香の灰は音もなく落ちて、蠟燭がチラチラした。覺めたサツとした玉子の顔は、夜明近い一間の中に塑像のやうに白くくつきりと見えてゐた。

其次ぎに逢つた時、男は種々に言つて玉子に詫びた。『だって、あの時は仕方がなかつたんだから……それに、僕はそんな風には思つてゐなかつたんだからね。』

『男ツて薄情ね。』

『さういふ譯ぢやないんだよ。さうと知つてゐれや、寢たりなんぞしなかつたけれど……』

『しかし、私は考へたわ。何うせ、貴方には奥さんがあるんだし、いくら、貴方がやさしいことを言つて下すつたツて、私なんか何うせ蔭のもんですからね……本當に、私は染々今度は考へたわ。』

『僕がわるかつたんだから、あやまるから、そのことはもう言はずに置いてお呉れ……』

玉子は黙つて凝と考へ込んでゐた。『本當に妻になつて呉れる……本當かえ？』など、男は前にも度々言つたが、さういふことは到底出來ないことだといふことを玉子は今更のやうに思ひ知つた。『矢張、自分一人だ、ひとりできびしく送つて行かなければならない身だ。』かういふ風に考へると、つくづく末のことが思ひ廻らされた。何うなつて行く身だか知れないやうにすら思はれた。

旦那と脊中合せに寢てゐる時などは、殊にさういふことが種々身に迫つて來て、嵐のやうな高聲を聞きながら、玉子はそつと長襦袢の袖で涙を拭いた。つかまへどころのないやうな自分の生活がたまらなく悲しかつた。世間では、玉子位の年恰好になれば、皆柔かな家庭の束縛の中に身を入れて、縋るべき何物をか持つてゐないものはなかつた。自分の學校友達で、むづかしい姑のある家に嫁づいて、年中酷められ通して泣いて暮してゐる人などもあつたが、さういふ生活でも、自分の今の生活よりは増したと玉子は思つた。玉子は幼くて田舎に行つた自分のことなどを繰返して、涙は枕の紙を濡らした。

さうかと思ふと、軽い氣分になつて、はしやいで騒ぎ廻つてゐる自分が其處にも此處にも見えた。『ま



ア、あの妓位元氣な妓はないよ。利口で、如才がなくなつて、それで貯金などをしてゐるんだとき。』かうある女將が評判してゐたことなどを玉子は思ひ出した。何うして好いかわからないやうな自分の生活であつた。時には弟や妹のことなど考へることもあつた。本屋に行つた弟は段々主人に用ひられるやうになつて行つてはゐるが、地が弱い體で、それが父母の面倒をみるやうになるのはまだ容易なことではなかつた。機械商の工場に行つてゐる弟だつて矢張さうだ。妹は妹で、末子のあまやかして育つて、何處かのお嬢さんで、もあるやうに、來年は女學校に入れてやらうなど、父母は言つてゐた。『私ばかりは誰れも考へて呉れる人がない。』かう思ふと玉子はいつも堪らなく悲しくなつた。

ふと鈴木のことなどが思ひだされて來たりした。其時には、『俺の雪江をつれて來い、』と言つた言葉が暗い闇の中に、字になつてはつきりと見えて來た。何故あの時、田舎から歸つて來るまで待つてゐなかつたらう。待つてゐて、詳しく話して、お禮を言つて別れて來なかつたらう。こんなことを思ひながら、玉子は最後に會つた一間の光景をくりかへした。その時、引かされることはもうちやんときまつてわかつてゐた。それを、知らん顔をして、そんなことは夢にもないやうな無邪氣な顔をして、『歸つたら、すぐ入らつしやい、』など、言つて玉子は送つて行つた。玉子は坂の上の明るい晝室の隅に立てかけて置いてある自分の肖像畫などを思ひ浮べた。

## 二十一

蔭に男があるといふことが薄々旦那の耳に入つて、唯でさへ難かしい顔が一層難かしい顔になつたが、いくらか自暴氣味で、平氣で玉子が家を明けるやうになつた頃には、旦那の足はもう餘程遠退いて行つてゐた。大切な道具類を店の番頭が取りに來たりなどした。

その年の暮近い頃には、玉子はもう其處から父母の家へと戻つて來てゐた。今度のことは、此方から打壞したやうな形になつてゐるので、買つて貰つたものだけはそのまま、貰ふことが出來たが、別れの金はいくらも手にすることが出來なかつた。『此方にもさういふ弱味があるんですから、まあ、その位で我慢して置く方が好いでせう。』仲に入つた人はかう言つて歸つて行つた。

不思議にも男の方では、その頃から熱い心を見せて來てゐた。度々父母の家に玉子を訪ねて來た。『母さん本當に、お咲を下さいますか。下さるなら、私にも少し考へることがありますから。』かう眞面目に男が母親に向つて言つた時には、母親の同情は却つて男の細君の方に行つてゐた。『さう言つて下さるのは、本當に有難いですけども……貴方だつて、奥さんやお子さんの事を少し考へて上げなければいけません。さういふことはよく世間にはあることですから、奥さんを出して、自分の好きな女を跡に直して、二年と経たない中にまたその女を出したといふ話はよくあることですから、』など、母親は言つた。玉子



に向つては『お前、それは駄目だよ。そんな真似はしない方が好いよ。お前はまだ年が行かないから、唯さう考へるかも知れないけれども、子供のある處へ行つて、お前がどうしてちつとして長く居られるもんですか。それに、さういふ罪なことはしない方が好いよ。』

『それもさうね。』

かう言つた玉子は、淋しいやうな悲しいやうな思ひに包まれずには居られなかつた。それはいくら此方で真心をつくしても、向うでそれを真劍に受けて呉れないといふやうな悲哀であつた。たとへ向うで真劍に受けて呉れたにしても、それを真劍に受けて呉れたと信ずることの出来ないやうな悲哀であつた。縋りたいにも、本當に縋る心がいつか玉子にはなくなつて了つてゐた。

小林に別れた時分、ある大きな老肆から嫁に望まれたことなどを玉子はをり／＼思ひ出した。其時、嫁けば嫁けないことはなかつた。さういふ稼業をしたことをも先方ではかなりよく知つてゐてそして望んで來てゐたのであつた。しかし其時は何うしても人の細君にならうとするやうな氣はなかつた。

『僕の許に來られないなら、此際すつかり足を洗つて、丸髷に結つて了方が好いよ。いつまであゝいふ稼業をしてゐたつて、何うせ好いことはありやしないんだから。』男は玉子にかう言つてきかせた。

玉子は種々に思ひ惑つて日を送つた。自由な、のんきな年の暮ではあつたけれど、自分の一生のある境目に立つてゐるやうな氣は絶えず玉子の胸にあつた。今度また襦を取るやうなことがあれば、それこ

そもう一生其處から出て來ない覺悟でなければならぬ。かう思ふと、玉子は、堪らなく淋しく頼りないやうな悲しい心持がした。大勢の客の顔なども眼の前を通つて行つた。大晦日近い頃には、男が來て、一緒に注連飾りの賑かな明るい町を散歩したりなどした。

二月ほどは唯ぶら／＼と遊んでゐるが、矢張、襦を取るより他に仕方がないといふことが段々身に迫つて知れて來た。玉子は此場合、男が何うすることも出來ないでゐるのを情ないとも悲しいとも思つた。

『矢張、男なんて頼りにならないものね。』かう玉子は母親に言つた。

ある日、濠端のある待合に遊びに出かけて行つた玉子は、其處で川に近いある土地に出て見る氣はないかと女將から勧められた。其處は體が樂な上に、客種もよく、祝儀も多く、流行りさへすれば、此土地のやうなことは決してない。此方から出かけて行つた人でも、其處では皆な好い旦那が出來たり、自前になつたりして樂に暮してゐる。『そりや好いところださうですよ。宅でも父の内職仕事にやらして見てゐるんですがね、餘程樂なところらしいよ、出て見る氣はないかえ、雪ちやん。丁度今前にゐた妓が自前になつて、誰もゐなくつて、一人欲しいと思つてゐるところだがね。雪ちやんが行つて呉れよば、これ程好いことはないんだけれど……わけが出て見る氣はないかね。雪ちやんなんかやめて了ふのは惜しいよ。今、稼ぎ盛りぢやないか。』かう勧められた玉子は、いくら心が動いて歸つて來た。今までの土地には、いくら何でも、もうきまりがわるくつて出られないが、さういふところなら出て見るのも面



白いなど、も玉子は思つた。『だって、遊んでゐたつて、本當に仕方がないものねえ。もう一度出て見ようかねえ、母さん。その代り、今度出れやもう藝者を一生する氣よ。引かされたり何かするのはもう厭よ。それもねえ、しつかりした、此方でも一生世話にならうといふ人なら別だけれど。』かう玉子は言つて考へて、『お茶屋は大きいのが五六軒に、小さいのが七八軒、待合はさうたんとないんですつて。東京からお客がつか込みか何かで出かけて行くやうなところですからね。お茶屋が大抵は旅館をかねてゐるんですつて。樂だつて、春月のお上さん話してゐてよ。それはね、藝は少しは要るんださうだけれど、本當に、藝に身を入れようとするには好い處だつて。中から幫間だの姐さんだのが始終來る處なんですからね……さうね、お茶屋に馴染になるまでは大變だけれども……それはあそこの方が皆な知つてゐるから樂だけれども、體は彼處では樂つて言ふ譯には行かないからね。』

母親は玉子の身の上を哀れに思はない譯には行かなかつた。世が世ならなど、言つて溜息を吐いた。『これも皆な父さんが甲斐性がないからだよ。神戸に行つた時でも、北海道に行つた時でも、もう少し骨を折つて呉れさへすれば、お前に、こんなに苦勞をかけなくても好かつただけれど。』かう言つて考へて、『でもね、遊んでゐても仕方がないねえ。』母親は玉子のほつそりした體を傷ましうにして見た。

それから一月ほどしてから、愈出ることゝ話がきまつて、その支度に取りかゝつたが、今度ほど悲しい辛い心持を親子は經驗したことがなかつた。行く／＼妹に娶はしても好いと思つて、目をかけてやつて

ゐる近所の不仕合せな少年は、丁度其處にやつて來てゐたが、『また、姉さん出るんですか。僕が……僕がもう少し大きくなつてゐれば、姉さんなんか出さんぢやないけれど、』など、言つて可愛い眼に涙を湛へた。皆な誘はれて泣いたりした。『母さん、浮氣なんかもうこれからしませんよ。しつかりしなくつては、身が立つて行かないんですもの。私、今度こそ眞面目に、眞劍になつて働くわ。男なんかあてにしては駄目ですよ。』玉子は下唇を咬みながら言つた。

その家は細い小路の中ほどにあつて、隣り近所からは三味線の音が賑かに聞えて來た。突當りの湯屋からは毛すぢを長く鬢にさして、ほんのりした顔をして、だらしない風で若い藝者が出て來たりなどした。

『何つて、まア、さびしいところだらう。』初めて其處に行つた玉子は、さう思はずには居られなかつた。そこは春月の女將のお父さんと召使ひの婆さんと二人きりの暮しで、玉子の寢る二階には、壊れかけた本箱があるばかりで、簞笥一つ置いてなかつた。裏にはさびしい廣場が見渡されて、溝のやうに黒く濁つた池に、細い寒い雨が靜かに降つてゐた。

下に置いてある簞笥を借りて、玉子は持つて來た着物や帶などを入れた。『ちや、この下の二つを雪ぢやんの抽斗にして置きますからね。』一緒に來て呉れた春月の女將はかう言つて何彼と世話をして呉れて、『本當に年寄一人ですからね、何ぞと言つては、雪ぢやんのお世話になるんでせうから、よろしくお願



ひしますから、『など、言つて歸つて行つた。お弘めの日は、誰も来て世話をして呉れるものはなかつた。来る筈の母親も、二三日此方持病の眼が急に悪くなつたと言つて來なかつた。玉子は婆さんを相手にいろく支度をしなければならなかつた。』

お茶屋は離れぐにちこち散らばつてゐた。遠い河の縁にある大きな料理店までは一里近くもあつた。午前に近所を歩いて廻つて、午から玉子は車で遠くの方へ出かけた。田圃の中を通つて行くやうなところもあれば、土堤をすつと下りて行くやうなところもあつた。ある茶屋では、如才のない女將が、じろく玉子の顔を見て、『竹次さんのあとに來たのかえ？ また、かけて上げますからね、』など、深切に言つて呉れた。さびしい田圃の向うに、大きな川が流れて、ペンキ塗の小蒸汽が波を截つて通つて行くのがあたりに浮き出すやうに見えてゐた。

その夜は、竹次の旦那といふ人がお座敷をつけて呉れた他に三口ほど續いて聘ばれて行つた。『お弘めの日に、それだけ出來れば結構ですよ。今はひまなんですからね。その代り花でも咲くと賑かになりますよ。』かう婆さんは慰め顔に言つて呉れた。

玉子は時間過ぎて二階に行つて寝たが、何とも言はれないやうな淋しい悲しい思ひにうたれて、容易に眠ることが出來なかつた。蛙の聲が裏の池から靜かに聞えて來た。

一時間ほどしてから、玉子は寢巻のまゝで、下に硯箱と巻紙とを取りに下りて言つたが、やがて蒲團

の上に蹲りながら、長い間かゝつて一通の手紙を書いた。『まだ、あそこにあるか何うだかわからないけども出して見よう……。』かう思ひながら、玉子は巻いた手紙を封筒に入れて、鈴木番地と名前とを書いた。鈴木さんのやさしいさつぱりした氣分が今は玉子の胸に温かく蘇つて來てゐた。『明日は早く出して貰はう。』かう思つて玉子は寝た。

あくる日の午頃には、玉子の姿は、土堤の上の自動電話の中に長い間見えてゐた。其處からは、河の波を截つて行く小蒸汽や、夫婦連で櫓を押してゐる傳馬などが見えてゐた。『私、誰れだかわかつて？』

私、今度此方から出たんですがね。竹本の小妻つて言つて出たんですがね。お近い中に來て下さるわね。さう……。それぢや何うぞね。』かういふ電話を何遍となく繰返してあちこちに玉子はかけた。『あなた本局の五千十番、藤本さんは出勤してゐらつしやるでせうか、』など、いふ聲も聞えた。遠藤と一緒に遊びに來た時分の醫師の處へも玉子は電話をかけた。

一三日経つてから、河沿ひの大きな料理屋から電話がかゝつて來た。それは出てから始めて行く家で、誰が掛けて呉れたんだらうなど、思ひながら玉子は出懸けて行つた。帳場で女將に挨拶して、女中にそれとなく聞いて見ると、お名指で、お客一人だといふ。階段を上つて行く時、『鈴木さんぢやないかしら？』とふと思つた玉子の胸は喜悅にそゞられるやうな氣がした。

階段を上りきる處の障子の硝子からそつと覗いて見た玉子は、



『あ、鈴木さん！』

思はず聲を立て、廣い座敷にほつねんと坐つてゐる鈴木の方へなつかしきうにして入つて行つた。

『よく来て下さつたわねえ……私は……私は、貴方はもう来て下さらないかと思つた。』玉子はかう續けて言つて、長い裾を引いて、鈴木の傍に坐つて、『屹度、貴方だと思つたのよ。虫が知らせたのよ……本當によく来て下さつたわねえ。』

『何時出たんだえ？』

『今月からよ。』

『矢張旨いこともなかつたかえ。』

相變らず、髪の毛を長く、粗末な服装をして、巻煙草をぶかくふかしながら、じろくく鈴木は玉子の方を見てゐた。無邪氣な笑聲が玉子には嬉しかつた。

『去年は随分ひどい眼に逢はせたね。』

やがてかう言はれた。玉子は流石に顔を赧くして、『だつて、あの時は急だつたんですもの。でも、あれは私がわるいわ。あれだけは御免なさい。私、後悔してゐたんですから。此間、手紙を上げる時にも、貴方は怒つてゐらつしやりやしないかと思つたんです。けれどもね……、貴方はそんな方ぢやないと思つて思ひかへして上げたのよ。本當によく来て下さつたわ。嬉しいわ。』

『僕は随分あつちこつちさがしたよ。向う岸ときり手紙には書いてないんだらう。土地不案内だから、さういふ藝者屋があるかと思つて、あつちこつちさがしたよ。巡查に訊いたり何かして、それは可笑かつた。』ありますよ』なんて言つて巡查は笑つてゐるんだもの。此處に来る前に、君の家の前を通つて来たんだよ。えらい處にゐるんだね。』

『さう、通つたの家の前を？ 寄つて下されば好いのに、……お爺さんきり、家には誰もゐないのよ。』

『さうも思つたけれどね、始めてだしね。變だと思つたからね。ゐたのかえ？』

『え、ゐたわ。』

玉子は何處となく嬉しさうな態度をしてゐた。酌をしながら、『あの時、田舎に書きに行つた繪は出来て？』

『うむ、出来たけれども、あの時は繪どころぢやなかつたよ。折角、君をよろこばせようと思つて、お土産なんか買つて来たんだぜ……ひどい眼に逢はせたもんだよ、あの時は？』

『腹が立つて？』

『腹が立つより、君のゐなくなつたことが惜しかつたねえ。』

『でも、千鳥さんがゐるぢやないの？』

笑ひながらかう玉子が言ふと、鈴木は、



『何うして知つてゐるんだえ?』

『それや知つてゐるわ、貴方のことはもつといろんなことを知つてゐるわ。話してきかせませうか。私があるくなつてから、あそこのお上が澤山貴方に藝者を取持つたでせう。貴方は酔つて騒いだでせう。雪江さんがゐなくちや駄目だつて言つたでせう。』かう言つて玉子は面白さうに笑つた。

鈴木は笑つて、

『誰に訊いたんだえ?』

『貴方のことは皆なよく知つてゐるわ。貴方のことは始終考へてゐたんですもの。』

『本當に誰が話したんだえ。あそここの女將が話したのかえ?』

『私、引いてから、あそここの家になど行つたことはありませんもの。』

『不思議だねえ。』

鈴木は考へるやうな顔色をした。玉子はつゞけて、

『貴方、千鳥さんなんか駄目よ。あの人はそれは浮氣なんですから……。それに、矢口ツていふ呉服屋の番頭さんがあるのよ。あんな人に關係しては駄目よ。それに體もわるいわ、屹度……』

『まア好いよ。』

など、鈴木は言つてゐた。

川から來る夕日は、椎の葉を透して、明るく座敷にさし込んで來てゐた。溶々とした川の面には、光線のキラ／＼と眩ゆく碎けた中を通つて行く舟が黒く見えてゐた。

『この室は明るすぎるわねえ。』

など、言つて、玉子は夕日を背にして坐つたりした。

灯のつく時分には、鈴木顔には、もうかなり酔が上つて來てゐた。體を少し斜にして、玉子が三味線を弾いてゐる艶な姿を、鈴木は唯にこ／＼して嬉しさうに見てゐた。鈴木は唄はずに黙つてゐるやうな人であつた。

『貴方、何處かへ行くわね?』

『イヤ、僕は今日は歸る。』

『何故?』

『でも、少し都合がわるいから……。また來るよ、近い中に。君が此處にゐることさへわかれば大丈夫だから。又、すぐ來るよ。』

『でも、今夜は歸さないわ。折角人が久し振りでお目にかゝれて嬉しいと思つてゐるのに……。貴方の雪江が來てるのに……。』玉子はちよつと笑つて見せて、『好いのよ。私が勘定するから好いのよ。私、少しばかり持つてるから大丈夫よ。』



『でも、今日は歸らう。』

『貴方は随分強情ね。家にだつて誰も待つてゐる人なんかありませんか?』言ひかけて、『わかつた、わかつた。千鳥さんの許へ行くのねえ?』なら、歸して上げるわ。さうと、ちやんと言へば歸して上げるわ。』

鈴木は唯にこくと笑つてゐた。

二人が其處を出たのは、もう彼は九時近かつた。『向うに行くと、好いお茶屋があるんですけども、今日は近い處に行きませうね。すぐよ、土堤のすぐ下のところよ。お上さんは中で巴屋の女中をしてゐた人で、如才のない面白いお上さんよ。』こんなことを玉子は言ひながら、纏れるやうにして二人は歩いて行つた。春先の夜は寒くさびしかつた。路の角には巡査がほつねんとして立つてゐた。少し行くと、大きな川が微白く闇の中に見えて、裸火を船尾の處で焚いてゐる舟などが通つて行つてゐた。

『圍ひ者なんかになるもんぢやないのね。もう私、今度は懲々した。』玉子はかう言つて、其話をほつほつ話しながら歩いた。

大きな眼を闇にかゝやかにして自動車を通つて行く時には、二人はそれを路の傍に避けるやうにした。土堤を下りてからは、女は先に立つて行つた。

『其處よ、其家よ。』

軒燈がほんのりついて、奥には茅葺屋根の二階屋がおほろけに闇の中に見えてゐた。

勝手元の隣にあるやうな小さな風呂場から二人がサツパリして上つて來た時には、女中の拵へて行つた行火がもう可也暖かくなつてゐた。『何時まで寒いんでせうね。』かう言つて玉子は鈴木の手を握つた。

鈴木的眼には、濼端の賑かな空氣と違つて、淋しい心細い色街が映つた。かういふところに住替へて來た女が可哀相のやうにも思はれた。『だけど、此處は好いのよ。彼方のやうなことはないわ。體は樂ですし、御祝儀だつて、彼方とは餘程好う御座んすからね。その代り貰ひはき、ませんけれど。』かう言つて、玉子は種々その土地のことを話してきかせた。奥にある大きなお茶屋の女將が玉子を最負にして、お弘めの日にかけて呉れた話などもした。

玉子には遊び馴れたお客のやうにわろくすれてゐない鈴木の様子が何處となく氣に入つてゐた。金を拵へて貰ふ時ばかり喜んだ嬉しさうな顔を見せながら、此方で困つてゐる時には、何うして呉れることも出來ないやうな男とは何處か違つてゐるやうに玉子には思はれた。昨日も春月の女將がやつて來て、『お前さん、それは取つて了ふ方が好いよ。ぐづくしてゐると、取れなくなつて了ふよ。此頃ぢや大和の常子ツて言ふのに大騒ぎをしてゐるつて言ふぢやないか。』など、言つてゐたのも思ひ出された。何うせ自分のものに出ることが出來ないといふやうになつてから、男はいくらか疎々しくするやうな素振を見せて來てゐた。『本當に惚れたもんなら、そんなことはない筈だ。』こんなことを玉子はさつきも二階で獨



りで考へてゐた。「いつそ催促してやらうかしら、構ふことはない。」かう思ひながら、『貴方もう澤山ね?』などと言つて、餉臺の上の徳利を振つて見た。

『私の繪まだあつて?』

『うむ、ある。』

『破いて棄て、了つたかと思つたわ。』

『でも、記念だからな。』

『私に頂戴な。』

鈴木は考へて、『貰つて何うするんだえ?』

『二階にかけて置くわ……。貴方が書いて下すつたんだと思つて、いつまでもくも大事にして取つて置くわ。』

『あれはやれないけど……。其中、別に書いてやるよ。』

『あれを頂戴な……。記念になるから。私、本當に、今日來て下すつたのは嬉しいのよ。本當なら、私から手紙など上げられた義理ではないのね。その代り、ね、貴方今度は屹度あんなことはしないわ。』眼を潤ませて、『ぢや、あれでなくつて好いから、近い中に一枚書いて頂戴ね。大事にして取つて置くわ。』靜かに夜は更けて行つた。

『もう寝ませうね。』

かう言つて、さつき女中が敷いて行つて呉れた搔卷の中に男を入れてから、『寒いから、行火を入れて置ませうね。』

やがてトン／＼階段を下りて行く女の足音が靜かにした。さびしく更けた夜は三味線の音も聞えて來なかつた。床に生けた梅の花が徒らに唯白く見えてゐた。

やがて女は厠から戻つて來た。長襦袢一つになつて、着物や帶を疊みながら、

『靜かで好いわね。』

『本當に靜かだ。』

『明日は緩りしてゐらしつても好いんでせう? ね、緩くりなさいよ。何處かへ行きませうか、梅見にでも……』

二十二

『お氣の毒ですけれども、少し入用があつて困つて居りますから、此間のお金を何うか都合して戴けないでせうか。此次の日曜あたりまでに何うかして戴きたいものですが——』玉子はかう男の許に手紙を書いてやつた。しかし其返事は容易に來なかつた。二三日は徒らに過ぎた。



玉子が此方に来てから男はそれでも二度ほど訪ねて来た。勘定を拂ふ金を一度は男が持つてゐたが、一度は女が拂ひをしなければならなかつた。拂つたあとで玉子はつまらなさに溜息をついた。一時あんなに一生懸命になつて、世話になつてゐる旦那にまで嘘をついて、無理に金の工面をして嬬曳をしたのは、あれは自分ではないやうな気がした。此頃では、あれほど好いと思つた色の白い顔や、濃い形の好い鬚や、意気なぞろりとした姿や綺麗にわけた髪などが、不思議にももう玉子の心を惹かなくなつてゐた。『ひとに苦勞をさせて置いて、あんな不見轉なんかに夢中になつて、あなた、それでも男はすんで行くんですか。』かういふ心持すら玉子には起らなかつた。『貴方は随分好い加減ね。』かう言つて、玉子は振り返りもせず其時はわかれて来た。

手紙の返事の來ないのが、段々玉子の心を焦立たせた。『春月の女將の言つた通りだ。』かう思ふと、一概に自分が今まで男の爲めに騙されてゐたといふ風に考へられて来た。『お前さへ来て呉れ、ば、妻などいつでも離縁する。』かう男は口癖のやうに言つたが、それは皆な女を引張つて置いた男の手だ。それでないものが——それほど女を思つてゐるものが、手紙の返事一つよこさないわけはない。騙されてゐるんだ。私は騙されて引張られてゐるんだ。かう思ふと、假令厭ではあつたとは言へ、世話になつた旦那をあの男の爲めに無駄に棄て、了つたその身の愚かさなども振り返つてはつきりと考へられて来た。もつと取れるものを取らずに了つたやうにも思はれた。『矢張、浮氣をしてゐる中は駄目ですよ。後になつて

わかることが其時は見えないんですもの。』かう言つたある待合の女將の言葉なども思ひ當つて来た。

玉子は四五日してから、もう一度手紙を出した。それまでに、玉子は男の勤めてゐる役所に四五度も電話をかけたが、いつも男は不在だと言つて出て來なかつた。ある時などは、給仕に留守をつかはせてゐるのがはつきりとわかつてゐた。玉子の心は益々焦立つて来た。『あの金だけでも取らなければ——』といふ風に考へて来た。

その手紙の文句には、かなり突込んだ烈しいことが書いてあつた。『さういふお積なら、私にも考へがありますから、……私はいつ貴方の役所へ出かけて行くか知れませんか、』など、書いた。玉子の身にしては、さういふ風にしてゐる男の仕打が憎くつて堪らなかつた。寒い嵐の中を遠い待合に出かけて行つて、見ず知らずの女中にもお世辭をつかつて、心にもない愛嬌を顔に見せて、座蒲團もない疊の上に長い間厭なことを言はれて坐つてゐて、揚句の果には、厭なお客も厭といふことも出來ないやうな自分の身の上を男のつれない心持に比べて考へて見ない譯に行かなかつた。玉子は淋しい田圃の中を車で通りながら、『あの金だけは取らずには置かない、』などと思つて下唇を強く咬んだ。お座敷のかゝつて來ない夜は玉子はさびしくひとり二階に寝た。

男の役所に押しかけて行つた話を玉子はある夜鈴木に話して聞かせた。『だつて、餘りひどいぢやありませんか！ 私、餘り腹が立つたから、構ふことはない、押しかけて行つてやつたわ。』



そんな男が此女にはあつたのか。始めは鈴木は不思議さうな顔をしてじろく、王子の方を見てゐたが、いつか話につりこまれて行かすには居られなかつた。

『で、逢つたかえ？』

『逢つたわ……。餘程困つたでせうよ。留守なんぞ使ふと、却つて荒立て、人に知られると思つたんでせうよ。それでもすこしはぐづくしてましたがね。たうとう給仕がやつて来て、應接間につれて行つたわよ。汚い應接間よ。卓が一つ真中に置いてあるばかりよ。私、わざとけばくした扮装をして行つてやつたもんですからね、皆な人が見るんでせう。給仕などがイヤに笑つて行くんでせう？ 可笑しかつたわ。』

『それですぐ来たかえ？』

『十分位すると来たわ。眞赤な顔をしてたわ。それやね、そんなにわるい人ぢやないんですからね……初めはもじく／＼してましたつけ。困るなアこんな處に来て呉れてツて言ふのよ。』

『困つたらうよ、それは……。君も随分えらいことをやるね。』

『愛想がつきて？』

『さういふ譯ぢやないけれども……。兎に角、困つたよ、男は、それは――』

『だって、向うがわるいんだから仕方がないわ。手紙をやれば返事もよこさないし、電話をかければ留

守をつかふし、仕方がないぢやないの？ 男ツてそんなもんかしら？』

『さうぢやないけれども……。急に百兩返せと言はれちやちよつと男だツて困るね。』

『だつて、家はお金はあるんですもの、困つてなんかるやしないんですもの……。それに、それなら、さうと言つてよこせば好いぢやないの？ 今、困るからとか何とか言つて来れば、それでもツて私は言ひはしないわ。一體、心持がいつとなく離れて行つて了つてゐたのね。……さういふ心持になり出したのは、矢張お通夜の時のことが始めね。私、これで、中々嫉妬ぶかい方ね。』

『それで何うしたえ？』

『返すわ。』

『本當に返すかえ？』

『返さなくつても、取るわよ。でも、氣の毒だツたわ。ぢき向うに課長さんなどのゐるところが少し見えてゐるんですもの……。人がイヤに此方を見るぢやないの？』

『惚れ合つた同士もさうなつちやお終ひだね。』

かう言つて、鈴木は大きく笑つたが、ちよつと考へるやうにして、『それはお通夜のことも動機になつてはゐるけれど、金を貸したツて言ふことがさうなつて行く最初だね……。金ツていふ奴はこれで中々厄介だからな。金を貸したのがいけなかつたんだね。』



『さうかしら？』

鈴木はその夜ほど玉子から身の上話をきかされたことはなかつた。浅田の話もすれば、小林の話もした。きかれるまゝに、大杉の話をも玉子は詳しくしてきかせた。『それつきりよ。私にはそれつきり何にもないわ。……。貴方、愛想がつきて？』かう言つて玉子は艶な眼色をして鈴木の顔を見た。體を男に寄せるやうにした。

『さうね、私の惚れたのは矢張小林でせうね。あの時は眞剣でしたもの。』續いて玉子はこんな話を鈴木にした。

玉子は始めて眼を開いて自分の周圍を見渡すやうな人になつてゐた。自分よりも少し後れて濠端から此方へ住替へて來た妓は、男に夢中になつて、二三年貯めた貯金や着物をすっかりなくして了つてゐた。うっかりしてはゐられないやうな氣がした。玉子はお茶屋の女中から懇意にして貰はなければならぬ弱い稼業を思つた。つとめて元氣なはしやいだ顔をして玉子はお座敷に出て行つた。

姐さん達の來てゐる時は、三味線の方には心配はないが、その代り姐さん達の機嫌も取らなければならず、不見轉藝者のやうに押されて黙つて坐つてゐるわけにも行かず、それに女將や女中にもあらを見附けられないやうにもしなければならぬので、玉子は一方ならぬ氣苦勞をしなければならなかつた。お客の方に藝のある人が多いのもお座敷に出ての心配の一つであつた。濠端のやうな流行唄をガチャ／＼

弾いてそれで済んで了ふやうな座敷は滅多になかつた。『君は何が地だえ、』などと玉子はよくきかれた。

得體のわからない三四人の客の座敷に自分一人ほつゝり聘ばれて行くやうな時には、玉子は一層困つた。かなり達者だと自分も信じてゐた三味線も、姐さん達のすぐれた音べを聞いてからは、きまりがわるくつて、一人では弾けないやうな氣がした。歌澤の家元か何かの女の人が四五人お客と來て、知らん顔をして、『お座附などを黙つて聞いてゐて、あとで、『ちよつと、貸して頂戴』かう言つて三味線を取つて玉を轉ばすやうな聲で歌澤を唄はれた時には、玉子は穴にでも入りたくなつて顔を赧くした。『だつて家元さんですものね。旨いわけね。黙つて知らん顔をしてるのよ。人がわるいねえ。』後で玉子がかう女中に話した。

新橋あたりの綺麗なお酌を五人も六人も伴れて自動車でやつて來る華族の若様もあれば、舞臺で顔を知つてゐる名高い役者が、富豪の後家さん見たいな中年の女と一緒にやつて來ることなどもあつた。二人のお客の一人の方に女のゐない場合などに玉子はいつちもよく聘ばれて行つた。玉子は厭な情ない様な氣がした。

『私、みつしり稽古しようと思ふの？ 藝がなくつちや矢張駄目ね。私、此間から歌澤と常磐津のお師匠さんのところに行つてゐるわ。常磐津のお師匠さんは、それは名高い人なんですって。喜代次姐さんが知つてる人なもんですから、一週間に二度づつ來て呉れるのよ。箱屋の政どんの二階でお稽古をする



のよ。一つ、習つたところをさらつて見ませうか。』こんなことを言つて、玉子は鈴木に尻橋の初めの方を弾いて聞かせた。

『私、本當にこれからみつしり稽古するつもりよ。もう何も考へないで、お稽古ばかりするわ。來月から清元のお師匠さんに来て貰ふつもりよ。だつて、私だつて、他の妓のやうにお金をかけて稽古をすれば上手になりますとも……。矢張お金ね、お金があつて、好い師匠さへ取れば、ひとり手によくなくて行きますとも。貰目だつてついて來るわ……。それに、藝者は何うしても初めから藝者になるつもりでやつたんでなくつては駄目ね。容色があつて、招牌がよくつて、小さい頃から藝が仕込んであれば、藝者も面白いわ。』かう言つて玉子は、近所にゐる若い綺麗な立派な旦那のある妓達を頭に浮べてゐた。

## 二十三

一方にはさういふ風に藝に向つて勵みがついて行つたと共に、一方には此頃好色の世界に向つて、不思議にもその心と體とが目覺めて行つてゐるのを玉子は見た。今までの自分はある程度まではその世界には盲目であつた。色彩の濃い中に身を置きながらその濃い色彩に十分浸ることが出來ないやうな自分であつた。男の心もわからないやうな場合が多かつた。

それがいつとはなしに目覺めて來てゐた。曾て何の氣もなしに見たり聞いたりしてゐたことが、皆な

ある意味を持つて玉子の體に反響を傳へて來た。三十五六にもなつて若い男と死ぬ生きるの戀をしてゐる妓の心も飲込めて來れば、喧嘩に喧嘩をしてもつひに離れることの出來ない妓の心持などもわかつて來た。『さうですかね。打たれるのが嬉しいんですかね、惚れた男なら——』さういふ人達の世界に較べると、玉子のこれまで通つて來た境は單純な葛藤の乏しいものであつた。多くの男とも唯無意識に簡單に平氣で別れて來てゐた。

好きで讀む小説などの中に書いてある世間と實際の眼で見る世間とは非常に相違があるものだなどとも玉子は思つた。汚ない眼腐れの爺さんが、三日おき位には玉子のゐる二階に小説本を持つてやつて來たが、………玉子は此頃は借りて讀むやうになつてゐた。『高いね、もうすこし負けてお置きよ。』などと言つて、玉子は財布から金を出した。

『もつと綺麗なめづらしいのがないかね。』

『え。今度持つて來ます。』

爺さんは眼をシヨボくさせて、厭に笑ひながら言つた。爺さんは、淺黄の風呂敷に本を包んで、腰を曲けて、大儀さうにして二階を下りて行つた。

その爺さんを玉子に紹介した妓は二十七八の中妓さんであつた。二人は逢ふと、よくこんな話をした。

『此頃も爺さんから借りて?』



『え？』

『あれで、あの爺さん、……………。何でも昔から好きでためて持つてゐたんですってね。あれで、結構、御飯がたべて行かれるんだって？ 不思議なもんね。』

『高いはねえ、しかし姐さん。』

『高くつて丁度好いのよ、……………。』

玉子は笑つて、『でも、随分、あるもんだわねえ。』

『それはあるわよ、常磐家の姐さんなんか三年見たつて言ふぢやないの？』

『まア、さう！』

前にゐた土地でも姐さんが持つてゐたり、……………、さういふものがかういふ風に興味を引いて来ようとは思はなかつた。今まで觸らずに放つて置いた體が急に發達して来たやうな心持を玉子は経験した。『さういふもんですかねえ。』玉子はかう感心したやうに言つて、『それで別れられなくなるんですかね。さうですかね。情死したりするのは、さういふもんですかね。』

『矢張面白いものなのよ。』

『さうね。』

玉子は考へるやうにして言つた。

浅田の友達に病院の醫者があつて種々と病氣の豫防法を教へて呉れてから、玉子はいつも樂を用意して持つて行つてゐた。『私はそれで不思議に病氣はしないのよ。人に由ると、すぐひどくなつて了ふ人がよくありますけれど、私だけは大丈夫よ。そんなに怖いもんじゃないわよ。』などと玉子は若い妓に話した。

不思議にも玉子の聘ばれて行くお座敷の客の裏の返らないやうなものはなかつた。玉子よりも容色もあり藝もあるやうな妓でも玉子よりは遙かに賣れないやうな妓が幾人もあつた。奥の大きな茶屋の女將は、『でも、不思議なもんだよ。私など長い間かういふ稼業をしてるが、いろ／＼な妓があるよ。あの小兼さんなんか、容色はよし、藝はあるし、あの人の若い時には、それやお客が大騒ぎをしたもんだよ。随分澤山なお金を積んだお客もあつたんだよ。でも、不思議なのは、あの人は、出来ない中はさういふ風にお客の方で大騒ぎをするけれど、出来て了ふと、ぱつたり来なくなつて了ふんだよ。矢張逢つて見なければわからないものと見えるね。』などと言つて面白さうに笑つて、『さうかと思ふと、勝次さんのやうな人もあるからね。』

その勝次といふ藝者の噂を玉子は到る處で聞いた。ある姐あんは言つた。『あの人の體は違ふんだよ。私なんか、あの人のお酌さん時分から知つてゐるけれど、……………。今ぢや、家にちやんとあゝいふ人がゐてさ、それからあの深川の旦那と兜町の旦那があつてさ、……………。』



……。とても、あの人の真似は出来ないよ。あのこと、お金ばかしなんだから、あの人は？」

『さうですかねえ、あんなに痩せてるて？』

『だつて、時間過ぎに歸つて行くとの御亭主がちゃんと待つてゐるんだつて言ふもの……。あそこにゐた抱妓だつて、だから、大抵は體が續かないつて出て来るぢやないか。』

その勝次といふ中姐さんに初めて逢つた時には、玉子は不思議なやうな氣がして、ちつとその顔を見ずには居られなかつた。容包の好いのでは、この姐さんなどよりもぐつと立ちまされた妓がいくらもあつた。それにも拘はらず多くのお客は常に勝次のあとを追つてゐた。新しく家などを建て、抱妓の三人も置いて、貯金なども澤山に持つてゐるといふ噂であつた。ある役者との關係がちよつと新聞に出た時には、『あれは嘘だよ。そんなことがあるもんですか。あの人がお金を役者になんか、何うして……。何うして……。あの人は誰だつて好いんだもの、男でさへあれや好いんだよ。』

『さういふもんかしら？』玉子は獨りで床の中で考へたりした。それにさういふ話は到る處にあつた。あんなお婆さんがといふやうな妓が若い綺麗な老肆の旦那から澤山金を引出して贅澤な暮しをしてゐるのもあれば、旦那に内所で自分の習つた常磐津の師匠を長火鉢の前に坐らせてゐる妓もあつた。玉子は自分の體の血の湧くやうなのを覺えた。隣の二階では、いつも來る旦那とは丸で違つた若いにやけた男の聲などがをり／＼聞えてゐた。

二階でひとり寢をする玉子は綿のふつくりした蒲團を新しく拵へて、裏には赤いメリンスなどをつけた。襟當にも、役者の似顔のくつきりと出てゐる裏絹などをつかつた。

時間過ぎに歸つて來て、頭も體も勞れ切つた身を其のまゝ其處に横たへるのが玉子には何よりの樂みであつた。寒い夜は、婆やが氣をきかせて行火などを拵へて置いて呉れた。行火を入れて置いて呉れたの？ 難有いわ。』かう言つて玉子はをり／＼婆さんに小遣をやつた。

五燭の薄暗い電燈の下で、玉子は尠くとも一時間位は、……。さういふ時には、いろ／＼な男の顔が眼の前を通つて行つた。黒い髭だの、淺黒い男らしい顔だの、綺麗にかけた髪だのがうつとりと好い心持になつて體に蘇つて來た。疲れた體を更に疲れさせなければ何うしても眠られないうやうな習慣に玉子は此頃はなつてゐた。しんとした夜の空氣の中に、玉子の顔は白く、浮彫のやうになつて見えてゐた。……やがて玉子は讀みかけた本を蒲團と蒲團の間に入れた。……軽い眩惑が快く頭を掠めて通つて行つた。それが何とも言はれない快感を玉子に與へた。……玉子は辛うじて體を半ば起して、手を延して、電燈のスキツチを捻つた。闇には種々な色彩がチラ／＼と搖いた。

玉子は寢がへりを打つてからぐつすり寢込んで行つた。

時には、朝早く歸つて來て、わざと雨戸を閉めたまゝにして置いて、薄暗い光線の中に午過まで體を浸らせてゐることなどもあつた。朝日の光を眩しさうにして玉子は見た。



『よく寝ますね、』などとお爺さんは言った。

お爺さんは瓢箪などを持って梅見になどよく出かけて行つた。『お爺さんなどは、もう、さういふ氣が起るやうなことはありませんでせうね。』かう玉子が笑ひながら訊くと、『さうぢやな、五年前位まではそれでも女の子が欲しいやうな氣がしてゐたが……もつ、今ぢやさういふ氣はなくなつたな。こればかりぢや、もう今では。』かう言つて、お爺さんは盃を口に當てる眞似をした。

『五年前ツて言ふと、六十五六ですね。その位まではそれでもさういふ氣がありますかね。』お爺さんは笑ひながら、『それはある。』

『さうすると女の方は早いわねえ、女はもつと早くなくなりますね。』

『さうぢやな、女は早いな。』

『私の母など、もう餘程さういふ氣がなくなつてゐるんですもの。』

『さうかな母さんはまだ若いだらうに……』かう言つて、『いくつぢや四十二、まだなくなるには早いな。わしの婆さんなんぞ、五十位までは嫉妬をやいて困つた。』

『お爺さんなんか、それでもたんと面白いことをして來たんでせうね。』

『面白いこともあつたな。』

白い長い髯をいぢりながら、お爺さんはかう言つて笑つた。

土手の花の咲く時分には、玉子の許に通つて來る客ももう三四人は出來てゐた。聘ばれて行くお茶屋の數も殖えて行つてゐた。電話が掛つて來ると、『誰だらう？ あの人かしら？ それともあの方かしら？ それとも鈴木さんかしら？』こんな風に思ひながら玉子は急いで支度をして出かけて行つた。



残  
る  
花



## 残る花

お糸は花の間と月の間の掃除をすまして、風呂場に行つて、バケツに湯を一杯汲んで来て、それから廊下の雑巾がけに取りかゝつた。朝日は朗らかに明放した室にさし込んで桃の花の紅く咲いてゐるのが庭を越して見えてゐた。

昨夜遅く自動車が来て、一度寝たのを起されて、それからちよつとくしたばかりなので、何だか體が疲れて頭がぼんやりしてゐた。

これからまた一日働かなければならないと思ふと、お糸はとても體が續かないやうな氣がした。お糸は広い廊下を此方から其方へと中腰になつて雑巾を押して行つた。

硝子戸の向うには、ちよつとした中庭が見えて、椿の花の眞紅に咲いてゐる傍に、朝日に當つた雨戸のびつしやり閉つてゐるのが見えた。其處には、自分の受持の女を連れた客が寝てゐる筈である。女は



新橋あたりの藝者で、薄手の色の白い小づくりの二十一二の女であつた。此前にも一二度此處にやつて来たことがある。お照さんの番に當つた時には、お客はもつと肥つた鬚の濃い男であつた。

『今度のが本當の情人かも知れないよ、』などと昨夜もお照はお衆に言つた。

自動車で来た二組の男女のさまなどもお衆の頭の中を掠めて通つて行つた。白いベエル、派手な長襦袢、細い蝙蝠傘、『貴方、寒いわねえ、』など云つて、絡みつくやうにして女は男の跡について行つた。何處も彼處も塞がつてゐて、奥の離座敷しか明いてゐないので、お定といふ女中頭とお衆とが大騒ぎをして、火鉢だの座蒲團だのを運んで行つた。お衆の受持の方の一組は、何處かの商人の若旦那といふやうな色の白いやににやけた男で、『さうでせう、』とか、『それはいけませんね、』とか、丸で女のやうな口の利き方をしてゐた。女はすつきりとした背の高い綺麗な人だつた。ダイヤの指環を左の指にはめて、翡翠の金簪をさしてゐた。床を延べて、『おやすみなさいまし、』と挨拶をして、そしていろ／＼と後片附をして戻つて来た。

『すぐお寝よ、お衆さん、明日また早いんだから。』

女中頭のお定がかう言つて呉れたので、お衆は跡片附をすますと、すぐ上り端の右の方にある一間に入つて寝た。女將はいつか二階に上つて寝てゐた。

『お定さんなんか、十年も此處につとめてゐるツて云ふことだが、よく勤まるものだ……。でも、あ

の人はよく物がわかつてゐるから……』などと思ひながら、雑巾がけをすまして立つてゐると、其處に女將は花を入れた桶をお妻といふ女中に持たせて、長い路を此方へとやつて来るのが見えた。女將は澤山の室の花を生けかへるのをいつもの朝の課業にしてゐた。

『お早う御座います。』

かう挨拶をすると、『お衆、鶴の方を掃除したかえ？ それから、あの向うも掃除しなくつちやいけな

いよ。あそこのお客様はいつも早いんだからね。』  
かう云つて女將は廣間の方に入つて行つたが、えにしだだのちんこやなぎだの黄梅だのを大きな瀬戸の花瓶に生けてゐるのが長い間見えてゐた。肥つた女將の白いエプロンには朝日が晴やかに當つてゐた。

其處に菊の間に寝てゐたお客がどてら姿で起きて来て、襷がけて働いてゐる女中達に聲をかけて、ぶら／＼廣間の方へと入つて行つたが、お世辭の好い女將の笑聲は、やがて賑かに聞えて来た。

『貴方はいつもお早いことねえ。』

『これでも餘程我慢して寝てたんだよ。一緒に寝てゐるのも樂ぢやない。』

『は、は、』と大きく笑ふ女將の聲がして、『定ちやんは？』

『まだ夜中だ。』



『誰だえ、番は？ お妻かえ？ まだお湯は沸かないかい。』かういふ女將の聲につれて、遠い別の間に掃除に行つてゐるお妻を呼ぶ女中の聲が高く朝の空氣にひびいて聞えた。

お衆が自分の受持の掃除をすまして、バケツを持つて、入口の方へ來た時には、お照がせつせと上り端の縁側に雑巾をかけてゐた。其處でも此處でも掃除の音がして、綺麗になつた入口の三和土の上には、心持よく水がまかれてあつた。お衆は、『隅々を綺麗に掃除しなくつちやいけないよ、』といつも口癖のやうに言ふ女將の言葉を思ひ出した。仰向いて天井板を一枚々拭いた時の疲れなども思ひ出した。菜をつける時には、二日も三日も皆で代り合つて冷たい水の中に手を浸けてゐた。『それはね、貰ひが多いからつとめてゐられるやうなもんだけども……とても並ではつとまらないわ。』かう懇意な土地の藝者に言つたのをお衆は思ひ出した。

風呂場の小さい烟突からは、烟が黄く細く上つてゐた。其處には健作といふ越後出の男がせつせと釜の中にコオクスを入れてゐた。お衆はちよつと覗いて、『まだ？』

『もう、すぐだ。今朝は、はア、つい寝すごして了つたもんだ。』

お衆が來た時には、風呂番に政といふ好い男がゐた。體格のがつしりした愛想の好い肌の白い三十位の男で、『俺だつて、譯がなくつて、こんな處にいつまでもぐづぐづしてやしねえ、』といつも言つてゐたが、誰も知らない中に、お衆といふ小肥りの女中と出來てゐた。釜の前で二人でよく話してゐるのを見

かけたが、やがてそれが意地のわるいお秀といふ女中から女將に知れて、すぐ二人は出されて行つた。

『ちよつと小綺麗なもの駄目だよ。すぐあれだから。越後者に限るよ、風呂番は？』其時、女將は笑ひながらこんなことを言つた。

お衆は早起で評判であつた。明方の三時過に寢ても、風呂番の起きる時分には、屹度起きてゐた。二人は朝の逢瀬を楽しんでゐたのであつた。コオクスの烟がブスブスと烟突から出る時分、お衆はいつもそつと其處に入つて行つた。それは一日の中で一番人目の途絶えた時であつた。不寝番をしてゐる老爺も其時分は門の傍の自分の室に行つて寢てゐた。『イヤだねえ、あんな處で逢つてゐたんだよ。』それを一番先に見つけたお秀は、さもさげすむやうに言つた。今でもお衆は、風呂場の釜前に行くと、はつきり其時の光景を思ひ出した。政といふのは實際意氣な男だつた。こんな處で風呂番をさせて置くのは惜しいとお衆も思つてゐた。それと比べて、代りに來た越後者のぶつきら棒の挨拶がお衆には暫しの間小面憎かつた。

『お上さんがまだお風呂が沸かないのかえつて言つたよ、健さん。』

こんなことをお衆が言つてゐると、丁度其處に來かかつたお仙といふ空世辭の上手な女中が、

『私の方が先きだよ。』

『やい？』



『だつて、昨日から頼んで置いたんだもの、ねえ健さん。』

無理だとは思つたが、古參で、お上さんに氣に入つてゐて、何ぞと言つては、女中頭の人のお定をさへ凌がうとしてゐる勢力のある女中なので、『さうなの？ ちや仕方がない。』

かう言つてお糸は争はずに風呂場から向うの方へと出て行つた。『また、お客からお金を餘計に貰つたんだらう。金ばかりためてゐる！』かう思つたお糸の頭には、昨夜、仲の好いお梅とお照と三人寄つて、『矢張、金か男ね、無理よ、かういふ處にゐて男禁制は？ それや、お上さんなんか散々面白いことをして来たんだから好いけれど、お仙さんのやうにお金ばかりためてゐる氣になれないねえ、』と言つたことなどが思ひ出された。『よくしたもんだ、お仙は子供が情人よ。子供の事だと、あれでもお金を出すよ。』女將が笑つていつかこんなことを言つたことがあつた。お仙は男の兒を伴れて、理髮肆の亭主と別れて來てゐた。

ふとお糸の眼の前に、兵隊に行つてゐる男と頭を綺麗にわけた男とがちよつと掠めて通つて行つたが、『お糸さあん』と長く引張つて呼ぶ聲が離座敷の方から聞えて來たので、お糸は急いで其方へと駆けて行つた。

途中でお梅とすれ違ひながら、

『お前さん、今日は下番ね。』

『あゝ。』

何か言はうとしたが、其處に、向うの鶴のお客が庭下駄を穿いて歩いて來たので、ちよつと辭儀をして、

『お早う御座います。もうお目覚めですか。』

『好い天氣だね。』

などと言つて、客はぶらぶら其處等を歩いてゐた。

お糸が再び風呂場に遣つて來た時には、かねて知つてゐる下町のお客が女と一緒に溢れるやうな綺麗な朝湯の中に浸つてゐた。女とお糸は顔馴染であつた。

『まア、あなたですか、随分お久し振りね。』

『つい、此間來たばかりぢやないか、一昨日來たぢやないか。』

『あんなことを……』

『でも、何うしてだか、本當にかけ違つて、お糸さんの番には當らないわねえ。昨日もさう言つてゐたのよ。あとで入らつしやいね。お糸さんは何うした何うしたツて言つてゐたのよ、旦那が——。ねえ貴方。』

かう女は客の方に向いて言つて、『お糸さんはいつもお綺麗ね。』



『まあ私なんか。』

かう言つて、お糸はそこ／＼に其處から出て來た。

風呂場の大きな鏡には、長襦袢の派手な色彩がチラ／＼映つたり消えたりした。朝日の當る明るい窓の下では、女が代る／＼鏡臺の前の座蒲團に長い間坐つて、鬢だの鬢だのを丁寧に梳いた。鏡臺の抽斗には、女の油に染みた髻櫛だの三本足だの糸だのに交つて、男の頭髪を撫でるブラシやチックが入つてゐた。其處にお糸は自分の受持の客の浴衣などを持つて行つた。

## 二

その朝お糸は座敷を三つほど持つてゐた。早く風呂を済した方の客へ先づ新聞を持つて行つて、續いて茶の支度をした。客はいづれも湯上りの氣持の好ささうな顔をして、中には軽い戯談などを言ふものもあつた。お糸は縁先に立つて行つて朝日を除ける爲めの簾を下した。

女は綺麗におつくりをして、『あ、好い氣持、』などと言つて客の傍に行つて品をして坐つた。わざと懷鏡を帯の間から出して、薄い紙で顔の白粉の濃い處を拭いたりなどした。

『昨夜、自動車で來たお客があつたわね。何でも二時頃ね。あの時分まで起きてゐたんですか？ 大抵ぢやないわね。』

『さう／＼自動車が來たね。』客は思ひ出したやうに見てゐた新聞を傍に置いて、『覺えてゐる覺えてゐる。あの時お前は怖い夢か何か見て驚かれてゐたぢやないか。』

『さう？』

女は笑つて、『さうね、貴方に起されたわね。』

『起されたもないもんだ……』

後は言はずに客は意味あり氣に笑つた。

酒と蜆汁とを其處に運んで行つてゐると、その自動車で來た奥の離座敷の呼鈴が鳴つたので、お糸は風呂場の傍の方を通つて急いで其方へ行つた。別室の方の雨戸はまだ閉つてゐた。

しきりの襖の外から、

『お眼覺めですか？』

かう聲をかけると、やさしい男の聲で、『敷島を一つ持つて來て下さいな。』

引返して持つて行つた時には、お糸は襖を靜かに明けて入つて行つた。二人はまだ床の中ゐた。男は色の白い莞爾した顔を半ばもたげてゐたが、お糸の出す敷島を取りながら、半ば女に半ばお糸に言つた。

『もう起きませうよ、湯が沸きましたね？』

『え、すぐお加減を見て參ります。』



其處には長けた春の日の光線が雨戸の隙を洩れて、みだらな一間の光景を明るく見せてゐた。彼方を向いて寝てゐる女の亂れた髪なども見えた。見馴れたお糸には、さういふ光景は無論めづらしくはなかつたが、しかし、男が好い男である場合には、何となく顔がほてるやうな氣がするのが常であつた。『男も女も兩方とも綺麗で、睦まじさうにしてゐる時が一番厭ね。さういふ時は羨しいのが通り越して腹が立つてよ。つく／＼厭になるよ。不思議なもんね。』こんなことを言つて、お梅やお照と一緒に笑つたことをお糸は思ひ出してゐた。男のやさしいのが厭に氣になつた。

『起きようよ、ね、もう。』

かう重ねて言はれて、女はやつと此方を向いて、

『一體もう何時？』

『ぢき十時になるよ。』

『ぢや起きませうね……』かう言つた女は、『姐さん、あの、昨夜預けて置いた着物を此處に持つて来て頂戴な。』

『お召を？』かしこまりました。『お糸はかう言つて、『それぢや、あの、すぐお加減を見て参りますから、少々お待ち下さいまし。』

敷島の袋の中から巻煙草を一本抜いて、それに火をつけて、やさしく男が女に渡すと、女は平氣でそ

れを取つて旨さうにして靜かに吸つた。お糸が其處から出て來る時には、何か戲談をしたやうな睦しうな二人の笑聲が後に聞えてゐた。

『お糸さん、』と鶴の方で誰かが聲を長く引張つて呼んでゐるのが聞えて來た。

## 三

こんなところに来てゐる女中達は皆な一苦勞も二苦勞もして來ないものはなかつた。色つほい柔かな口の利き方をするお梅は、十六の時に近所の若者と墮落をして、北海道迄行つて男に捨てられて、それからあらゆる苦勞を嘗めて來た。此處に入る時にも、稚さい時分から知つてゐる女將に散々意見を言はれて、『お前ももう了簡を固めなくつては仕方がないよ。幾つになると思ふんだえ。六ぢやないか。浮氣をするなら私は世話が出来ないから。』かう呉々も念を押されてやつて來た。それにも拘らず、月に一度や二度は何の彼のと拵へ事をして其頃出來てゐた男の許へとお梅は出かけて行つた。その男を初めて見た時のことは、今でもお糸の頭にはつきりと残つてゐた。ある日、裏口の處に何氣なく行つてゐると、ちよつと見てはわからないやうな垣のかげの處に、お梅は帯を此方に見せて立つて、帽子を眞深にかぶつた男と何か頻りに話してゐた。『私だから好いけれど、お仙さんにでも見られたら河うする積り？』すぐお上さんに知れちやうぢやないか。『此方に来てからかうお糸が言ふと、『後生、後生だから、内所にして



お呉れよ、』と手を合さぬばかりにしてお梅は頼んだ。『呉々も言つてあるのよ、來ちやいけない。お上さんに知れれやそれつ切りだから言つてあるのよ。それでも來るのよ。しやうがないわねえ。折角貯めた御祝儀をまた取られちやつた。』こんなことを言つてお梅は笑つた。後にはお梅は男のことをかくさずにお衆に話した。

お照は男の話をすると、『もう男には懲々、』と言つて手を振つて見せた。『だって、私なんか、三年も切れられないで追かけ廻されたんだもの……。でもね、籍が入つてゐなかつたので、何うやら彼うやら別れることが出來たけども……。一時はピストルを向けられたり何かして、それは怖いもんよ、男は……。今でも此處にゐることが知れると大變なんだから、』などと言つて、其時のことを話した。

お秀は山の手の通りで生れた。幼い時はかなりに替澤に育つた肴屋の娘であつたが、父親が死んでから、後添の繼母が男を拵へて、家を滅茶々々にして、それから彼方此方と他人の中で苦勞の多い日を送つて來た。田舎の町に酌婦になつて行つたことなどもあつた。ちよつと小綺麗なので、お客なども手を出したりなどした。『でもお秀はあれで利口だよ。しつかりしてるよ、見かけによらないものだ……。』などと女將は言つてゐた。

そのしつかりしてゐるお秀が、箱屋の芳どんに氣があつて、イヤに甘たるい口を利いたり、變な眼色をして見せたりするのをお衆やお梅はよく知つてゐた。『芳どん、しつかりおしよ、』などとお梅は意味ありげに若い箱屋の背中を叩いたりした。

かういふ若い人達に引かへて、お妻は唯何うかしてもう一度失敗した待合を開きたいと思つてゐた。かう大勢客の入るお茶屋にゐれば、自然世間も廣くなるし、顔馴染のお客も出來るし、一二年すれば彼方此方の借金も返すことも出來る。さうしたら、今度こそはしつかりやらう。こんなことをお妻は唯考へてゐた。『下谷に家があるんですよ。今度始めたら、是非來て下さいね。林子？ 丸屋のでせう？ 好い妓ですなえ。御戯談ばかり、もうちやんと濟みでせう、』などとお妻は座敷で客に言つた。

お仙は勝氣でよく働いた。『お前さんのやうな眞似はしてゐられないよ。』かう口にこそ出して言はないが、素振から調子までさういふ風に見える。女將のゐる前では殊に效々しく働いて見せた。お世辭も上手だつた。土地で如才のないので聞えてゐる中姐さんさへ『お仙さんのお世辭の旨いつたらないわねえ。餘り上手なので聞いて、をかしくなつて、ぶつと噴出し相になることがよくあるよ、』などと言つた。『左様で御座いますとも……。』かういつも猫撫聲で言つて、輕薄な牙えた賑やかな笑聲を立てた。その癖、底には冷たいところがあつて、女らしい色つほい氣分は何處にも見出すことが出來なかつた。お座敷の勘定の時などにもテキパキした口の利き方をした。中には『あんな女中があるもんかね。藝者の取扱ひやうも知らないんだよ。お上さんにさへ好ければ好いと思つてゐるやがるんだよ。一體、女中頭が意氣地がなさすぎるよ。あんなものに押されて引込んでゐる奴があるものかね……。』でもまたあのお定が人



が好いんだからね。此間も腹が立つたから、うんと言つてやつた、」などといふ老妓もあるが、一度でも餘計に口をかけて貰はうと思つてゐる若い妓などは『お仙姐さん、お仙姐さん、』と機嫌を取つて、内所でつかひ物をそつと袂に入れたり、一圓の祝儀を五十錢餘計に客から貰つてやつたりした。

それとは反對に、お定の方は客思ひで、長年來てゐる客が茶代を餘計におろさうなどとすると、『好いよ、そんなにしないたつて……。結構ですとも、それで澤山ですとも。しよつちゆうかうやつて、御最良になつてゐるんですもの。無駄ですよ、』などと言つた。勘定などもキッチン／＼と拂つて貰はうともしなかつた。『貴方なら銀行に預けておくのも同じですよ。いつでも好う御座んすとも……。一體、お上さんが少し気が小さすぎるのよ。少し位勘定がたまつたつて厭な顔をするやうぢやかういふ稼業はしてゐられませんよ。これだけのお茶屋ですものね。お客さまだつて都合つていふものがありますからね。』總てかういふ風に物事がのんきに落附いてゐた。長年ゐただけに、女將の氣性などもよく飲込んで、何んな癪癪を打附けられても何とも思ふやうな風を見せなかつた。女將に怒られて困つてゐる若い妓などを、お定はいつもよく慰めてやつた。

女中達には皆な綽名がついてゐた。それは『おかめ』だの『あはび』だの『兎』だのといふ名であつた。『あはびや、お前何處へ行つてゐるんだえ』などと女將はよく言つた。『困つたね、おかめさんにも、また齒が痛いんだとさ。』女將はお梅の男のことを薄々知つてゐた。

門の傍には小さな家があつて、一方は車夫の供待、一方は不寝番の爺さんの寢起きするところになつてゐた。その爺さんがまた面白かつた。元、旗本か何かのおちぶれて、のつそりのつそり大きな體を持餘すやうにあちこちを歩いてゐた。上野の彰義隊の戦争の話をする時には、女將も女中も皆なひつくりかへつて笑つた。『お前でも戦争をしたことがあるかね。その時はかうだらうね。刀を持つてぶる／＼震へて……。』かう言つて女將は後ずさりをする眞似をして見せた。その眞似がをかしいと言つて女中達はまた笑ひこけた。晝間は用事がないので、すまして謠などをうたつてゐた。その前の廣場に女中達は物干掉をわたして、汚れた自分達の洗濯物などを干した。

## 四

一夜客が大勢立て込んで、帳場に續いた方の二階の下座敷で手を明けかねてお衆はてんでこ舞をしてゐた。此處からも彼處からも三味線の音は湧くやうに聞えた。『今晚は。』かう言つて、袂を取つて白い顔を見せて、藝者はあとからあとへとやつて來た。

風呂場の傍のところ、お衆はふとある客と摩れ違つた。お衆ははつとした。確かにあの時一緒にゐたお客だとお衆は思つた。しかし唯ちよつとすれ違つたばかりなので、果してそれが本當にそのお客だつたか何うだつたかといふことがちよつと疑はれた。お衆は帳場に戻つて來て、『月は誰?』



『誰だらう、お妻さんぢやないかしら。』

舩かれたお梅はかう言つたまゝ、盆に載せた蜆汁を持つて急いで二階に上つて行つた。

自分の受持の室からも頻りにベルが鳴つて來るので、お糸は月の間の受持をさがしてゐるひまもなかつた。お糸の胸は毀々波立つて來た。おどけた幫間の踊なども見てゐる氣がしなかつた。

向うに出て行くお妻の姿をふと帳場のところで見附けたお糸は、

『お妻さん。』

と、やゝ聲高く後から呼んだ。

半ば行きかけたのをお妻は引返して來て、

『何アに?』

『月の間はお前さん?』

『あゝ。』

『此間來たお客ぢやなくつて?』

『此間ツて?』

『そら、私とお定さんとの番で、柳橋の藝者を三三人つれて來た人ぢやなくつて?』

『あゝ、病氣になつて一日二日残つて泊つて行つた人が連中にあつたね。あのお連れよ。』

『泊つて行つた人も來てて?』とお糸はかう訊かうとしたが、ふと氣が附いて、口まで出かゝつたのを引込めて、『大勢さん?』

『お連は二人よ。』

『藝者も來てて?』

『この間のが一人來てるよ』

急に呼鈴が鳴つたので、お妻はあたふたと向うに行つて了つた。お糸の胸は愈々騒いだ。其男が來てゐるか否かを確めないうちは、お糸は落附いて用が手に附かないといふやうな氣がし出した。頭髪を綺麗にわけた色の白いやさしい言葉の男……長い暗い萩の間への廊下……酒の後の急病で苦しんで二三日一人残つて泊つた男の傍……黄い水薬の小罫と散薬の袋との載せてある赤い丸盆……

お糸はやがて忙しい用の隙をぬすんで、こつそり裏の方へと出て行つた。月の間のすつかりよく覗かれる位置をお糸は豫てよく知つてゐた。お糸は紅葉の間の傍の庭をそつと抜けて、音のしないやうに敷石を除けて通つて、棧をそつと押すと、しきりの折戸は靜かに明いた。そこには、葱だの菜だのさや菘豆だの、一面につくつてある畑があつて、その隅に榊木の一重櫻が一本、月の光を浴びて眞白にばつと光つてゐた。

月の間はその畠の隅から唯一目に見られた。幸ひにも障子はすべて明け放されてあつた。お糸は明か



に其室を覗くことが出来た。さつき摩れ違つたお客と並んで、藝者を相手にその男が何か言つて笑つてゐるのを見た時には、お糸の胸はまた躍つた。

自分の受持の座敷が月の間と遠く離れてゐるので、その男と口を利く機會が容易にお糸には來なかつた。これがお定かお照なら、何とか言つて此方から出懸けて行つても逢へるのだけれど、お妻では何だか自分の心の中がすぐ見透かされさうな氣がして滅多なことは出來なかつた。お糸は唯心の中で焦れてゐた。あの時あんな旨いことを言つて、それが本當なら、顔位此方に見せたツて好ささうなものだ。矢張欺されたのかしら……などとお糸は思つた。それは一時發作的に來た男の病氣がすつかり治つて皆なが安心した二日目の朝であつた。其處にお糸が何氣なく入つて行くと、男はいきなり女の手を堅く握つた。

『まア。』

『好いよ、大丈夫だよ。』

『だツて、私なんか。』

こんな言葉をきれぐれに取りかはしたことが今もはつきりお糸の眼の前にあつた。お糸の體は熱くほてつて來てゐた。

夜が更けて行くにつれて、下座敷の騒ぎもやつと靜まつて、歸るものは歸り泊るものは泊つて、それ

ぞれ片が附いて行つた。お糸はいくらかほつとした氣味で、ぼんやり帳場に來て坐つてゐた。丁度廣間の大勢の客が今立たうとしてゐるところで、女將さんを始め番の女中達がずらりと其處に並んで見送つてゐた。お糸も下駄を突つけて行つた。

『お歸んなさい、御機嫌よう。またお近中に……』

さういふ聲が一しきり賑やかに聞えた。女と男の色彩がおぼろ夜の月に亂れ合つたり絡み合つたりして見えた。門前には自動車が待つてゐた。

それと引きちがひに、『今晚は、』と言つて入つて來た一人の藝者があつた。それは春枝といふ若い妓であつた。お糸の眼はすぐそれに注がれた。

『春枝さん、月よ。』

かう其處にゐたお妻が言つた。若い妓は女將に挨拶して、そのまゝ、長い路を月の間の方へと行つた。お糸の頭は不思議にも今夜は著しく冴えてゐた。何も彼もよく解つてゐた。何んな犠牲を拂つても、何うしてもその客に逢はなければならぬやうな突きつめた氣分にお糸はなつてゐた。

廁の奥の間は明いてゐた。其處に人に見られないやうに暗い處にこつそり立つてゐたお糸は、便所から出て來た男をいきなり其方へと連れて行つた。

『御機嫌よう！』いやに笑ひながらお糸は言つた。



『何處に行つてゐたんだえ?』

『それよりも貴方は随分ね。』

『何故?』

『何故ツて……分つてゐるぢやありませんか。』かう言つて、

『春枝さんが来たわねえ。』

『あれは仕方がないぢやないか。ぢき返すよ。』

かう言つて、男は何か二言三言低い聲で女の耳に囁いた。

『それもさうだけでも……貴方も随分だわ。』

『僕はまた、君がゐるから、何うしたんだと思つてゐたんだよ。』

『私だツて氣を揉んだ。』

『ちや、あとでね。』

『屹度ですよ。』

先に男がその室から出て行つた。丁度其時お仙の聲が廣間の前の廊下の所でした。お糸は暫らく其處で身を躲してゐなければならなかつた。しかしそれも長い間ではなかつた。おぼろ月夜の薄白い光は、やがてこつそり裏の方から出て行くお糸の姿を照らした。

宵の中の忙しかつたに引かへて、今夜は遅く遣つて来る自動車もなかつた。十一時過ぎには、もうあたりがひつそりして、しめやかに洩れて来る男女の笑ひ聲も聞えなかつた。庭にある海棠の花がしつとり露に濡れてゐた。

女中達は帳場の處に固まつて、いろ／＼と盡きない饒舌をしてゐた。市村の今度の狂言の話なども出てゐた。女將は二三日前から頭に腫物が出来て、氣分がわるい／＼と言ひながら、繻帶などを業々しくして、座敷へ行つては、例のお世辭を満遍なく振舞いてゐたが、やつと一片附かたづいたのを見てから、『今夜は早く仕舞へさうだね、何處からも電話がかゝつて來てゐないねえ。』かう言つてそのまゝ二階に寢に行つた。

時間近くになると、誰の目も皆々眠さうになつてゐた。一日働いた疲勞に誰も綿のやうになつてゐた。大きなあくびなどが其處にも此處にも出た。『昨夜遅かつたから、眠い、眠い。』お梅はこんなことを言ひながら、帳場の傍の一間の柱の方に行つて凭りかゝつた。

其處に、軽い冴えた駒下駄の音をさせて春枝が入つて來た。

『お前さん、何うしたの?』

其處にゐたお妻がすぐかう訊くと、

『歸るのよ。お氣の毒ですけど、車を呼んで頂戴な。』



『さうなの？ 歸つても好いッて仰有るの？』

『えゝ。』

車が遣つて来る間、春枝は其處に坐つて、煙管などを出して女中達といろく／＼なお饒舌をしてゐた。

『さう？ 傳次郎が來たの？ いつ？ さうなの？ 柳橋の藝者？ どんな藝者？』かう言つて目を丸くして、

『旨いのね、屹度、あゝいふ人は？ さう？ そんなにやさしいの？ ふむ、』などとさもめづらしさうに春枝は點頭いて見せたりした。其間、お糸は黙つて長火鉢の傍の方に坐つてゐた。土瓶から茶をついで飲んだりした。電燈の光の下にお糸の顔は常よりも一層蒼白く見えてゐた。

車が來て、やがて春枝は歸つて行つた。女中達はまた一しきり饒舌つてから、やがて彼方此方の戸締りに取りかゝつた。お糸は先に立つてお妻やお仙と共に廣間の方へ行つた。いつかちやんと男の寢てゐる室を知つてゐるお糸は、皆なと一一緒に雨戸をしめる風をして、その室の方へ裏から廻つて行く雨戸の栓をそつと外して置いた。

『お糸さん、其方は好いの？』

かうお仙が訊くと、

『えゝ、好いの、締めたよ。』

雨戸を締める音が暫し賑かにあたりに聞えてゐた。

五

寢る時分になつて、また自動車が來て、いろく／＼忙しい思ひをしたが、それもやがては納まつて、電燈が空しく帳場を照らしてゐた。お定が最後に一枚残つた入口の雨戸を締めるのをお糸は床の中から見てるた。誰も彼も皆な疲れて綿のやうになつてぐつすり寢込んでゐた。お照の寢言がそろ／＼始まり出した。

『お照さんのあれは持病だね。』かう女中達は常に言つてゐた。『聞いてをかしくなつてぶつと噴き出すやうなことがあるよ。のべつにやるんだからね。清元なんかをやつてゐるかと思ふと、お前さん何うしたんだえ？ などとすぐ變つて了ふんだからね。亭主になる人は災難ね。』などと言つて笑つた。お糸がそつと起き上つた時、お照は、『それちや餘りだよ。随分薄情だね、お前さんは、』などと言つてゐた。お糸はわざと帳場の方には行かずに、誰もゐない暗い臺所の方に出て、遠廻りに内藏の前を通つて、廁の側の縁側の處へへ行つた。そこでお糸はさつき持つて來て置いた下駄をさがして、それからそつと音のないやうに雨戸を明けた。

下駄を穿いて下に下りてから、あやしまれないやうに雨戸を外からしめて、垣と家屋との狭い間を、



斜に身を擦るやうにして通つて、お糸はやがて庭の木立の間へと出て行つた。と、急に夜番の爺さんのことが氣になつて來た。つい此間も離座敷に泥棒が入つて、お客と女と寝てゐる枕元のみだれ箱の中の金時計や指環を盗んで行つたので、此頃では夜番が嚴重になつて一時間毎には屹度その爺さんが庭を見廻ることになつてゐた。お糸は先づ四邊を見廻した。

やがて樹の影の暗い間を選んで、成たけ庭の縁のやうな處を縫ふやうにして通つて行つた。其處にまともに月の光を受けた三疊の離座敷があつた。其處には土地の鈴子といふ藝者がお客と一緒に泊つてゐる筈である。番に當つたお糸は宵の中に其處にコツプと水差とを載せた盆を運んで行つた。

そこをぐるりと廻つて、やがてその裏のところ來たお糸はほつと呼吸をついた。まアこれで安心だと思つたが、それと共に胸は却つて新しい期待に向つて躍つた。自分の身の周圍が今更のやうに振返られるやうな氣もした。お糸はそつと雨戸に手をかけた。栓を外して置いた雨戸は音もなく靜かに明いた。お糸は上にあがつてから體を屈めて手を伸して下駄を取つた。月はお糸の顔を白く照した。

茫と白くかすんだ夜は靜かであつた。花も草も木もすべて皆な恍惚としてゐた。夜露の落ちる音も靜かに聞えた。遠くの田圃では蛙が微かに鳴いてゐた。

間もなく夜番の爺の咳嗽をしながら通つて行く氣勢がした。

## 六

『ちよつと着更を取つて參りますから。』ある日お糸はかう言つて出かけて來た。

ぐるりと廻つた處にちよつとした通りがあつて、其處には近所の工場に通ふ職工達が多く住んでゐた。干乾びた鉢の置いてある肴屋の小さな店の隣には、若い夫婦者の一生懸命に働いてゐる八百屋の店などがあつた。

『をばさん。』

かう言つてお糸の入つて行つたのは、それから四五軒行つた駄菓子だの煙草だのをごたくと店に並べてゐる汚い二階屋であつた。その亭主はちき近くの護謨の會社に勤めてゐた。

それはお糸が最初に縁づいた山の手の小間物屋の近所で懇意になつたやうな人で、ある日土手下でばつたり邂逅した二人は、『まア、をばさん、何處にゐるの?』さう、お前さん其處にゐるのかえ?』かう言つて、それからお糸は度々其處に遊びに行くやうになつた。お糸の初めの亭主の話などを上さんは笑ひながらよく話した。『お前さんのあとに、若い色の白い女が來たよ。しよつちう店に坐つてゐるよ。新さんは此頃何處か會社か何かに勤めてゐるらしいよ。お前さん、それでもよく斷念めたもんだね。あれから田舎に歸つて、いつ出て來たのさ?』かう上さんはお糸に訊いた。



お糸は忙しい時には、洗濯物を頼んだり着物を縫つて貰つたりした。『いつでも二階は空いてるんだから、疲れた時には、寝にお出でよ。あゝ、いふところに勤めてゐては、お金にはなるだらうけれど、骨が折れるだらうからね。』で、後にはお糸は自分の荷物の一部を此處に預けて置いて、時々骨やすめにやつて来て、好きな五目飯などを炊いて貰つた。

『來てるよ。』

お糸の顔を見ると、上さんは莞爾笑ひながら言つた。

『さう？ もう餘程待つて？』

『さうね。そんなでもない……』

お糸は急いで二階へ上つて行つた。二三日前、お糸が來てその話をした時、『大丈夫だよ、お前さん、そんなに隠さないたつて。』かう上さんは笑ひながら言つた。今日も上さんは物珍らしいやうな心持で、お糸の頼んで行つた男の來る時刻を待つてゐた。と、今から三十分ほど前に、ソフトのハイカラな帽子を被つた、マントを着た、三十位の、何方かと言へば書生風の好い男が入つて來て、いくらか言ひ憎さうに顔を赧くし、『杉村さんツて言ふのは此方ですか。今日、三時頃に此處に來る人がある筈ですが、まだ來ないでせうか。』『もう參りませう。何うぞお上んなすつて。』かう言つて上さんは其まゝ男を二階に案内した。男は銘仙の袷に米琉の羽織を着て、頭髪を綺麗にわけてゐた。坐るとすぐ、財布から銀貨

を出して數島を二つ買つた。

一度上つて行つた二階からお糸はやがて下りて來たが、『お上さん、ビールか何か取つて頂戴な。』かう言つていくらか金を渡して、別に五十錢銀貨を一つ上さんに握らせた。『好い男だね、お前さん。』上さんはこんなことを小聲で言つて、くすぐるやうに笑つて見せた。

男は高窓から裏を覗いて見て、『よくかういふ處を見附けたね？』

『あのお上さん、昔から知つてる人なんだから、氣が置けなくつて好いんですよ。』

『もうすつかり知つてるのかえ？』

『知つてるでせうよ、屹度。』

お糸は笑つて見せた。

『始終、この二階は明いてるのかねえ？』

『夜は御亭主が歸つて來るのよ、あのお上さんの——』

『かう言ふ處に下宿すると好いんだね。』かう男は言つて見たが、こんな汚い暗い處に下宿しやうといふ氣は勿論なかつた。

『さうすると好いのね、毎日逢へて——』お糸もかう軽く調子を合せたが、『もうすこし暇があると好いんだけど……。夜は明けられないし、半日だつてかう言ふ處にぐづくしてゐると、お上さんがや



かましいし、仕方がないねえ。』

『それでもよく今日は出られたね。』

『此處にちよつと来る位なら、お上さんはやかましく言はないのよ。』

『此間は知れなかつたかえ?』

『大丈夫ですとも。だけど怖いねえ。何だか氣になつてあの時だつて落附いてゐられないんだもの。』

……あゝいふことが知れれば、すぐもう彼處にはゐられなくなるんだから。貴方も誰にも言つちや駄目ですよ。お伴れの人も知らないでせう?』

『それは知らないよ。』

『でも、春枝さんには、餘程思ひを残してゐるのね、貴方は——。あんな人に關係しては駄目ですよ。』

大不見轉よ。藝なんか何にも出来やしないんだ。』

『あんなものに思ひなんか残してやしないよ。』

『何うだか……』お糸は笑つて、『でも、つまらないわねえ。……』と言ひかけて、あとをよして、男の顔を凝と見た。

『お糸さん。』かういふ聲がやがて下でした。お上さんはわざと階段の下からそつと聲をかけたのであつた。

お糸は下りて行つたが、すぐビール二本と果物とを盆に載せて持つて来て、『何もないのよ。何か取りませうか。』

『澤山だよ。』

『お鮎でも取りませうか。』

『本當に澤山だよ。』

『ちや今度ね。今日は緩くらしめてゐられないんだから。……今度、芝居の見物の時か何か、行く振りして緩く来るから。電話は何番でしたつね。本局の一一三七でしたね。大抵毎日出てゐるのね。』

こんなことを言ひながら、お糸は男のコップと自分のコップとにビールを波々と注いで、グウウと見事に一杯呷つた。『あゝ旨しい。』かう言つてお糸はにつこり笑つて見せて、あとを一二杯つゞけて飲んだ。

見る／＼お糸の顔は赤くなつて來た。眼にも體にもすべて熱い心が漲つて溢れて來るのを男は見た。お糸は色白の丸顔の何方かと言へば肥つた女であつた。

其處には何かの雑誌の繪附録に出た木版の美人繪を處々に貼つた枕屏風などがあつた、仰向くと、高窓の上に、萎れたパンジイの鉢が置いてあつた。二人の眼には、晴れた春の午後の空が碧くひろ／＼と映つて見えてゐた。



小さな金鏈の音が絶えず隣の方から聞えて來てゐた。

『何だらう？ あれは？』

『飴屋か何かでせう。』

暫し沈黙が一間を領した。

ビールの一本の方の罎には、まだ酒が半分ほど残つてゐて、それに向うの窓から差し込んで來る日影が明るく當つてゐた。半分剥きかけた黄い夏蜜柑と汁を吸つたあとの白い皮とが赤い丸盆の上に一杯に散らばつて、林檎が一つ疊の上に轉がり出してゐた。裏では長屋の上さん達の長い饒舌が頻りにしてゐた。

暫く時は經つて行つた。

男はやがて手を延して、其處に置いてある飲みかけのコップのビールを取つて飲んだ。

やがてお衆の聲がした。『ね、時々、遊びにゐらつしやいよ。ね。日曜なんか一日來てたつて好いのよ。……夜は塞がつてゐるけれど、晝間はこの通り誰も來やしないんだから、明いてるんだから……。私だつて、ちよつとなら、いつでも來られるから。』

『でも……』

『何アに構はないのよ。私、此處のお上さんにちゃんと話して置くから……。ね？』

『何だか變だね、しかし……』

『大丈夫ですよ。』お衆はかう言つたが、溜息をついて、『もう一時間以上經つたのね。もう歸らなくつちやならない……。今度、本當に、いつか緩くり來て下さいよ。電話をかけるから。でも、よく來て呉れてね。』堪らなく可愛いといふ眼色をして、お衆は男の手を堅く握つた。

お衆はやがて階梯の處から下を覗くやうにして、小聲で、

『お上さん。』

上さんは笑つた顔をちよつと其處に出して、點頭いて見せてから、靜かに二階に上つて來た。

『もう、お歸りですか、まだ好う御座んせう。少し遊んでいらつしやい。』男の出かける支度をしてゐるのを見て、かう上さんは笑ひながら言つたが、そのまゝ、其處に散らばつてゐる盆を片附けやうとすると、

『好いのよ、お上さん、私が片附けるから。』かうお衆は傍から言つた。

日曜日に遊びに來るかも知れないといふさつきの話をお衆が上さんにすると、

『え、え、好う御座んすとも……。いつでも明いてゐるんですから。いくら緩くりしていらしつても好いんですよ。』こんなことを上さんは氣輕に言ひながら、散らばつたものを集めて、盆を持つて下へと下りて行つた。

『ぢや、其時ね。それまでは電話がかけられたらかけますから。』男がマントを着て下へと下りて行か



うとする時、お糸はもう一遍かう繰返して言つた。やがて店から男の出て行くのが奥から見えた。

『もう、私も歸らなくつちやー。お上さん、怒つてゐるよ、屹度。』お糸はこんなことを言つて、それから此間頼んで行つた洗濯物の話を始めた。

## 七

土手を上つて少し行つた處にある自働電話から出て二歩三步來たと思ふと、お糸は急に後からお仙に聲をかけられた。

『何うしたのさ。』

『ちよつと用があつて……』かう言つたお糸の顔は俄かに赧くなつた。

お仙は意氣わるさうにじろく〜とお糸の顔やら態度やらを見たが、そのまゝ何も言はずに、さつさと先に立つて歩いて行つた。お糸はわるい處をわるい人に見られたと思つた。今朝、『明日は芝居に行く日だから、晝から來て下さい。』と電話をかけたが、急にまた行かれなくなつたので、その斷りの電話をお糸は其處にかけに行つたのであつた。丁度、男は出勤してゐて、『さうかえ、それぢや仕方がない。その中また行く。』と言つて切れた。

屹度お上さんに話すに相違ない。話したつて構はない。その時はかう言はうかあ、言はうかなどとお糸はいろく〜に考へながらその日を暮らした。お仙と女將と何か話してゐるのを見ると、すぐ自分の事ではないかといふ風に疑はれた。しかしその日は一日女將の機嫌が好かつた。内て出來たお客を他所の待合に連れ出して行つて、長い間出入をさし留められてゐた若い藝者が、姐さんにつれられてあやまりに來た時にも、いつもの調子とは違つて、『お前さんも、それぢやあんまり義理知らずだよ。それやお客さまが先のお茶屋に懇意だとか何とか言ふんなら、まだ仕方がないけども、お前さんののは、さうぢやないんだから……。義理知らずは、一番いけないよ、お前さん。』などと言つてゐた。『あはびや、お風呂のお加減だよ。』などといふ元氣な聲が終日聞えた。

いくらか安心してゐると、夜になつてから、お定とお梅とお秀とのゐる帳場の處で、男を拵へて遁げて行つた元の女中の話などが出てゐるが、ふと、『しかしお前、油斷がなりやしないよ。今日も土手に電話をかけたに行つた人がゐるんだからね。』かう言つてお糸の方を見て笑つた。お糸ははつとして顔を赧くしたが、

『ちよつと用があつたもんですから。』

『兵隊さんかえ？ その中逢はせてやるからおとなしくしてお出でよ。』

女將はかう言つて笑つて、『此頃は手紙を書かないから、何うしたんだと思つてゐたんだよ。』

女將がお糸をひやかす時には、いつもきまつてその長い手紙と兵隊さんが持出された。書きかけた



手紙を女將に發見されたのはもう半年ほど前のことであつたが、其時女將は、『長い手紙だよ、ホラ、一  
間よりもつと長いよ。これでまだ半分だとさ。』かう言つて皆な女中達のゐる前で、その手紙をひろげ  
て見せた。『こひしきこひしき兵隊さんは此頃は何うしたえ。』何ぞと言ふと、こんなことを言つて女將は  
よくひやかした。お衆の持つてゐる兵隊姿の男の寫眞をも女將はかねて知つてゐた。

『電話をかけるんなら、うちでおかけよ。構ひやしないよ。……でも、家ぢや、岡焼が多いからゆつ  
くり話が出来ないと見えるね。皆な誰でも、さういふところには、こつそり電話をかけに行くから不  
思議だね。男ツてそんなに好いもんかね。』かう言つて女將はアハハと大きく笑つた。お定もお秀も笑つ  
た。

その兵隊さんは、お衆が山の手の小間物屋から暇を取つて田舎に歸つて行つた時、その町の中ほどの  
大きな旅籠屋の帳場に父親の代理をして帳つけなどをして坐つてゐた若者であつた。お衆は三年ほど田  
舎にゐるが、その間に随分種々な苦勞を嘗めた。二度目に縁づいた商家から戻つて來てからは、父母の  
ない身の、兄弟の世話になるのが厭さに、自分で家を出て、彼方此方に行つて茶屋奉公などもした。  
一里ほど離れた町の茶屋では、かなり長く一年ほどつとめてゐた。其處でお衆はその兵隊さんを知つ  
た。

お衆は今でもをり／＼その兵隊さんのことを頭に描いた。愈々兵營に入る時の別れの辛さや、その前  
前夜の盡きない涙などが思ひ出された。兵營の前の下宿にわざ／＼逢ひに行つたことなども思ひ出され  
た。お衆はその男の跡を追つて、東京に出たやうなものであつた。初めは商人の角帯から、俄に軍帽軍  
服を着けた姿を珍らしく、一緒に並んで淺草の仲見世を歩いたことなどもあつた。しかしそれが今では  
不思議にも遠い昔の繪のやうにお衆には見えて來てゐた。

男女の細かい關係は田舎でもかなり詳しく知つてゐるが、此處に來てから、半年と經たない中に、一  
層それが深くお衆の心にしみ込んで行つた。其處には思ひもかけないやうなことが澤山にあつた。若い  
妓が平氣でお爺ちやんの席に侍つたり、大勢の男を巧みに綾なしてゐたりするのを始めは不思議なやう  
な淺間しいやうな心持で見てゐるが、それにも段々慣れて行つた。『お衆さん、あちらに知れないやうに  
して下さいね。』此頃は平氣でかういふことをお衆は妓達から頼まれた。

『何うだえ？ あの妓を御覽よ、まだ十九だよ。それであの腕なんだからね。ちつともあの人のこと  
などをあのお客の前ではおくびにも出さないぢやないか。貴方一人ツて言ふやうなことを言つてゐるぢや  
ないか。巧いんだね。私の知つてゐるだけでも、あの時が百圓、あの時が五十圓、もう餘程握つてゐるよ。』  
お定はよくこんなことを話の種にして笑つた。さういふ妓達は此方の座敷から彼方の座敷に行くことな  
どは何とも思つてゐなかつた。『一時間ばかり待たして置いて頂戴よ、ね、構ふことはないわよ、』などと  
言つて、平氣でその座敷を出て別の室に行つて寝たりした。『さう？ 之なの？ 御機嫌がわるいの？』



かう言つて妓が入つて行つたと思ふと、やがて其處からのんきに笑ふ聲が聞えて來た。女將はまた女將で、『旦那のやうな氣のお廣い方はないんですから……。何も彼も知つてゐらつしやるんですから。とても旦那のやうな真似はしたくつても私などには出來やしませんよ。本當に心が出來てゐらつしやるんだから、何よりこの妓が仕合せてすよ、』などと彼方此方の座敷で同じやうなことを言つて、アハハと大きく笑つて見せた。

お糸の番に當つた菊の間の肥つた客の許に女將は例のお世辭をふり撒きに出かけて行つたが、いつもに似合はず其處で長い間何か話してゐた。

『好い加減なことばかり言つてゐらつしやるよ、旦那も……』

『好い加減なもんか。此頃はお上も餘程かんがわるくなつたぜ。』

『でも、ねえ、まさかお常が……』

『だから駄目だつて言ふんだ。古い奴だが、燈臺元暗しかね。』

『でも……それはうそだ……。いくら旦那が言つても、お常がまさか。』

『本當にしないんなら、もつと詳しく言つて見ませうかね。』女將の顔を客は面白さうに笑ひながら見て、『此處から下谷へ行つて、土手下に來て、今ぢや、牛込にゐるだらう。』

『よく御存じね。』

『そんなことばかりぢやないさ。もつとよく知つてゐるさ……お常が此處にゐる時分、よく下谷へ行くツて言つて出かけたらう。兄貴が病氣だなんて言つてゐたらう。』

『ええ。』あやふやな顔をして女將がゐると、

『皆な此處の指金だよ。得意さうに客は自分の鼻を指さして見せて、『あいつ、何處かちよつとおつなところがあるんだ。馬鹿に色つほくつて、しつこく絡みついて來るからね。』

アハハと女將は笑つて、『それで旦那は一體何うしたんです？』

『いよく本氣になつて出直して來たね。』傍にあつた盃をぐつと呷つて、『油断もすきもありやしないよ、お上……。駄目だよ、そんなことでは……』

『ちや、旦那が何うかなすつたの？』

『話して聞かせようか。』

『ええ。』

『さうさな……。外ならぬお上のことだから、参考に言つてきかせてやらうかな。……此處を出てから一と月位淺草のある家に居たよ。』

『皆な旦那が貢いだんですか。』

『さうさ、此處が軍師さ。』客はまた鼻を蠢かすやうにして、『あの時、お常が何うしてもお暇を頂き



たいつて言つて、無理やりに出て行つたらう。その前の日に宮戸座か何かへ行つたらう？」

『今でもさうなんですか、旦那。』

『今、さうなら、誰がこんなことを話す奴があるもんかい。あいつはしつこいからな。それがいけないんだ。ちよつとは男も乗り氣になるが、ぢき飽きるよ。』其處にお糸が入つて来るのを見て、『此處なんかもあやしいもんだぜ、なア、お糸ちゃん。一體お上が無理だよ。こればかりはいくらやかましく言つたツて駄目だよ。だ……め……だ……よ。』と長く引ツ張つて、首を玩具の虎のやうに動かして見せた。

『何を言つていらつしやるの？ 何が駄目なの？』其處に入つて來た相手の藝者が言つた。

『面白い話をしてたんだよ。』かう言つた女將は、舌をそつと出したお客と顔を見合せて、大きな體を抱へるやうにして笑つて、わざと慌てたやうにあたふたと其處から出て行つた。

## 八

忙しい花の時期もいつか過ぎて、花壇には毒々しい赤い西洋の草花などが咲き始めた。

帳場から廣間に行く路の兩側には、木瓜だの椿だの錦木などの鮮やかな緑葉の中に、山吹の黄と躑躅の紅とが縫ふやうに雜つて咲いてゐて、雨の降る日などには、それが纏れるやうに歩いて來る女達の蛇

の目の傘に美しく映つて見えた。廣間の廣い上り口の廊下では、泊り込みの綺麗な藝者が朝の電話を自分の内にかけてゐた。

一組か二組しか客のゐない靜かな午前には、女中達はそこらの明いた室に集つて、取留めもない世間話などをしてゐた。と、何處ともなくしめやかな小唄の爪弾などが聞えて來て、細かい雨が軒の簾を斜に掠めた。

風の吹く日には、長い廊下は、拭いても拭いても、すぐ塵埃でザラ／＼した。『風が一番厭ね。』かう言つて、女中達はすぐ汚くなるバケツの水を井戸端へ何遍となく取替へに行つた。さういふ時には、風呂番の男も手傳に來て、戯談などを言ひながら、尻を高くして雑巾を此方から彼方へと押して行つた。

お糸の胸の中に秘めて置いたその男の影は、その頃には、もうかなり濃く深くなつてゐた。それまでに、男は三四度はその汚い暗い二階に來てゐた。芝居に行つた時には、お糸と一緒に見物に行つた土地の藝者に、『ちよつと私用があるから、今度の幕がすんだら歸りますからね、後生だから、お上さんには終までゐることにして置いて頂戴ね。』かう言つて頼んで置いて、急いで裏道を通つてその二階へと行つた。その時はお糸は初めて自分の願ひが遂げられたやうな氣がした。二人は緩くりした氣分で、近所から料理などを取寄せて食つた。

お糸は忙しい用事をしてゐながらも、絶えず嬉しい嬉しい構曳の光景を頭に浮べてゐた。男のやさしい言葉



や態度が自分にも不思議に思はれるほど際限なく繰返された。其處にも此處にも男の顔が見えたり消えたりした。『僕、少しは金を持つてるよ、』と言ふのを無理に男に仕舞はせて、料理の勘定をして来たことなども思ひ浮べられた。下番に當つて板前の男と一緒になつて働く時には、今までは厭で厭で仕方がなかつたが、それも此頃ではそれほどはなくなつて來てゐた。『作さん、お前さんの情婦は何うしたえ？』かう此方から冷かしてやるほどの元氣をお衆は見せた。』

『お衆さん、此頃、何か好いことがあると見えるね。』

煮方の政はかう笑ひながら傍から言つた。其處には赤貝だの蜆だのが澤山に置いてあつて、此處の名物の赤貝の腸を、政は一生懸命に長い間かゝつて煮てゐた。

『それはさうさ、私だつて、ちつとは面白いことがなくつちやね。』こんなことを言ひながらお衆はせつせと働いた。

## 九

女將の機嫌のわるい日には、女中達は誰も落附いて坐つてはゐなかつた。女將の疝立つた聲は終日四邊に響いて聞えた。

『お上さんも癩癩が起るだらうよ。一人だからね。男のすることまで何も彼も心配しなければならな

いんだから。』かう言つてお定は笑つて、『氣になんかしてゐちやとでもつとまりやしなよ。自分が面白くないから人に當るんだよ。放つて置くに限るよ。いゝ加減經つと、ひとり手に治るよ。……』こんなことを言つて女將のひとり寝のさびしきなどを話した。

『矢張、男がゐないと、女は何うしても氣難かしくなるのね。』

『お客さまも此間言つてたわ。あゝいふ風に始終神経が立つたり、頭痛がしたり、腫物が出來たりするのは矢張一人である故ですつてね……』

『さうかね。』

『それも子供でもあればだけでも、本當の一人もないんだらう……。あの深川に行つてゐる貞ちやんだつて、唯伯母、姪の間柄といふだけだからね……。お上さんだつて時々癩癩が起るよ。』

『それに、嫉妬深いのね、お上さんは。』女中達は終にはいつも話をそんな處まで持つて行つた。女將の二階の寢間の話なども出た。『寢道具だけでもせめて綿の柔かいのを着なけれや、私なんか他に何にも樂みはないんだから。』かう言つて、體のふつくらと中に埋まるやうな蒲團を二枚も三枚も女將は重ねて敷いて寝た。貞子といふ姪が此處にゐる頃には、いつも厭がるのを無理に一緒につれて行つて抱いて寝たなどといふ話をお定は皆にして聞かせた。

『でも、今お上さんの身分ちや、無闇なこと出來ないしね。』丁度其處に來合はした土地の中姐さん



まてがこんなことを言つて笑つて、『それから思ふと、さくら屋の女將なんか丸で違ふわね。あの年になつて男なんか拵へるのは何とも思つてゐないんですから……。うっかりしてゐると、自分のお客を取られて、藝者がびつくりしたり何かするんですからね。……それから思ふと、此方のお上さんは堅いわ。男まさりだわ。全くよ……。』

『だから、仕方がないよ、嫉妬の深いのは……。その證據には、此處に勤めてゐた女中で、後々まで尋ねて来るものなどは滅多にないぢやないか。皆な男のことで出されて行つたものばかりぢやないか。……その癖おかしいのね。自分が乗氣になると、出来ない間柄でもまとめてやらうとするんだよ。あの坊主のことなんか、さうだらう。お上さんが纏めてやつたやうなものだアね。……でも、纏まつたあとでは羨ましいやうな氣がするんだね。一緒になつた當座は、政ちやんが来る度に油を取られてゐたよ。』

『お前さん、遅く歸つて行つて何うするんだえ？ お前さんの方から何うかするのかわ、なんと言はれてゐた。』

『こんなことを言つて、女中達は笑つた。しかしお仙のゐる前ではかういふ話は出たことがなかつた。お仙は何を女將に話すかわからなかつた。』

ある日、お梅は面白さうにお衆に言つた。『お前さん、知つてる？ まだ知らないの？』

『何を？』

『知らないの？』お梅はまだ面白さうに笑つて、『話さうかね。……あのね、あの人がね、そら、兎さ』

んさ、あの人がね、これと出来てるんだとさ。』

『さう？』

お衆は眼を丸くした。

『さうツて、お前さん、芳どんぢやないよ。清どんだよ。』

『清どん？』

『面白いぢやないか お前さん 芳とんに振られたもんだから、乗り換へたんだよ。』

『だつて、清どんには照江さんツて言ふ人がゐるんぢやない？』

『だから面白いんだよ。清どんは、あれで中々色師だアね。』

『本當かしら？』

『本當だとも、……。私、さつき、其處を掃除してゐると、あの爺やがね、イヤに莞爾笑つてゐるぢやないの？ いつもあんなに澄ましてゐるのに可怪しいと思つてゐると、長生をすると、世の中には面白い事があるもんぢやなんて言つて笑つてゐるんだよ。變だから、何うしたのさツて訊くと、昨夜、見たんだとさ。あそこん處で。』かう言つて、お梅は後の方を指して見せた。廣間と紅葉の間の奥のところにある畑がすぐお衆に想像された。

『イヤだねえ。』



『可笑しくなるね、お前さん。あんな利口さうな顔をしてるてさ。間が抜けてるぢやないか。』  
しかしお衆はこつそり其處を抜けて月の間へ男を見に行つたときのことなどを考へてゐた。他人のこ  
とばかり笑つてはゐられないやうな氣になつてゐた。三十一二の色の淺黒い箱屋と照江とお秀との顔が  
一緒になつて早く眼の前を掠めて通つて行つた。不思議な氣がした。

『それ、そこを通つて行く。』

かうお梅に領てしやくつて致へられて、お衆が其方を見ると、藥罐と急須とを載せた盆を持つたお秀  
が眞面目な顔をして、向うの若葉の中に半身を見せて通つて行つてゐた。二人は顔を見合せて笑つた。

『黙つてお出でよ。内所にしておやりよ。』

『でも、あいつの利口ぶつた顔が小憎らしいぢやないか。』

『でも、知らん顔をしてお出でよ。』

お衆には、眞面目の顔をしてゐるお秀の顔が何となく見られるやうな氣がして仕方がなかつた。お上  
さんに御世辭を言つてゐる顔なども可笑しかつた。夢にも知らないお秀は、のんきに煙草の煙を鼻から  
出してゐたりなどした。

夜になつてから、清どんは、例の通り箱を持つて莞爾してやつて來た。その顔がまたお衆には何とな  
く見詰められた。お衆はふと自分も誰かにさう思はれて何處かで見つてゐられやしないかと思つた。ひと

り手に周圍が顧みられた。

お秀はやがて二階から下りて來たが、其處に清どんのゐるのを見ると、わざと其方を見ないやうにし  
て、厨の方へ行つた。その後姿を見送つてゐたお梅は、お衆と顔を合せて眼で笑つて見せた。お衆はく  
すぐつたいやうな變な氣がした。

その翌日、お衆は照江の客の番に當つて、離座敷の六疊に料理を運んで行つた。その客と照江との仲  
はかなり長い間であつた。島さん、島さんと女中達は常に呼んでゐた。日本橋の方の銀行に勤めてゐる  
人で、酔ふと長唄などをよく唄つた。お衆は照江の顔を不思議な心持で見ずには居られなかつた。此内  
だけでも、照江には他に馴染の客が二人程あつた。

土手下の混雜した細い巷路の中にある清どんの家などもお衆には思ひ出されてゐた。清どんは一人で  
住んでゐた。寝る時だけ其處に歸つて行つてゐた。照江が朝そこから出て來たなどといふ噂は前から女  
中達にも知られてゐた。『照ちゃんも随分浮氣だね。ちゃんとあの井上さんツて言ふ人があるんだらう。  
彼處にも遅くなつてから寄つてツたり何かするんだよ。まさか清どんとなんかうそだと思つてゐるが、  
本當だつてね、』などとお定も言つてゐた。

『貴方、そんなにお酒を上つちや駄目ですよ、』などと照江は始めは言つてゐたが、其後お衆が行つた時  
には客はつまらなさうな顔をして黙つて坐つてゐた。照江はまた照江で、『見つともないわ、貴方、そん



なに怒つたり何かして？」などと言つてゐた。

『俺は歸る。』

客は急に席を立つた。

お糸は驚いて止めた。照江も放つておくわけには行かないので、何の彼のと云つてとめた。『もう、彼方に入らした方が好う御座いますよ。』お糸はかう言つて無理に客を向うの室の方へ伴れて行つた。

あとを片附けて帳場に行くと、お秀と照江とは何か其處で面白さうに話して笑つてゐた。

『さう？ あのお客？』

『すかないねえ。』

『誰？ 來てるのは？』

『きいちやん。』

『きいちやんツて言へば、あそこのお爺ちゃん、大變なんだツてね。だから、あそこは抱妓が落附かないんだツてね。』

『そんな話ねえ。ちや、本當なのかしら？』

などとお秀は言つてゐるが、お糸が入つて行くと、照江は急に此方に向いて、『もう向うに行つて？』

あんなことは今迄はないんだけど……今日は何うかしたのよ。』かう言つて、巻煙草に火をつけて、輕

い足音を立て、奥の離座敷の方へと行つた。其處に引ちがひに、清どんは菊奴の箱を持つて入つて來た。

十

杜若を持つて、市中の料理店や待合や客筋の家々を廻る時はやがて來た。女中達は毎日交るゝ方面をきめて、車に乗つて出かけて行つた。澤山に井戸端に菰に包まれて置いてある紫白の花には、朝の雨がしめやかに降つてゐた。

『お配りも好いけれど、足代は皆な女中持だからね、お前さん。家に由つては、さう氣の利いたお家ばかりはないからね。遠いところをわざわざ行つて、書生さんに女關で追拂はれて了ふやうなこともよくあるからね。』などとお定は言つたが、實際、女將の言ふやうな旨いことばかりはなかつた。山の手は殊にさうであつた。構ばかり大きくつて、取次が大きな聲をしてゐて、運が悪いと、鎖につながれた恐ろしい犬に噛み附くやうに吠えられた。『お邸は犬が怖いよ。』かう言つて女中達は皆な山の手に行くのを厭がつてゐた。

『お糸、一番お前が山の手が好きだね。』

かう女將は笑ひながら言つた。去年はまだ此處に勤めたばかりの新參者であつたし、それに運が好か



つたら、兵營を訪ねて男に逢ふ積であつたから、進んで出かけても行つたけれど、今年はさういふ望もないし、去年兵營の中でまごついて、たうとう逢はれなかつた失敗を二度繰返す元氣もないので、お衆に取つては、寧ろ近い下町を廻つて、早く切り上げて、あの二階でゆつくり男に逢ふ方が希望であつた。しかしさうも言つてゐられなかつた。お衆は澁々ながら出かけて行つた。

朝降つてゐた雨は、幸ひに晴れて、山の手に行つた頃には、日影が晴れやかに若葉にかゝりわたつてゐた。海軍の御前と言はれたお邸から大きな會社の重役をつとめてゐる旦那の邸へ行つて、それからある貴族の殿めしい門の中へ入つて行つた。花壇に見事な草花の咲いてゐる邸などもあつた。ある邸では、丈の高い色の白い綺麗なお嬢さんが書生と犬とを相手にして遊んでゐたが、お衆が花を持つて内立關の方から入つて行くと、それをめづらしさうにいつまでも長く長く見送つてゐた。さういふ大きな邸の主人をお衆は皆なよく知つてゐた。『あんな大きなお嬢さんがあるんだね、まア、』などと思つてお衆は不思議な氣がした。新橋あたりからいつも大勢お酌を伴れて來て、裸踊などをさせて大騒ぎをして行く御前の邸には、自動車が一臺來てゐて、お衆が裏に廻らうとする時、山高帽にフロックを着た紳士が立關から送られて出て來てゐた。入口には見事な牡丹の鉢などが置いてあつた。

『あゝ、さうかえ、御苦勞だつたつて言つてお呉れ。』かういふ奥方らしい聲が奥でして、やがて出て來た女中は、紙に包んだものをお衆に渡した。

## 十一

坂の下の賑やかな町を通つたり、活動寫眞の幟の並んで立つてゐる前を通つたりして、お衆はそれからそれへと杜若を配つて廻つた。午は名高い蕎麥屋に入つて、車夫にも天ぷらなどを御馳走した。それはつい二三日前に來たといふ若い衆で、お衆の生れた町から東に大きな川を一つ越した町の者であつた。そこにはお衆の伯母に當る人が嫁いでゐて、幼い時分にお祭によばれて行つたことなどがあるので、二人の話はよく合つた。『さうですか、東屋のお上さんなら、よく知つてゐますとも……』などと若い衆は言つた。訛のある故郷の言葉もお衆には何となくなつかしかつた。若い衆は、『一つ今度は思ひ切りこつちで稼がうと思つて、あそこへ入つたんですが、勤まりますか？』などと言つた。お衆はその車屋の親方の話や得意先のお茶屋の話などを何彼となく聞かせてやつた。

午後の四時過ぎには、それでももう大抵配つて了つて、お衆を乗せた車は、元お衆のゐた山の手の通りを歸途の方へと向つてゐた。と、不意に後から聲をかけるものがあつた。振返つたお衆ははつとした。其處には母方の伯父が後から一生懸命に追つかけて來てゐた。

その伯父にはきまりがわるくつて顔を合せられない身の上にお衆はなつてゐた。堅い勤人の伯父はお衆が小間物屋を出て行く時分から喧しく意見を言ふやうな人であつた。今ゐる處などを話さうものなら



それこそ何と言つて怒るか知れなかつた。お糸はわるい人に逢つたと思つた。

しかしめぐり逢つたが百年目と言つたやうな態度で、しつかり捉へた伯父の手をお糸は容易に離れることが出来なかつた。『好い處で逢つた。お前の行方がわからないツて、田舎では心配してゐた。』かう言つてお糸は無理やりにその近くに住んでゐる伯父の家に伴れて行かれた。

最初小間物屋にお糸が嫁いたのも實はその伯母が周旋して呉れたのであつた。その時分には、伯父は今の處とは違つた所に住んでゐたが、お糸は其處に一年ほど世話になつてゐた。小間物屋に行つてからも、亭主や姑の愚痴をもよく其處にこぼしに行つた。多い伯父達の中でも、この伯父はことに幼い頃からお糸を可愛がつてゐて、お糸の父母が死んでからは、一層不憫に思つてゐるらしかつた。此間なども、田舎から出て來たお糸の兄に、『お前達がしつかりしてゐながら、妹に、そんな眞似をさせて置くつて言ふ奴があるもんか。それは、お糸もわるいが——あいつにも困つたものだが、何うかしくちや仕方がないぢやないか。お前達が餘り構つてやらないから、ついあゝいふ氣になるんだ、』などと小言を言つてゐた。伯父の家は生籬などのある三間位の小さな家であつた。仕方がなく車をつれて、伯父のあとについてお糸が行くと、『ヤア、めづらしい。お糸さんかえ。』かう言つてお世辭の好い伯母は出て迎へた。

その伯母の聲の中には、お糸が初めて田舎から東京へ出て來た時分のことが細かく織込まれてゐた。

お糸は其處にやかましく伯母に言はれて働いてゐる自分を見た。メリンスの帶をしめて町の通りに買物

に出かけて行く自分を見た。宵の中から假睡をして伯父によく起される自分を見た。憐れな慘めな其頃の自分の姿は其處にも此處にもまだ歴々と残つてゐた。

『まアお糸さん、綺麗になつたこと、丸で見違へるやうだよ。』

かういふ伯母の聲は、矢張其時分の聲だ。如才のない柔かな調子の底に針を包んだやうな神経性の聲だ。『お糸さんの尻焼けにも困るよ。』と言つた聲だ。伯母は矢張その時分と同じやうな眼色で、じろくくと氣味わるくお糸の顔を見た。

姑の難かしいのも厭だつたが、その小間物屋の男の嫉妬深いのもお糸には堪へられなかつた。店に來るお客と話などしてゐてさへ、亭主はすぐ變な顔をした。大きな鼻、頬骨の高く立つた顔、肌理の荒い黒い肌——お糸の若い心はさういふ男を亭主にしてこれから長い一生を送る氣には何うしてもなれなかつた。お糸は子供の出來ることを恐れた。お糸は一日でも心を許して日を送つたことはなかつた。『何うかして出たい。』かう思ひながら、それでも半年程其處にゐた。

二三度出たり入つたりして、後には仲人まで中に入つたが、とても自分の體が此處にゐては駄目だと思つたので、お糸はある夜、身の廻りのものを持って、こつそり其處から家出をした。そして伯父の家にも寄らずに、すぐ其處から田舎へと行つて了つた。お糸はその時分のことを頭に繰返した。

家こそ違ふが、伯父の袴や羽織が其處にかけてあるし、古い同じ箆笥が置いてあるし、伯母に喧しく



言はれる度に、その前に立つてよく涙を拭いた鼠入らずも勝手元に置いてあるし、何も彼も變つたものはないのに、變つて行つた自分の身の上がお衆には種々に思ひ廻された。二三年の中に心も氣分も境遇もすつかり變つて行つて了つた自分をお衆は見た。

『車なんか歸して了つた方が好い。』かう伯父は言つたが、『でも、早く歸らなくてはなりませんから。』かう言つたお衆の胸には、男が今日三時頃からその二階に来てゐることを思ひ出さずには居られなかつた。お衆は出がけに男の勤め先に電話をかけて置いた。

しかし、伯父伯母は容易に歸さうとしなかつた。伯父はお衆の勤めてゐる先を何の彼のと言つて訊いた。大きなお邸に奉公してゐることにしてお衆が話すと、『さういふ處なら好いやうなもんだけど……、早く身を固めて安心さして呉れるやうにしくつては仕方がないぢやないか。お前、もういくつだ？』などと伯父は言つた。

伯母の姿がちよいと見えないと思つてゐたが、話を早く切つて、歸り支度をする時、『まア、好い。此處ぢや旨いものはないが、今、鰻を御馳走するつて言つて出かけて行つたから。』伯父はかう言つて留めて、緩くりした調子で、また盡きない話を續けた。

お衆は段々氣が氣でなくなつて來てゐた。約束して置いた時間からもう二時間も經つてゐる。家の方は少しは遅くなつても構はないが、男がさぞ待つてゐるだらうと思ふと、氣が氣でない。ぢつとして坐

つてゐられない。それをまた伯父は平氣で、田舎の話だの親類の話だのを際限なく話しかける。次兄の家内のお産をした話などをお衆は唯うはの空で聞いてゐた。

『兎に角、餘り遅くなりませんと叱られますから……。折角ですけれども、今度ゆつくりお暇を戴いて參りますから。』かうお衆は何遍となく言つて暇を告げた。しかし、伯父は、『まア、まア、折角だから、さう手間は取らせないから。』と言つて幾度もとめるし、外から歸つて來た伯母は伯母で、『そんなことを言はずに……お衆さん。久し振りぢやないか。折角頼んだんだから、私の家の御馳走だつて、食べて行つて呉れたつて好いちやないか。』などと言ふので、それをふり切つて歸るわけにも行かなかつた。

長い日の影の段々障子の外に消えて行くのを氣にしながら、漸くやつて來た鰻の井にちよつと箸をつけると、すぐ蓋をして、『ちや、本當に食べ立ちですけども、叱られると困りますから……。え、え、今度は何ゆつくり來ますとも。』かう言つて漸く立上つて暇を告げたお衆は、外へ出ると、其處にあくびをして待つてゐた車夫に、いくらか金を握らせて、そのまゝ歸途を急がせた。

車夫が一生懸命に走つて行くのにも拘はらず、早く滑かに前に轆つて行く電車が羨ましいやうな氣がして、お衆はいつそ車を下りて電車に乗らうかと何遍となく思つた。しかし減多なことをして、そこから自分の祕密が知れて行くやうなことがあつては大變であつた。お衆は車の上で唯氣を揉んでゐた。

土手の車宿の前に來た時には、日がもうすつかり暮れ果て、ゐた。待合や料理店の廣告燈には灯が明



るくついて、前の西洋料理では、客が二三人入つてビールを飲んでゐるのがはつきりと見えてゐた。『私此處で好いよ、ちよつと買物をして行くから。』お衆はかう言つて車を下りるとすぐ、土手下の細い裏道の方へ急いで姿をかくした。

店から呼吸を切つて入つて行くと、上さんは、

『お前さん、何うしたのさ?』

その返事はせずに、

『まだゐて?』

『ゐるにはゐるけれど……もう歸るツて言ふのを、一生懸命で留めてるんだよ。』

『さう? ゐるの? 有難う。』

かう言つて、何も彼も忘れたやうに、お衆はあたふたと二階に上つて行つた。

十二

宿の上さんは二人の仲を絶えず好奇心の眼で見つてゐた。始めは男の素性や心持がよくわからなかつたが、二三度話をして居る中に、この仲はとても長く續くものでないといふことが段々わかつて來た。女は男の爲めに少からぬ金を出して居るらしかつた。お衆に頼まれて、男物のセルの單衣を上さんは縫つ

てやつた。

『お前さん、しつかりしなくちや駄目だよ。』

こんなことを上さんが言ふと、『さう見えるの? お上さんには?……でも、そんなでもないわ。』お

衆はかう言つて靜かに笑つた。何うかして約束した日に男が遣つて來ない時などには、お衆はつまらな

さうな顔をして、奥の長火鉢の前に黙つて坐つてゐた。

『今日は何か急な用が出來たのね。もう來ないわ。』

かう言ひながらも、お衆は歸らうともせず、いつまでもぐづぐづしてゐた。店から出て、夕暮近い町に立つて見てゐたりした。

『でも、あれでも、今、勤めてゐる處では、少しは月給は取つてゐるのよ。忙しくつて困るツて言つてゐるから。』

何うかするとお衆はかう言つて、男の素性などを長々しく上さんに話した。さういふ時には、お衆の顔には、いつも生々した得意さうな色がのほつて來てゐた。男はいろくといふことを女に言ふらしかつた。將來の事なども巧に女に話して聞かせるらしかつた。

男と上さんとも其頃にはもうかなり懇意になつてゐた。女の來ない間を、下に下りて來て話をして行くこともあれば、上さんが二階へ押かけて行つて長い間話し込むことなどもあつた。厚い小説本などを



持つて来て、明放した二階に寝轉びながら、半日それを讀み耽つてゐることなどもあつた。『お上さん、お氣の毒ですがね。ビールを一本取つて下さいな、退屈しちやつた。』こんなことを言つて、男は財布から金を出した。

二階の二人は大抵は低い聲で楽しさうに話した。時々静かな笑ひ聲が混つた。何うかすると、お衆の高く笑ふ聲なども聞えて來た。しかしさう面白いことばかりは續いてゐないらしかつた。ある日、いつもに違つた甲高いお衆の聲がしたので、『めづらしいことだ、』などと上さんが思つて居ると、やがて頻りにそれをなだめる男の聲があとから聞えた。時には男が變なつまらなさうな顔をして歸つて行くことなどもあつた。

ある日、男が歸つてから、お衆は長火鉢の傍で貯金の通ひ帳をひろげて、ひとりで溜息をついてゐた。と、『何うしたのさ？ お前さん。溜息なんかついて？』かう言つて上さんは店の方から入つて來た。お衆は急いでその通ひ帳を帯の間にかくした。

## 十三

さみだれの頃には、男の足はもう大分遠くなつてゐた。お衆は紺蛇の目の傘に思ひを包みながら、夕暮道を此方から彼方へ往つたり來たりした。溝は水が漲つて、ツン／＼生えた藺や蘆などに雨が細かく

降りかゝつた。

『なアに大丈夫よ。』

上さんの意見に對して、お衆はかう何遍となく言つたが、しかし男の來ない時には、ぢつとして坐つてはゐられないやうな氣がした。『夏服をつくるんだから、金を少し何うかして呉れないか、ぢきかへすから。』かう言ふので、無理算段をして、お衆は漸くそれを間に合せてやつた。それから二三度男はやつて來たが、最後の時には、つまらぬことで、痴話喧嘩をして、留めるのもきかずに男はスタ／＼歸つて行つた。

『お前さんにも似合はない。私にはちやんと初めから解つてゐたよ。』

『でも……』

『好い加減にする方が好いよ。話が旨すぎるもの。』

『大丈夫だよ。』

お衆は下唇を咬むやうにして、いくらか顔を赧くして言つた。お衆は長火鉢の前で黙つて溜息を吐いてゐたりした。かと思ふと、時には、『構ひやしないよ、何うなつたツて構ひやしないよ。何うせ、私なんかかういふ身になつたんだから、』などと言つて、自暴氣味に田舎で關係した二三人の男の話などを上さんにしてきかせた。



雨は絶えずビシヨん／＼と降つてゐた。新緑は濃くなつて、梧桐や梅や櫻の葉から雫が傘の上にバラバラと落ちた。灯は濡れた敷石の上に光つて、離座敷からは爪弾の三味線の音が静かに聞えて来た。ある夜、お衆とお定とお秀とが帳場の處に坐つてゐると、少し酔つて裾をホラ／＼させて入つて来た照江は、『誰だか知らないけど、私のことを何の彼のつてお客に言つた奴があるんだよ。女中の癖に、内證にしてゐることをお客に言はれてたまるもんか。稼業の邪魔だよ。』

『何うしたのさ？ 照ちゃん。』

傍からお定が言ふと、『何うしたつて？ お定姐さん聞いて下さいよ。私、口惜しくつて、私のことを何の彼のとお客にすつばぬく奴があるんだよ。生意氣な顔をしてゐて……』

『誰よ、照ちゃん。』

『誰ツて、解つてゐるぢやないか。よく圖々しい顔をしてゐられるよ。人のことより自分のことを考へて見るが好い。』かう言つたが、向うに低頭して黙つてゐるお秀の方を睨むやうにして見た。

お衆もお秀の顔を見た。

『照ちゃん、お前さん、酔つてゐるね。』

『酔つてやしないよ。正氣だよ。』照江は體をぐた／＼させて、『他人のことを不見轉だの何だのと大きなお世話だよ。それよりも自分の足元に氣をつけるが好い。お上さんにさう言つてやるから構はない。稼

業の邪魔をされて黙つてゐる奴があるもんかね。』

『お前さん、一體、何を言つてゐるんだよ。』

お定はかう言つたが、すぐあとをついで、『お座敷はもう濟んだのかい？』

『お座敷なんか何うでも好いんだよ。……どうせしくじつちやつたんだよ。いろんなことを饒舌りやつたんだからね。色の生白い、生意氣な顔をしやがつて。お世辭でも言つてお茶代の五十錢も餘計に貰つてゐるさへすりやそれで好いんだよ、お前なんか。』

ふつと擧げたお秀の顔は蒼青になつてゐた。ぶる／＼體が震へてゐるのをお衆もお定も見取つた。

何も知らないお定にも、これは何かあるのだといふことがすぐと飲み込まれた。

『あんな顔をしてやがる。……さう見えても口惜しいのかえ？』

『何だよ、照ちゃん、見つともないぢやないか。』

お定が止めるのを振放つて、『何か言ひたけりやお言ひよ。言はせて御覽よ。口惜しいと見えるよあれでも……。そんな奴に負けてゐてたまるもんか。』

『何とでもお言ひよ。』

急にお秀が口を切つたので、『言はなくつてさ。馬鹿！』照江の顔に昂奮した色が歴々と上つたと思ふと、いきなり立つて其方へへ行つた。お秀もそのまゝ身構へして立上つた。顔は蠟のやうに蒼白かつた。



『何をするんだえ。お前さん達は？』

かう言つたお定の聲には、流石は女中頭と言はれるだけの重味があつた。『お上さんが留守だと思つて馬鹿にしちや困るよ。此處には、いつお客様が入つて来るかわからないんだよ。』

しかしかう言つた時には、二人はもうつかみ合ひを始めてゐた。照江のホラ／＼した裾と、白い手と、蒼白い顔と、髪とが一緒になつてからみ合つて、こんがらかつて、電燈の明るい中に見えてゐた。罵る聲と泣聲とが一齊に起つた。

『何をするんだえ？』かう繰返して言ひながら、お定は照江を、お糸はお秀を一生懸命に離さうとした。しかし二人とも容易に手を離さなかつた。照江はお秀の髪を握つて右の手でボカ／＼打つた。お秀は手を延して照江の顔を滅茶苦茶に引掻いた。

『誰か来てお呉れ！』

けた、ましいお定の聲に驚いて、やがて厨の方から板番と煮方とが飛んで入つて來た。

## 十四

お定とお仙との衝突も其頃では際立つて眼に立つやうになつて來てゐた。お客の勘定のことでお定が少ししくじつたことがあるのを好い機會に、お仙は益々女將の信用を得ることに力めた。お秀のことで

もお仙は成たけかばつてやるやうにした。女中達はお仙の方に段々多く附いて行くやうになつてゐた。

細かい言葉の争ひなどが絶えず繰返されてゐた。『お前さんの勝手におしよ。』かう一人が言ふと、『こんな家にこびりついてゐなくつちやならないやうな私ぢやないんだからね。勝手にするとも、』などと一人は言つた。お仙の疝立つた聲が其處でも此處でも聞えた。

その夜の喧嘩の噂は彼方此方で繰返されてゐた。お梅は、『何アに、照ちやんがあの時初めて清どんとの關係を知つたていふ譯ぢやないんだよ。そら、あのお客ね。あのことを彼奴が米屋さんにすつば抜いたんだよ。それで照ちやんがくわつとしたんだよ、女將に……。圖々しいんだよ、あれで中々……。』などとお糸に話した。それでもお秀はそれ以來憎氣たやうな顔をして、黙つてせつせと神妙に働いてゐた。

お糸は度々男の處に電話をかけた。しかし男は電話に出て來ないやうなことが多かつた。お糸は何となく張合ひのないやうな月日を送つてゐた。

『お前さん、何うかしたの？』

かうお梅に訊かれて、

『何故？』

『何故ツて、元氣がないよ、此頃。』

『やう？』



かう言つてお糸はさびしく笑つた。長い手紙をこつそり書いて出してやつた後では、その返事が來ると思つて、お糸は度々上さんの店へと行つて見た。『お上さん、手紙が來なくつて?』始めは店頭からかう言つて入つて行つたが、後にはそれもきまりがわるいやうになつた。男は遂に返事を寄こさなかつた。女中達の衝突などはお糸には何うでも好かつた。お糸はこめかみの處に頭痛膏を張つてつまらなさうにして終日唯働いてゐた。溜息がひとり手に出た。

『何うかしたの?』

ある座敷で、かう土地の歌子といふ藝者はお糸に訊いた。

『頭痛がして仕方がないよ。』

『お糸姐さん、體が弱いのね。』かう續いて言つた歌子のあとについて、其處に坐つてゐた三十八九の肥つたお客は『しかし、頭痛がしてゐる女なんて言ふものは艶なもんだね。何か苦勞があるんだね、お糸さん。話しておきかせよ。君とは兄妹の縁を結んだ筈ぢやないか。』かう言つて莞爾した笑顔をお糸の方に向けた。

それはかなり舊くから來てゐるお客だといふことであつた。お糸が此處に來て始めて番に當つてその座敷に出た時、そのお客は、いくらか訛のあるお糸の言葉をつかまへて、『君は東京ぢやないねえ、何處だか當て、見ようか。』などと言つて、『さうだな、何でもこれから北の方だね、そんなに遠くはないね…』

…。奥羽線の乗替のある停車場の近所だらう?』かう圖星を指されたやうに言はれた時には、お糸はこのお客は自分の素性を知つてゐてわざと知らない風をしてゐるのではないかとさへ疑つた。『さうかえ? あそこの生れかえ? よく當つたらう。ちやんと當るから不思議だ。』かう得意さうに言つてそれからそのお客は常にお糸を最員にして、田舎の話などを何彼とした。お客は富田さんと呼ばれてゐた。

『さうかえ? あの不動さんのある町にもゐたことがあるのかえ。』

こんなことを言つて、『だから、わかるわけだ。僕は始終あつちに行くんだもの。何處かで見たことがあるかも知れないよ。』

『本當ですか?』曰那? 本當に曰那は始終あつちに入らつしやるんですか。』

お糸はなつかしがつて常にその座敷の番に當るのを喜んでゐた。川の縁にある料理屋の二階の眺望の好いことだの、不動さまの縁日の賑やかなことだの、停車場の近所にある熊手を賣る大きな社だの、午過ぎにいつも上つて來る小さな汽船の話だの、さういふ話がいつも二人の間になつかしさうに繰返された。番に當らない時にも、そこに顔を出すと、

『そら、お糸さんが來た。何うしたえ? 丈夫かえ? 此頃久しく顔を見せないから何うしたかと思つてゐたよ。』いつもこんなことを言つて莞爾して纏頭などを呉れた。酔つて低い聲で小唄を歌つたりする人であつた。



相手の藝者が何處かに行つてゐて容易にやつて來ない時などには、お糸は長い間其處に坐つて酒の相手をした。『何うしたんでせうね。本當に、歌子さん。さつき、すぐ來るツて電話があつたんですけども、もう一度かけて見ませうか。』

『好いよ、あいつなんか、君さへるれや——』かう言つて、富田はお糸の手を握つたりなどした。歌子がゐる前では『お糸さんと、兄妹約束をしたよ。なア、お糸さん、今日から、君とは兄妹だぜ。好いか、僕の妹になるんだぜ。さア、兄妹の盃、』などと言つて、猪口をさして、『戯談に言つてゐるんぢやないよ。本當だよ。飲まなくつちやいけないよ。』

お糸は何となくそのお客が好きであつた。年は取つてゐるが、何處かに若々しいやさしい氣分があつて、無邪氣でそしてさつぱりしてゐた。

『歌ちゃん、罰があたるよ。あんな好いお客はありはしない。散々世話になつてゐながら、歌ちゃんにはまだわからないんだね、富田さんの好い處が——』お定がいつかこんなことを言つたのをお糸は時々思ひ出した。

お客は皆なやさしい甘い、好きな女の爲めになら、何んなことでもやるやうなのが多かつた。藝者達の裏と表とに平生よく熟してゐるお糸には、それも別に不思議はないけれど、何うかすると、お客が可哀相になるやうなこともないではなかつた。『あんなに深切にしてゐるのに……』かういふ風に思はれる

こともたまにはあつた。お客は大抵相手の女の來るのが遅いのをも黙つて辛抱して待つてゐた。好い加減腹が立つてゐても、女が顔をそこに出して、『遅くなつて、何うもすみません。……だつてあのお客、意地がわるいんですもの、』などと申譯を言ふと、それが見え透いた申譯であるといふことがちやんとわかつてゐても、お客の顔の相好はすぐ意氣地なく崩れて行つた。女は一言か二言で巧みにお客に金の指環などを賣つて貰つた。

藝者達は一番先に、先づ客の懷中を研究した。女將は『お客の財布の中がすぐわかるやうにならなくつては、一人前のお茶屋の女中衆だと言つて威張つてはゐられないよ。つくりや様子などにもあるけれど、そればかりではないよ。お茶代のおろし方でもわかるよ、』などと言つてよく女中達を叱つたが、それ以上に藝者は客の懷中を讀むことに心を砕いてゐた。枕の下に置いてある客の財布をそつと明けて見るやうな女も尠なくはなかつた。女達は銘々持つてゐるそのお客の毎月の金の消費額などに細かに眼をつけてゐて、そこからその客の素性やら状態やらを知つて行つた。『おつと、こればかりは見られちや大變……。こゝに、この中に、君達に對する僕等の細かい作戦計畫があるんだからな。こればかりは一緒に寝る時でも肌を離されないよ。これが僕等の金城鐵壁だよ。』こんなことを言つて、其處に置いてあつた財布をわざと戯談に懷中の奥深く藏ひ込むお客などもあつた。

富田も甘いやさしいお客の一人であつた。歌子との關係もかなり長く、この土地で歌子が兎に角不



見轉の域を脱して他から姐さんと立てられるやうになつたのも、半分以上富田が力になつてやつてゐた。それであるが、浮氣で情夫を拵へたり、役者に關係して金を取られたり、不見轉の癖がぬけないで、わづかな金で體を他の男に任せたりした。富田は知らなかつたけれど、富田の友達に歌子が關係した時には、『そればかりはおよしよ、歌ちゃん。お前さんだつて、長年あの方にはお世話になつてゐるんぢやないか。』かう女將に意見された。いろ／＼なことを見て知つてゐるお衆には、をり／＼富田の心が氣の毒になつて來ることなどもあつた。『何故あんな女に關係してゐるんだらう。もつと好い藝者がいくらでもあるのに……』お衆に取つては、さういふ熱い男の心が冷めたい女の心に觸れて、無駄に浪費されてゐるのが惜しかつた。『あゝ、いふやさしい人もあるのに……』お衆は來なくなつた自分の男と富田とを引較べて考へた。

一方ではまた藝者達が男の心を幾つも握つて持つてゐるといふことがお衆には羨ましかつた。『他で見ただほどではないよ。随分厭だと思ふお客もあるよ。』それはさうに違ひないが、しかし大勢の心を自由にしてゐることは、その社會の得意でもありまた見得でもあつた。女達は關係した男のことを皆な『家來』と言つてゐた。『家來が大勢ゐて、心丈夫で好いわねえ、』などと言つてゐた。ある藝者は、『今日はもとの家來に逢つちやつた。何處かの色の生白い女と來てたよ。でも、矢張家來だわねえ。他人のやうな氣がしないから不思議ね。』などと言つて平氣で笑つた。

『さう？ お前さんも家來にしたことがあるの？ 随分だねえ。』

こんな言葉は到る處で繰返されてゐた。

かと思ふと、中には、『でも、つく／＼淋しいと思ふこともあるわねえ。いくら遅くまで働いて歸つて行つても、家には猫と婆やしきやるないんだからね。待つてゐて呉れる人があると、働くにも張合があると思ふこともあるわね。』こんなことを言つて少し間を置いて、『それに來れば好いと思ふ時には來なくつて、生憎な時に一緒になつて、泡を食つたり何かするんだものね、思ふまゝにはならないわねえ。』お衆は浪費された男心と女心とを比べては考へずには居られなかつた。

お衆は富田に言つた。『でも、苦勞があつたつて、誰も私なんか本當に相手にしてはくれませんもの。』

『そんなことはない。君の方で逃げてゐても男の方で承知しないから確かなものだ。』

『本當に、私なんか駄目ですよ。』

傍に坐つてゐる歌子は、『本當よ、お衆姐さんは堅いつていふ評判よ。』

『堅い？』

富田はわざと眼を睨るやうにして、『お衆さんが堅くしてゐられるもんか。』

『でも、本當よ。』

歌子がかう言ふと、『本當かえ？ 確かに本當かえ？ なら、僕が相手になつてやらうか。』



『兄妹はやめにしてね?』

『それはさうさ。』

『好いわ、屹度好いわ。ねえ、お糸姐さん。』かう言つて歌子は軽く笑つたが、すぐ調子をかへて、『しかし、本當にお糸姐さんをいつもほめてるのよ。本當に調子が柔かに落附いてゐて好いつて言つてゐらつしやるのよ。だつて、いつだつて、お糸姐さんは?』ツて訊かないことはないんですもの。』

『さう? でも、私なんか駄目ねえ。』

かうは言つたものゝ、お糸は富田が酔つぱらつて、廊下のところでお糸の肩に両手をかけて乳のところをぐつと緊めた時のことなどを思ひ出してゐた。考へて見ると、これまでにもお糸は富田の世話を何遍してやつたかわからなかつた。歌子が來ないので他の女を聘ぶといふのを漸くなだめて寢かしてやつたこともあれば、面白くない顔をして黙つて坐つてゐた二人をなだめてやつたことなどもあつた。『兄妹、兄妹!』かう言つて、酔つた富田はいつも強い力でお糸の手を握つた。

## 十五

お糸は此頃體が急に弱くなつて來たのを感じた。日に由つて、烈しい眩惑がして、いかに我慢をしても起きて働いてゐられないやうな時があれば、わるく逆上せて齒が痛んで仕方がないやうな時であつた。

お糸は涼しい綠葉の蔭に人知れず蹲踞つて、長い間頭を押へてゐたりなどした。

『お前、何うかしたかえ? 顔の色がわるいよ。醫者に見て貰ふ方が好いよ。』かう女將が言つて呉れるので、門を入つたところにある二階の四疊半に上つて、お糸は一日二日靜かに休んで見た。しかし自動車などが威勢よく乗込んで來る氣勢をきくとぢつとしてその薄暗い一間に寢てはゐられなかつた。忙しい女中達の手前に對しても、ゆつくり落付いて寢てなだめられなかつた。

手が書けるので、帳場位には坐つてゐられるだらうと思つて、二三日其處で勤めても見た。しかしそれも矢張氣が詰つて仕方がなかつた。細かい女中達の言葉の上の暗闘なども絶えずお糸の氣に懸つた。神經衰弱だからぢつと落附いてさへるれば治ると醫者は言つた。それを聞いたお糸はふと思つた。少し田舎に行つて休んで來よう。それが好い、それが好い。一週間、十日ほど暇を貰つて田舎でぢつと休んで來よう。かう思つたお糸は、伯母の嫁いてゐる織物の出來る靜かな田舎町を思ひ出した。兄弟の住んでゐる町には決して行かうとは思はないお糸も、その町なら、靜かで、落附いてゐて好いと思つた。伯母夫婦はそこで小體な堅い荒物屋をしてゐた。その二階からは青田がひろく、と見渡されて、蛙の聲が湧くやうに聞えた。お糸はまだ娘でゐた時分に遊びに行つた時のことを思ひ出した。と、小づくりな人の好い伯父の笑顔なども眼に見えるやうな氣がして來た。それに、その町には仲の好かつたお征矢さんといふ幼な友達が嫁いて行つてゐた。



その話を女將にすると、

『うちも知つてる通り、手がないから困るけれど、餘り長くなければ行つて來ても好いよ。……田舎は好からうよ。お醫者にかゝつてぐづぐづしてゐるよりも好いかも知れない。』

で、伯母の許に手紙をやつたが、その返事が來るのを待ちかねて、お糸はすぐ出かける支度をした。意氣な小さな信玄袋に化粧道具とセルの着換を一枚入れて、紙を銀杏返に結つて、小形の翡翠の金簪をさして、黒緇子と縮緬との腹合せの帯をしめた。『意氣な下町の娘さんが出來たね、』などと女將は笑つた。お糸を乗せた車は、やがて細い路を幾度も曲りくねりして、田圃の中の停車場の方へと急いだ。午前の明るい日影の下に割葎が頻りに鳴いてゐた。

伯父も伯母も喜んで姪を迎へた。『まア幾日でも保養して行きなよ。何うせ誰も氣のおけるものはないんだから。』伯母はかう言つて二階の六疊を掃除して、障子を新しく張り替へて呉れた。青田から來る風は、涼しく軒の簾を動かして行つた。

町の師匠の許に踊やら三味線やらを習ひに行つてゐる今年十二になる一人娘の従妹は、中でも殊に東京から來た客をめづらしがつて、容易にその傍から離れようとはしなかつた。『泊つて行くの？ 幾日も泊つて行くの？ うれしい、』と言つて胸を撫でる眞似をした。後には天神のぐらん／＼する稽口三味線を持つて來て、黄い聲を立て、『松の葉のよに、こん濃やかに……』などと唄つて見せたりした。『よく、伯母

さん、こんなに仕込みましたね。田舎の娘のやうちやない。』お糸はかう言つて褒めて、『どれ、それぢや、私が春雨を弾いて見るから踊つて御覽……。好いかえ……。』三味線を取つて見て、『調子が少し變ね。……こんなにして置いちや駄目ですよ。さはりが丸でついてゐないぢやないの？』紙を細く割いて絲の間に挟んで見て、『でも、暫く弾かないから忘れて了つたかも知れない。ちよつとお待ち。』少し弾いて見て、『さア、好いかえ、……ヤア、よい、』などと言つて、首を振つて調子を取つた。と、伯母は忙しい店の手をやめて、階段の處から半分體を出して扇子を翻へして踊る娘の姿をさも得意さうに嬉しさうにして見てゐた。

『上手ねえ。體のこなしが柔かて好いよ。お師匠さんは？ もうお婆さん？ さう、娘が藝妓屋をしてるの？』

お糸はこんなことを言ひながら、娘を相手に、都々逸や流行唄などを弾いた。やがて三味線を傍に置いて、『忙しい中で、それでもよく仕込んだのね。田舎でこれまでにするのは大變ですよ。』かう言つたお糸は、伯母が昔里に歸つて來てはよく三味線を弾いたり何かしたのを思ひ出して、『伯母さんも今でも弾いたり何かすることがあつて？』

『駄目だよ。三味線だけはあるけれどもね。弾いたことなんかはありやしないよ。もう駄目だよ。』お糸は別な世界にでも來たやうな氣がせずには居られなかつた。忙しいお茶屋の世界に比べて何とい



ふ静かな落附いた生活だらうとお糸は思った。店に田舎の百姓が来て、のんきに煙草をふかしてゐるかと思ふと、今度は蘭買の男が立寄つて茶を飲んで、長い間話し込んで行つた。『伯母さん、ランプのホヤをお呉れ、』などと言つて田舎の娘達は入つて来た。

お糸は来た晩娘に伴れられて、町の通りを歩いた。庇の長く出た家並が續いて、呉服屋の店には若い番頭が坐つてゐた。角の旅籠屋には自轉車が置いてあつて、混雑した厨の中が薄暗いランプの光に照されて見えてゐた。『此處等は皆なランプね。電氣が來ないのね。』こんなことを言ひながらお糸は歩いた。静かな穏かな夜であつた。お糸は郵便局や銀行のあるあたりまで行つて其處から引きかへして来た。

『此處だよ、私のお師匠さんの家は。』かう娘が指して教へた近所には、軒燈の明るくついた家が二三軒並んでゐて、おつくりをした顔を夕闇の中に際立たせて、此方を長く見送つてゐる女などがゐた。『きいちゃん、何處へ行くの？』かう娘の顔をのぞき込んで聲をかけて摩れちがつて行つた若い女を、『あれはお師匠さんの許にゐる藝者だよ、』などと娘は言つた。お糸は細い明るい小路をぶらぶら歩き乍ら家の方へと歸つて来た。

小意氣な扮装をしたお糸の姿は、絶えず町の人達の眼を惹いた。『荒物屋に東京から別嬪が來たぜ、』などと誰も彼も評判した。娘は到るところで、『誰だえ？ 親類の人かえ？』などと訊かれた。晝間退屈して通りを歩くと、店の人達はわざと手を留めてめづらしさうにして長くお糸の姿を見送つた。

昔の學校友達に逢つた時のさまも忘れられなかつた。お糸が訪ねて行くと、奥で働いてゐた上さんは、『まア、お糸さん、』と言つて、心持顔を赧くして、きまりがわるさうな物の言ひ方をした。同い年ではあつたが、子供がもう二人もあるので、姿は寝れて、四つも五つもお糸よりはふけて見えた。此處に嫁いで來た時きり、お糸は五六年もこの友達に逢はなかつた。それはお糸がまだ東京の伯父の家に行かない前で、立派な支度の出來たことや、嫁いて行く先がかなりの財産家であるといふことなどがお糸を此上なく羨しがらせた。お糸は友達の總領の四つになる女の頭の頭を撫でながら、その時分のことなどを思ひ出してゐた。『こんな大きな可愛い子があつて羨しい、』などとお糸は言つた。

然し眞黒になつて働いてゐる友達の生活は決して羨ましいとは思はなかつた。東京にも一度行つたきり、もういつ行かれるか知れないやうな生活、筒袖か何か着てせつせと働いてゐる色の黒い亭主と小むづかしさうな眼の悪い姑とに侍いて、子供に追はれて纏繞してゐる生活と、不安はあつても派手な賑やかな自由な生活と比べて、お糸は自分の生活を寧ろ生効のある生活だと思つた。二階で逢つた男に對する傷痕は日増に治つて、今では心靜かに落附いて、やがて再び開かれて來る新しい生活をお糸は胸に描いてゐた。お糸に取つては何も彼もまだ自由であつた。何ういふ好運が其前に待つてゐるか知れなかつた。お糸は色の白い顔ををりくく鏡に映して見てひとり微笑した。

それは丁度蘭買の大勢町に集つて來る頃で、町の角には、『蘭、買升、大勉強で買升』などといふ大き



なピラがさがつてゐた。今年は、繭の出来が好いので、活気が何となく四邊に漲つて、夜は三味線の音が、蛙の聲に雑はつて何處からともなく聞えて來たりした。お糸は青田から朝日の晴やかにさし込んで來る二階の間でいつも早くから眼をさました。

少し離れた家の畑に娘と一緒に、蠶豆を取つて來たりした。露の太いのを茹でて白あへにして伯母が食はせて呉れた時には『旨しいのね。東京ではこんな柔かなのは食べたくつても食べられないよ。お肴なんかよりどんなに好いか知れやしない。』お糸はこんなことを言つて、好んで野菜物に箸をつけた。幼い時分に食つたものがお糸には何よりもめづらしいやうに見えた。『また、今度、玉蜀黍が出来る時分に來て御馳走になりますよ。裏の畑から毎日、お午すぎになると、ギイ／＼音をさせて折つて來たものねえ……。あの時分のこと戀しい。』

茄子、胡瓜、南瓜、里芋などが畑には澤山栽ゑられてあつた。畑の縁に咲いてゐる背の高い赤い白い花を見て、『さう？　これが芥子なの？　こんな綺麗な花が咲くの？　芥子には？……これが實ね。成ほど芥子坊主ツて言ふがよく似てるのね。』かう言つて、めづらしさうにその實に觸つて見たりした。お糸は裏から畑の方へよく出かけて行つた。

雨が鬱陶しく降る日もあつた。裏の物持の庭には縁が蔽ひかぶさるやうに繁つて、町の傍を流れてゐる溝川には、蘆や藪や澤瀉などが一面に浮いて漂つてゐた。田植笠の並んでゐるのがお糸のゐる二階の

窓から一目に見渡された。

夜は名物の落雁に茶など淹れて伯母は莞爾して二階に上つて來た。しんみりした調子で伯母は話した。伯母はお糸の勤先のことなどを詳しく聞かうともしなかつたが、しかしお糸の身の固まらないのが、絶えず心配の種になるやうに見えてゐた。『姉さへ生きてゐればなア。お前だつて、こんなに苦勞なんかしないでも好いんだに……。』などと静かなやさしい聲で伯母は言つた。

『でもなア、行つても詰らなかんべいがな、折角來たんだから、兄の許へも、ちよつくら歸りに顔を出して行けやな……。なアに、構ふもんかな。こつちでちつとも身を退いてゐることはねえだよ。』こんな話をする傍で、娘は近い中にある踊りのお浚ひの衣裳の話などをした。『着物々々ツてこの子は着物のことばかり言つてゐる。』かう伯母はたしなめるやうに言つた。娘は母親の肩に凭りかゝるやうにしてゐた。

蛙の聲は湧くやうに聞えてゐた。雨はまたしめやかに降つて通つた。闇の中を一とこ割つた二階のランプの光線は、半分吊つた蚊帳を青くくつきりと見せてゐた。もうかなり多く蚊が出てゐた。『田舎は唯蚊が多いんで困るな……。菊、お前、蚊いぶしを持つて來なよ。』

『螢！　螢！』

不意に娘が言ふので其方を見ると、螢が一つ靜かに雨の闇の中を明滅して飛んで行つてゐた。



歸りがけにちよつと寄つた兄の家を辭して、お糸が停車場へとやつて來たのは、もうかれこれ午後四時を過ぎてゐた。雨はまだ車の幌の上に靜かに音を立て、降つてゐた。

長々しい兄の意見に好い加減氣を腐らせたお糸は、これから歸つて行く生活の忙しさと慌しさを考へて、不安な不愉快な思ひにすつかり胸を閉されてゐた。折角治りかけた病氣が復た起つて來さうにすら思はれた。

停車場に着いて、幌の中から信玄袋を持つて下りたお糸は、一番先にそこにある賣店の中を覗くやうにして見た。それは停車場前の旅館で出してゐる店で、以前はお糸の友達がよく其處で店番をしてゐた。この前下りた時には見違へるやうに大きくなつたその妹が其處に出てゐて、『お糸さん』かうなつかしうに聲をかけた。お糸に取つては、この停車場は追憶の多い停車場であつた。東京へ初めて出て行く時、東京から逃げて歸つて夜遅く着いた時、兵隊さんの跡を追つて出かけて行つた時、過ぎ去つた月日は今でも細かに濃かに織り込まれて、その折々の自分の姿がはつきり其處に動いてゐるやうにすら思はれた。硝子戸越しに見えてゐる事務室では、矢張若い男が忙しうに電信を取扱つてゐるし、ブラットホームには、見知越しの驛長が煙草をふかしながら靜かに彼方此方を歩いてゐた。何處か遠くの海水浴場の大

きな寫眞の額も矢張同じやうに其處に掲げられてあつた。

お糸は覗いては見たが、賣店には妹の代りに知らない下女らしい肥つた女が出てゐた。で、お糸は信玄袋を其處に置いて、出札口の前に行つて、上りの時間表などを見てゐたが、まだ二三十分間があるので安心して、もとの處に戻つて來て、傍に立つたまゝ、信玄袋の中から吸ひ残りの敷島の袋を出して、マツチを摩つて火をつけた。

待合室の上の處には、石版刷の綺麗な避暑地案内のピラが下つてゐた。それをお糸は巻煙草をふかし乍ら何氣なく見てゐたが續いて賣店の玩具の虎だの狗だのに移つて行つた眼は、二等待合室の中に行つてピタリと留つた。其處には卓に身を凭せかけて、熱心に新聞を見てゐるインバネスを着た中年の男がゐた。暫くちつと眼を放さずに見てゐたお糸は、男がちよつと此方に横顔を向けると、われを忘れたやうに立つて其方へと行つた。

『富田さん。』

思ひもかけない處で思ひもかけず自分の名を呼ばれたので、男ははつとした様子で、此方を見たが、

『お、お糸さん。』

かう言つて、立上つた。富田の顔にも心の動搖が明かに讀まれた。

『何うして？ 此處へ？』



『似てる、似てる。さつきから思つてゐたのよ、私……』かう言つたお衆は何となく體がぼてるやうな氣がした。富田の眼には、少し赧くなつた色白のお衆の顔と形の好い銀杏返と派手な夏のコートとが先づ映つた。

『何うしたの、一體？』

富田が繰返して訊くと、

『伯母の家に來てたんですの……』かうお衆は嬉しさうに言つて、『貴方は？』

『僕は昨日ちよつと用があつて、其處まで行つて、今歸るところだよ。大宮の方を通つて行かうと思つて、さつき、汽車を下りて此處で待つてゐるんだよ。』

『さうですか？』

男の顔を凝と見て、

『よく入らつしやるの、此方に……』

『あそこの町に會社があるだらう、あそこに要があるんだよ。』

『さう？』かう言つたお衆はあたりに氣を兼ねるやうに聲を低くして、『でも、此處でお目にかゝらうとは思はなかつた。私、さつきから似てる、似てると思つて見てたんですよ。』

『さうかえ、僕はちつとも知らなかつた。此處で、君に逢はうとは僕の方でも思ひもかけなかつたか

らね。』間を置いて、『それで、これから行くのかえ？』

『いゝえ、歸るところ。』

『何處にゐるの？ 一體、伯母さんは？ 此處にゐるのかえ？』

『いゝえ、この向うの町ですよ。今日ちよつと此處で下りて兄の家に寄つたんですの。』

『何日から來てたんだえ？』

『もう、今日で九日目になりますよ。體が弱いもんだから、少し保養しようと思つて來たんですけど、あつちも手がありませんからね。』

『體ッて、君が？』

『えゝ。』

お衆は笑つて見せた。かうした對話をする間、お衆は富田の腰をかけてゐる大きな長い椅子の傍に立つてその體を寄せるやうにしてゐた。富田はお衆の顔を見上げるやうにして話した。前に腰をかけてゐた白髪の老紳士は、初めはめづらしさうに此方を見てゐたが、此時すつと立つて三等待合室の方へ出て行つた。

『此頃入らしつて？』

『いや、暫く行かない。』



『何うですか。莞爾笑つて見せて、『今日はもうすぐお歸り?』』

富田は黙頭て見せたが、『君は?』

『私は歸るの。』

『今日歸ることになつてゐるのかえ?』

『えゝ。』

『でも、今日歸らなかつたつて好いんだらう?』ぢつと女の顔を見て、『え? 好いんだらう?』

かう言つた富田の顔には、中年の男でなければ容易に出来ないやうな大膽な表情が歴々と見えてゐた。

お糸は黙つたまゝ、立つてゐた體を卓に凭せて、其處に置いてある雑誌の綴込の上に眼を落した。女の熱した横顔を男は見るやうになつてゐた。

『でもねえ……』

暫くして微かに言つた。忽ち相觸れた二人の胸は不思議にも同じやうにある物に向つて波打ちつゝあゝるのを感じた。

『好いんだらう?』富田は靜かに繰返した。

『まだ切符は買はないんだらう。』富田はかう言つて急いで出札口の方へと行つた。お糸は黙つて立つてゐた。氣が附くと、金離れが好くつて、深切で、氣前がさつぱりしてゐて、何處か男らしい處のある

富田の態度が其時お糸の頭の中に描かれてゐた。誰れも周圍に知つてゐるものゝないといふことも、お糸の好奇心を十分に誘つてゐた。

『でもね……私、今日歸らなくつちや。』

富田が切符を買つて入つて來るのを見ると、お糸はもう一度かう言つて男の顔を見た。

『だつて、もう、買つて來ちやつた。……好いぢやないか。大丈夫だよ。何んな申譯でもしてやるよ。』

かう笑ひながら富田は言つて、青切符を一枚お糸に渡した。

『貴方は好いの? 歸らなくつても……』

『僕は好いとも……もう用がすんだから。』

お糸は切符の行先を見た。そこには東京とは丸で反對の方向になつてゐる驛の名が記されてあつた。お糸はよく其處を知つてゐた。曾て富田と話し合つたことなどもあつた。停車場から田圃を越して向うに見える田舎町、その町の裏には高い堤防があつて、それを上ると、大きな川が見える。そこに眺望の好い旅館がある。

『あそこに行くの?』お糸は思はず言つた。

『好いだらう?』

『……』



『何かいけないことでもあるかえ。』

『いゝえ……』

かう言つたお糸は其處に二三の知つた顔のあるのを思ひ出してゐた。しかし、もしさういふ顔に逢つたにしても、非常に困るといふやうなものでもなかつた。お糸の胸は唯躍つた。

其方に行く汽車は一番先にやつて來た。幸ひに其處には知つてゐる顔がなかつた。驛長が見はしなかつたかと心配したお糸は、人氣の乏しい客室の中に自分を發見して、ほつと微かな溜息を吐いた。

汽車が動き出してから、富田はいろ／＼な話を始めた。餘所から見ても絶えず懇意な親しみを持つてゐた男も、かうして、正面に自分が立つて見ると、何となく氣が詰るやうな氣がした。お糸はかうした不思議な機會が來ようとは夢にも知らなかつた。

『雨がよく降るねえ。』

『本當ねえ。』

『もう、今日で三日目だね。』

『さうね。』

初めは向う側にゐた富田は、やがてお糸の傍に來て並んで腰を掛けた。お糸の心と體とは段々解けて男の方に偏つて行つてゐた。小さな沼の縁のやうなところを汽車が通る時には、お糸は苔の中に繫いてあ

る舟を男に指して見せた。

## 十七

停車場から乗つた車はやがて二人を川の縁の旅館へと連れて行つた。其處では、門を入つたところの一間で男が二三人類に玉を突いてゐたが、奥には幸ひに客がなく、川に臨んだ室の前の庭に、芍薬が唯靜かに見事に咲いてゐた。

『好いな、何時見ても……』

富田は室に上る前に、長い庇の出た軒下を通つて、鐵柵の前へ行つてこんなことを言ひながら、長い間前に展けられた川を見てゐた。降雨期の水は溶々と岸に溢れるやうに漲つて、雨に濡れた影の暗い帆は、重さうに緩やかに動いて行つてゐた。

『大きな帆ね。』

お糸は一度坐つた席から、かう言つて立つて來た。

『前にも來たことはあるんだらう？』

『いゝえ、聞いてはるますけども、來たのは初めてよ。好いとこね……』かう言つて障子に片手をかけて、お糸は恍惚と眺めてゐたが『おい、來て御覽、船が澤山かゝつてゐるから。』かう富田に言はれて



其處にある庭下駄を突かけて、男の立つてゐるところへと行つて見た。成ほど其處にはトロコ用の軌道などを載せた大きな船が二艘も三艘もかゝつてゐて、體を半分出した船頭の婢は、繩つるべで頻りに河の水を汲み上げてゐた。

『上流へ行くんでせうか？』

『風の都合で、かうして休んでゐるんだね……。風さへよくなれば、夜中でも何でも發つて上つて行くんだよ。』

『船頭なんて、面白い稼業ですね。皆な船が家ね。あの狭い中で、子供を育てたり何かしてるのね。』

『船頭なんて舟の中で子供ばかり拵へてゐるやうなもんだよ。』富田はこんなことを言つて、笑ひながら座敷へ上がつて行つたが、丁度其處に煙草盆を運んで來た婢に、

『二階は明いてゐないの？』

『明いてをります。』

『二階にしようか。』

かうお衆の方に向いて相談するやうに言ふと、靜かに此方に歩いて來たお衆は、

『此處で結構ぢやありませんか。』

『さうだね。二階は好いんだけど……、却つて此處の方が好いかも知れないな……。客があると、

二階は煩さいから。』かう言つて富田は又婢の方を向いて『隣の室は客があつてもつかはないだらうね？』

『えゝえゝ、此頃は閑ですから。』

かう言つて婢は笑ひながら向うに出て行つた。二人は向ひ合つて坐つて、互に眼で笑つて見せた。『丁度好かつた。此處は何うかすると、込んで、ごたくしてゐることがあるんだよ。これでも名代の旅館だからね。東京からよく客が來るんだからね。』富田は茶を啜りながら言つた。お衆は黙つて鬢のほつれをかき上げてゐた。

婢はやがて膳を運んで來た。鯉のあらひに鯉こくに胡瓜もみ。『此處は食物が旨いから好い。』こんなことを言ひながら心持好さうに富田は盃を手にした。お衆はお衆で、不思議な邂逅を猶ほ頭の中で繰返しながら、

『私、餘り飲んだことはないのよ。』

『少し、酔ふ方が好いよ。』

『でも、あとで苦しくなるもの。』

富田はお衆の體の段々此方へ寄つて來るのを感じずには居られなかつた。二三杯の酒にほんのりと紅くなつた顔は、灯のまだ來ない夕暮の薄明るい空氣の中にほのかに美しく見えてゐた。『もうこんなに酔つちやつて、』など、言つてお衆は兩方の頬に手を當てた。



長い身の上話をしてから、お衆は言つた。『だから、私、これで、随分、苦勞してゐるんですよ。あそこなんかも、それは随分忙しいんですよ。』

婢がランプを運んで来る時分には富田はもうかなり酔つてゐた。鰻の蒲焼が来たのを機會に、『もう飯にしようかね、』と言ふと、『ちや、御馳走になるわ。私、酔つちやつた!』かう言つてお衆はまた頬に手を當てた。

突如、富田はお衆の手を握りしめた。お衆も握り返した。

『此處の鰻は旨いんだよ。』

『さうですツてね。』

お衆はわざと落附いた風で、茶碗を手に取りかけて、『あなたはまだ?』

『僕も食ふよ。』

『まだ、飲みたさうね?』

徳利を倒にして見た富田は、『だつて、もうありやしない。』

『取りませうか?』

『もう澤山。』手を振つて見せて、『本當に、今日は奇遇だツたね。』富田はまた笑つて見せた。

その代り捨てる時かないからといふ顔をお衆はして見せたが、しかし何も言はずに、黙つて、自分

の茶碗に飯を盛り始めた。

『僕にもおくれよ。』

『召上つて?』

男の茶碗を取つて、靜かにそれに飯を盛つて、『お香の物は?』

『おくんなさい。』

飯を食ひながら、途中で二人は顔を見合せて面白さうに笑つた。婢はやがて茶を煎れて持つて來た。

『姐さん、蚊がゐるね。蚊帳をつらなくつては駄目だね。』

『え、え、をりますとも……。蚊は大變、これから蚊で一苦勞……。』こんなことを言つて、越後から

來たといふ婢は大きく笑つた。婢は越後の藝者の藝のある話などを長々と話した。

『雨はまだ降つてるかえ?』

『今はやんでをります。』

『ちや、ちよつと土手の上を歩いて來ない。』かかう富田がお衆に言ふと、『さうね。雨が降つてゐなければ行つても好いわ。さうすると、酔がさめるから。』

『では、お床は此方に延べて置きますから。』二人の出て行く後からかういふ婢の聲がした。

『眞暗ねえ。』



土手にあがりかけて、ちよつとお衆が躊躇すると、男は手を取つて抱へるやうにして呉れた。酔つた男の酒氣は、お衆の顔を軽く掠めて行つた。

大きな倉庫の並んで立つてゐる向うに、一ところ料理屋の灯が明るく闇を照してゐるばかりで、土手下に展げられた灯の少い田舎町は、早くも眠りに落ちたやうにしんとしてゐた。二人の笑聲は闇の中にをりくゝ聞えた。

少し行つたところで、地から湧きでもしたやうに、大きな黒い背の高い姿が二人のすぐ傍を摩れ違つて通つて行つた。

『今のは何アに、人間？ 私はびつくりした。馬かと思つた。』

『馬鹿な……』

暫く行つてから二人はこんなことを言つて笑つた。『だつて、大きいんですもの、見上げるやうだつたわ。』

『本當に暗いな。』

纏れたり離れたりする二人の影はすつかり闇の中に包まれてゐた。男は唯女の白い顔と白い手とを見た。お衆は男に縋るやうにして歩いた。

倉庫が盡きると、其處から川がひろく見渡されてゐた。晝間だと、前に大きな鐵橋が一目に見え

て、大勢人を乗せた渡船が往つたり來たりしてゐるのだが、今は唯闇に包まれて、僅かに川筋が微白く認められるばかりであつた。對岸の灯が二條三條長く水に落ちて揺いてゐた。

『川だわねえ。』

『晝間見ると好い處なんだが……。』

こんなことを言つて、二人はやゝ暫し其處に立つてゐた。岸に近くかゝつてゐる船には、苦の間から灯が微かに見えて、楽しさうな團欒の笑聲が洩れて聞えて居た。

『さびしいから、もう、歸りませうよ。』かう言つた女は男の手を堅く握りしめた。富田は漲るやうなあつい女の情を闇に繰返しながら、靜かに其處から引返して來た。

『歌ちゃん、何うしてゐるでせうね。』

半ば笑つたやうなくすぐつたいやうな聲でお衆は言ふと、男も笑つて、『さア、何うしてゐるかな——』二人が土手を下りて門から入つて行くと、『お歸んなさい。』かう言つて婢は賑かに帳場から迎へた。しかし奥まで二人を送つて行かうとはしなかつた。その室の雨戸はもうちやんと締つてゐて、一枚明いた副室の障子の外には、笠のない竹ボヤのランプが一つしよんぼりと置いてあつた。お衆は先に入つて行つた富田に『おひやが來てゝ？』かう訊いて置いてから、靜かに障子をしめて中へ入つて行つた。



お糸が眼覺めた時には、朝日が晴れやかに室にさし込んで、涼しい風が軽く蚊帳の裾を吹き動かしてゐた。もうすこし前、富田が立つて、雨戸を一枚明けて、『好い景色だ、おい起きないか、』とか何とか言ふのを、お糸は夢現のやうに聞いてゐたが、今見ると、二度寝をした富田は、腕を疊の上に投げ出して、顔を此方に向けて、心持好ささうにすやく寝てゐた。と、お糸の頭には昨夜の光景がすぐ歴々と蘇つて繰返されて來た。考へて見ると、随分いろ／＼なことを話した。身の上話もすれば、お茶屋の内幕の話もした。つい此間まで關係してゐた男のことは流石に打明けなかつたけれど、前に持った亭主のことも兵隊さんのことも何も彼も皆んな話した。歌子の長い間情夫にしてゐた役者の話などもした。暴風雨のやうに胸が騒いだり心が躍つたりした。ぼんやりした薄暗い夜の空氣の中に俄かに濃かに織り込まれた心と體との動搖を繰返して見ると、お糸にはそれが何だか夢ではなかつたかとさへ思はれた。それほど複雑した幻影が今だにお糸の頭を離れずにゐた。

お糸は初めて本當に男を知つたやうに思つた。兵隊さんにしろ、二階に來た男にしろ、富田に比べるとまだ本當に熟さない果物のやうなものであつた。お糸は軽い溜息をついて、亂れた髪を手でかき上げて、枕元に置いてある巻煙草にマッチを摩つた。軽い青い煙が靜にお糸の白い疲れた顔を掠めて行つた。

『そんなことは譯はないことだ。月に三四十兩もあれや澤山だ。……それも面白いね。さうするんなら、東京よりも却つて田舎の方が好いね。何うせ、月に四五度位は此方に出て來るんだから。』かう男が言つたのをお糸は思出した。其時お糸は、『でも、私、一人で田舎で待つてゐるのに、貴方は來て下さらなかつたりすると詰らないのね、』など言つた。

影と影とが急に深く纏れ合つて、いくら解いても解けなくなつたやうな複雑した氣分が其處に醸されてゐたのをお糸は見た。お糸は想像に想像を重ねた。『何を言つてゐるのかわかりやしない。旨いことを言つてゐるのかも知れない。』かう思つても見た。しかし歌子との關係を見て知つてゐるお糸には、さういふ風に簡單に富田を考へて了ふことは出来なかつた。

『譯がないことだよ……。彼奴？ 彼奴なんか何うでも好いんだ。』かう男はお糸の手を取りながら言つた……。

ふつと富田は眼をあいた。

『もうお起きなさい。』

『何だ、起きてるのかえ？』かう言つてちよつと笑つて見せたが、さし込んで來る朝日の方を眩しうに見て、『いやに明るいな、……もう何時だえ？ 六時半ぢやないか。もう少し寝よう。』かう言つて富田は立上つて、靜かにさつき明けた雨戸を繰寄せた。室は急に薄暗くなつて行つた。お糸は此方を見てに



ツと笑つて見せた。朝川を漕いで行く櫓の音が静かに石垣の下に聞えた。

暫くしてから、富田はまた立上つて、川に面した方の雨戸をすつかり明け放した。『昨日か、つてゐた船は大抵上流に發つて行つて了つたよ。一艘か二艘しかゐないよ、もう。』かう言つて再び蚊帳の中に戻つて来て、蒲團の上に腹這ひになつて、煙草を旨さうにスパク／＼ふかした。

『さう言へば、昨夜夜中に、汽船が通つて行つたのね。』

『さう、さう……知つてゐる知つて居る。富田は思ひ出すやうにして、『あれは何時頃だつたらう？』

『二時か三時頃ね。』

『もつと前ぢやないかな……そんなもんかな。此處の家からも、あの汽船に乗つて行つたものがあつたと見えて、何だか向うの方でごた／＼してたね。』

『もう間に合はないとか何とか言つて、ぶつ／＼お客が怒つて立つて行つたやうだつたわ。あの時分起されるんでは、此處等の女中も大變ね。』

ボウといふ汽笛の音が入つて初めて眼をさましたお衆は、その時夢現に汽船の水を祓る音の段々近くなつて来るのを聞いてゐた。石垣のすぐ下のところあたりを通る時には、汽船は再び長い／＼汽笛を鳴らした。『藤岡の方に行くんだ。』こんなことを思つたお衆は、田圃の中にある天神さまや茅葺交りの田舎町などを思ひ出してゐた。十二三の時、お衆は其處に一年ほど行つてゐた。やがてけた／＼ましく雨

戸を明ける音、客のぶつ／＼嘯鳴る聲、送り出した後で女中の何か言つてゐる聲などをお衆はおぼろげに聞いてゐたが、颯々と水を截つて汽船の遠くなつて行つた時分には、今、立つて行つたお客は間に合つたらうかなど、思ひながら、お衆はいつか恍惚と眠に落ちて行つてゐた……。

『藤岡あたりだと好いわね。』

お衆はふと思ひ出したやうに言ふと、

『さうだな、あそこあたりなら、却つて人の眼に立たなくつて好いかも知れない。しかし、不便は不便だな。』

『でも、會社まで一里半位しかないでせう？』

『それは、そんなもんだ……』

かう言つて富田は考へてゐたが、やがて、

『でも、東京に歸つて、そんな様子をちよつとも見せては駄目だよ。知らん顔をしてるんだよ。』

『それは大丈夫ですとも……。けども、本當なの？ 一體？ 好加減ぢやないの？』

『それは確かだよ。』

『歌ちゃんは何うするの？』

『あんなものはやめて了ふよ。』



『それはうそ……それは確かにうそね。』笑つて見せて、『そんなに譯なくやめられるものですか。あの人はそれは上手だッていふ評判ですもの。』富田の黙つてゐるのを見て、『折角、お世話になつても、私一人ぼつちで田舎で待たされてゐるのは厭よ。……矢張、東京にゐて、何處かで逢つてゐる方が好いかも知れない。兎に角、昨夜言つた私の二階に来て下さい？ ね？』

『それは行くけどもね。しかし、本當に内所にして置かなくつては駄目だよ。僕があそこに行つたつて、變な顔色なんかしちやいけないよ。』

『それは大丈夫……。けども、本當に何うして下さるの？ 田舎より東京の方が好くはなくつて？ 東京で何處か好い處がないかしら？』

『それはいくらもあるだらうがね。矢張田舎の方が好いちやないか。僕は何うせ毎月四五度は此方に來るんだから……。あの汽車の通る處なら、もつと近い處でも好いんだが。』

『でも、滿更知らない人ばかりの處は厭だし、さうかと言つて、餘り私のことを知つてゐる人のゐる處ではいけないし、ちよつとこれでむづかしいのねえ。』

『少し考へて見るんだねえ。』

『でも、本當に、あそこに長くつとめてゐる氣はないわ、私……。忙しいばかりなら好いけど……。それにお金にもなるけれど、いやな稼業ですものね。』

『矢張、氣になるかね。』

富田はかう言つて笑ひかけると、

『氣になるつて言ふこともないけど……。厭ですねえ。』

お衆は女中達の内所の話や藝者の内幕などをつゞいて富田に話して聞かせた。『そんなもんだらうな。』

富田は唯笑つてゐた。暫くしてから、

『今日は何うするえ？』

『歸ります。』

『もう少し遊んで行かないか。』

『でもねえ。』

『家の方は心配はなし……。向うの方だつて手紙か何かちよつと出してことわつて置けば一日二日は好いんだらう？』

『それは構はないけども。』

『あきたかえ？』

『そんなことはないけど……。』

『今日一日ゆつくり遊んで、明日歸らうぢやないか。天氣は好いし、此まゝ歸るのはつまらない。此



方の線は知つてゐる人に逢ふといけないから、汽車で小山まで行つて、足利から呑龍さまの方まで行つて見ないか。』

『でも、大變ぢやない？ 貴方？』

『なアに、僕は好いよ。』富田はかう言つて、『さア、それぢや起きやう……、起きて早く飯を食つて出かける支度をしようぢやないか。』

『さうね。』

お糸は起きて、傍の雨戸をもう一枚明けて、蚊帳などを外した。『好い天氣ね。』かう言つてキラ／＼川に映る日影を眩しさうに見てゐたが、衣裳を着替へるとすぐ、男のあとについてそのまゝ外に出かけて行つた。川には多い帆の影に交つて、けたゝましい音をあたりに響かせて、一杯人を載せた大きな傳馬を引船にして一艘のモーターボートが、早く早く川を横ぎつて行つてゐた。其處にゐた女中は『あれは河川工事の人達ですよ、』など、二人に話してきかせた。お糸はふと昨日停車場で逢つて忽ち五年も六年も一緒にゐた仲のやうな気分になつた自分を不思議にしながら、靜かに川縁を富田と並んで歩いて行つた。川の水は苔や萱や藻の新芽にたぶ／＼と漲つてゐた。

## 十九

停車場で待つ間に、二人はその近くにある靜御前の墓に行つて見た。お糸は數年前に兄と一緒に來たことなどを思ひ出しながら、ある家の庭のやうになつてゐる垣の扉を開けて先に立つて入つて行つた。樹のこんもりと繁つた中に紫陽花が鮮かな色を見せて、その奥に小さな墓石がしよんほり立つてゐた。『本當に、此處まで來て死んだんですつてね。その時の衣裳などが川向うの寺に今でも残つてゐるんですつてね、』など、お糸は話した。梅雨晴の日影に美しく照つたお糸の蝙蝠傘は、根殻の新芽の垣の傍を通つて行つた。

大きな鐵橋の上を汽車の通る時には、二人は車窓から首を出して、昨夜泊つた旅館の方を指し合つた。溶々と漲り渡つた川の土手の上には、その二階が高くはつきりと見えてゐて、丁度其時大きな帆がそのすぐ傍を掠めるやうにして通つて行つてゐた。帆が幾つとなく重なり合つて上流へ上流へとほつて來てゐた。

乗換をする停車場では、さう長い時間を待たずに汽車は出た。お糸は自分の生活がすっかり一夜の中に變つてゝも行つたやうに、をり／＼男の顔をめづらしさうに不思議さうに見た。あの忙しいお茶屋や暢氣な田舎の伯父伯母や、従妹や、さういふ事は皆遠くの方へ行つて了つたやうにすら考へられた。金



などに不自由しないやうな富田が何よりもお衆には頼もしかつた。『かうやつて倦きるまで遊んで歩くと面白いね。……金のなくなるまで、何處とも處をきめずに、行きあたりばつたりにね、』など、富田は言つた。

汽車の周囲には、やがて山だの雪だのが見え出して來た。山の裾にある小さな停車場では、大きな包みを持つた田舎娘が一人ほつねんとさびしさうに立つてゐた。旅などに出たことのないお衆には、眼に見えるものが何も彼もめづらしかつた。お衆はところ／＼に散らばつてゐる村や、踏切の傍にある竹藪の中の水車などをめづらしさうに男に指さして見せた。午近く、大きな町で汽車を下りた二人は、公園にある涼しい料理屋の二階で午飯を食つた。そこには赤い襷をかけた女中達が大勢ゐて、お衆の顔をじろじろと穴のあくほど見た。お衆は此の町に奉公に來てゐるといふ昔の友達などを思ひ出して、その茶屋のある場所を聞いて見たりした。膳に上つた鮎を、富田は『何處の鮎だえ？ さうかえ？ 遠くから來るんだな、』など、言つて、旨さうにして食つた。

そこからまた汽車に乗つて、暫くして下りた町には、大きな名高い流行佛の本堂があつた。本堂の前には形の面白い松が這ふやうに靡いてゐて、澤山の鳩が長い舗石の上で頼りに豆を拾つてゐた。大きな花崗石の手水鉢からは、綺麗な水が涼しさうに流れ落ちてゐた。

熱心にお百度を踏んでゐる人達を暫し立つて見てゐたお衆は、俄かに、『おみくじがあるでせうね……』

さうね、あそこね、ちよつと待つて頂戴、私、引いて來るから。』かう言つて、お衆は向うの方へ驅け出して行つた。

其處には品の好い爺さんが眼鏡をかけて坐つて居た。おみくじを出す間、お衆は二人の新しい關係を念頭に置いてゐたが、やがて物々しい爺さんの取出したのを見ると、三十七吉としてあつた。

喜んで戻つて來て、

『吉よ。』

『僕も引いて見よう。』

かう言つて面白さうに富田も其方へ駈けて行つたが、やがて莞爾して其處から出て來た。

『貴方のは？』

『大吉だよ、七十八大吉だよ。』

『大吉は却つてわるいのよ。』

『そんなことがあるもんか。』

互に引いたおみくじを見ながら二人は靜かに歩いた。『どれ、お見せ。』やがてかう言つて富田はお衆の手を取つて見たが、『うん、これは好い。池頭月欲明、この明かならんと欲すといふ文句が好い。だんだん運がひらけて行くといふ意味だね。頼る人にあつたら、十分に頼らなければいけない。頼りさへす



れば運がひらけるつて卦だよ。』

『さう！』お糸はちよつと思當つたといふやうな顔をして、『さういへば、私、随分頼りにはする方な  
んですけども……いつでもちきいやになるのね。それがいけないのね。頼ればいゝのね。』意味ありさう  
に富田の顔を見て、『貴方のは？』

『僕のは大變だ……福祿自隆昌、どんなことでも出来るつて言ふ卦だよ。運星が非常に好いだね。』面  
白さうに笑つて、『殊に、女のことにかけては好いつて書いてある。』

『何れ、お見せなさい。』手に取つて見て、『そんなこと書いてないぢやありませんか。うそばかり！』  
お糸はちよつと笑つて見せて、さて熱心にそれに見入つた。

暫く行つてから、男の方のを返して、男の手から自分のを取つて、丁寧にそれを小さく疊んで帯の間  
に挟んだ。『これで、おみくじなんて不思議なものね。よく當るものよ。』

『何だかわかりやしない。』

こんなことを言ひながら、二人は其處から出て鐘樓の前を通つて、公園の方へと行つた。其處には地  
方の人達や官衙や名高い海軍の將校などの寄附で出來た小さな動物園があつて、真中の大きな金網の圍  
ひの中には、鶴だの鴨だのベリカンなどがあつた。羽の綺麗な鴛鴦などもあつた。

猿の二三疋るる前には、人が大勢たかつて、一杯一錢の甘薯の屑を長い柄杓に乗せて面白半分によつ

てゐたりした。親猿は小猿の蚤を頻りに口で取りながら、巧みにそれを手で取つて食つた。傍には早く  
も水を賣つてる店などが出てゐた。

真中の金網の前で、

『一つやつて見ませうね。』

お糸はかう言つて其處にあるブリキの小さな罐に入つてゐる五六疋の鱈を細い樋の中にあけてやると  
其處にゐたベリカンは大きな嘴をひろげて、忽ちそれを鷄呑にした。續いて富田のやつたもう一杯の方  
は、あけやうが下手だつたので、鱈は一二疋樋の外にこぼれ出して頻りに地の上を跳ね廻つた。

襖に田舎廻りの繪師のかく芋山水が張つてあるやうなわびしい宿にその夜は泊つた。夜の物なども粗  
末に、綿蚊帳の色は褪せて、地はぺたくと重々しく肌に粘り着いた。『これで一番好い旅籠屋かな、さつ  
きの奴に騙されたんだね。だから、知つてる家でなくつては滅多には泊れないよ。』など、富田は言つた。

それは二階の裏座敷で、欄干から下を見ると、汚ない鐵色をした泉水に金魚などが泳いでゐた。裏の  
小屋には、薪が一杯に積んであつて、頬かぶりをした親爺が頻りに米をついてゐた。杵を下す音が地に  
響いて日の暮れるまで聞えてゐた。

膳に上つたものなども食へるやうなものはなかつた。お糸は玉子焼で纒かに夕飯をすませた。給仕に  
は碌々口もきけないやうな小さい婢が出て、山盛に飯を盛つたのを、富田は半分お椀に明けたりなどした。



『仕方がない、旅に出ると、何うかするとかういふ眼に遭ふよ。その代り静かだ。』富田はそれでも酒だけは二本ほど明けた。

『夫婦と思つてゐるからをかしい。ちつとも疑はないね。』

『本當です。』

『汚い代りに、さういふ處が取柄だね。じろく見られるのも餘り好くはない。』

一日彼方此方と遊び廻つたので、二人はかなりに勞れてゐた。しかしその疲勞が却つて二人の心と體とを近づけて行つてゐた。『町なんか歩いて見たつて、面白いことはないだらう。早く寢ようね。』かう言つて二人は飯がすむとすぐ婢に床を取らせた。

廁は欄干を傳つて階段を下りて行つたところにあつた。四角なランプにぼんやり灯の點いてゐるのも佗しかつた。朝顔は古く缺けて、草履はわるく濕つてゐた。黄い安物の手洗鉢の上にさがつてゐる手拭で手をふきかけて半分でよしたお糸は、『貴方、ハンケチを持つていらつしやらない？ 汚い手拭ね。』かう言つて、もう蚊帳の中に入つてゐる富田に聲をかけた。二度目にお糸が下に下りて行つた時には、中庭の上に星が美しくかゝやいて、明日の天氣の好いのを思はせてゐた。下ではまだ眠らずに起きてゐるらしかつた。

『蚤がゐるのね。』

かう言つてお糸は床の中に入った。しかし男は疲れて、ぐつすり寢込んでゐた。

今日は何うしても歸るといふので、その翌日、二人は朝早く其處を立つて停車場の方へへ行つた。そこから二人は猶ほ大廻りに線路を廻つて、二時間ほど汽車の中にある。富田とわかれた停車場には、富田の家の方に行く郊外の電車が來て待つてゐた。『ちや、また——』かう言つて汽車を下りた富田の後姿はやがてその電車の中に消えた。

一人になつたお糸は思はず溜息をついた。夢ではないかと思つた。一昨日から今日にかけて、誰が自分の秘密と快樂とを知つてゐるだらう。かう思ふと、微笑がひとり手にお糸の胸に渦まき上つて來た。昨夜の汚ない旅籠屋のことなどを頭に繰返してお糸は獨りて樂んだ。

## 二十

十日ほど明けた間に、其處にはいろ／＼なことがあつた。清どんとの間がばれて、お秀はもう其處にゐなかつた。お定はお定で、女將の仕打が餘りだと言つて、『私はいつでも身を退くよ、私はちゃんとその積てるんだから、』など、言つてゐた。帳場には、深川に行つてゐた女將の姪のお貞が暇を取つて來て坐つてゐた。

『お前、手がなくつて忙しくつて困つたよ。病氣は好いかえ？』女將も四五日寢たとかで、蟬谷に膏



薬などを張つてゐた。姪のお貞は、今年十七で、將來は此處の跡取りにさせるといふ話であるが、イヤに才はじて、おつくりなどをべたくして、通俗な可哀相な小説本などに絶えず讀耽つてゐた。客の前に出ることが好きで、女將の代理と言ふやうな顔をして、長い間お座敷に坐つてつまらないことを饒舌つてゐた。『お貞ちゃんにも困るよ、』など、女中達はこぼした。

忙しい朝夕は再びお衆の周圍にあつた。相變らず客が多く、自動車の音は絶えず門前に聞えてゐた。土地の政子といふ妓に立派な旦那が出来て今では見違へるやうな全盛になつたといふ話や、梅勇といふ妓のお腹が大きくなつたといふ話や、ちよつと留守にした間に、世の中にはかうも變つたことが多いのかと驚かされた。それに比べてお衆は過ぎ去つた三日間の出来事を考へた。

その翌日の午後であつた。お衆は菊の間の前のところで、ふと座敷に入つて行く歌子の後姿を見た。お衆ははつとした。『菊は誰？ お客さまは？ 富田さんぢやない？』かう其處にゐたお梅にすぐ聞いて見たが、それは工場を持つてゐる亘といふ中年の男で、近頃家をつけてやつたお客であつた。お衆はその座敷にも二三度出て知つてゐた。

『歌ちゃん。』

帳場の方へ行かうとするのを後からかうお衆は呼び留めた。

ちよつと振返つて見た歌子は、『まア、お衆姐さん、何時歸つて来て？ さう？ 昨日？ 誰かと思つ

てよ。病氣はもう好いの？』

『有難う。』

お衆はかう言つたが、不思議にも歌子の體がお衆の體に新らしい意味を持つたある感覺を興へて來てゐた。歌子の體には、富田の體が生きて動いてゐた。お衆は汚い旅籠屋の夜のことなどを繰返しながら、

『此方も忙かつたんですつてね。』

『え、割に忙しかつたわ。』かう歌子は言つたが、お衆と並んで帳場の方へ歩いて來ながら、『田舎に行つてたら好いでせうね。幾日ゐて？ 十日？ そんなものかしら？ 随分長いやうに思つてよ。お衆姐さんまだ歸つて來ないの？ 随分長いって一昨日もお梅姐さんに言つてたのよ……。それでも病氣はすつかり好いの？』

『お蔭様で……。』お衆はまた歌子の色の白い肌や綺麗な顔などを凝と見た。

『田舎は好いでせう？』

『何にも見るものがないからちき退屈してすつてね。』

『伯母さんの家にばかりゐたの？』

『ええ。』

『でも、田舎は好いわ。旅に出ると、本當に氣が清々するものね。……さう言へば、話は違ふけれど、



お秀さんとうとう出ちやつてね。』

『さうだつてね。』

『それは大騒ぎだつたのよ。清どん、今でも此處には入れないんでせう。』

『さうなの？』お糸は歌子の顔を見ながら、『そして何うしてるの？』

『何でもあの近所にあるッていふ話よ。花もとのお上が力を入れてるらしいよ。そら、清どんの關係で。』

『そして照江さんは何うして？』

『何だかごたく／＼してるやうよ。』

其處に、風呂場の傍に女將の姿が見えたので、二人は話をやめて帳場の方へ行つた。

『お妻姐さん、菊でお煙草よ。』歌子は番の女中にかう言つて置いて、立つて帳場の隅にある電話室の中に入つて行つた。お糸は其處で把手を廻して受話器を耳に當て、立つてる歌子の姿を見てゐるが、やがて、『貴女？ お高さん？ まだ何とも言つて來なくつて？ さう？ ぢやね、何とか言つて來たらね。待たして置いて下さいな……うそよ、そんなことはないのよ。その代り、あのことね、あのことは約束して置いてもいいわ。』面白さうに笑つて、『ちや、好いわね。私？ 私、二三時間すれば明くわ。それぢやよろしくね。』かう言つて話を切つて、把手を廻して、そして歌子は其處から出て來た。すぐ座敷

に行くかと思ふと、さうせずに、帳場の傍のところ來て坐つて、

『お糸さん、いくらか肥つてね。』

『やう。』

『樂をするのに限るわね。一日二日だつて樂をすると、違ふわ。……』聲を低くして、『それは大騒ぎだつたわ。女將が怒つてね。照江さんも意見されたんだつて。……それに、機嫌がわるいのよ、此頃。お糸さん、ゐなくつて好かつた。』

『そんなに騒ぎだつたの？』

『それは他のこともあるにはあるのだよ。これね。』お仙のことを暗に指して、『これが中々ものね。あれの手にかゝつて、あの人も一緒に怒つてゐるんだもの。……あの人が自分で身を引くやうにこれが仕むけてゐるのよ。』

『やう。』

お糸が何か言はうとした時、表の方に車の音がした。お客様かしらと思つてゐると、『入らつしやい、』と言ふ聲が續いて門のところまで聞えた。風呂場の傍にゐた女將が慌て、此方に姿を見せた時には、客を乗せた車はもう帳場の前へと來てゐた。お糸の眼にも、歌子の眼にも、同時に新しいバナマ帽をかぶつた富田の姿が映つた。『まア、富田さんだよ、お久し振ね。』女將はかう言つてその傍に寄つて行つた。



慌て、袂を取つて其處に出て行つた歌子は、『本當にお久し振り、』とか何とか言つて、女將と一緒に世辭を振撒いてゐるが、其時其處に出て來たお衆とちらりと眼を合せた富田は、ステツキを持つたま、敷石の上を向うに行かうとした。

『離れが好いよ。富田さんは静かなのが好きだから。』

かう女將が後から言つた。お衆と歌子とは先に立つた。

風呂場の傍を通つて、綺麗に掃除してある敷石の上を傳つて、榊樹の栽ゑてある處を少し行くと、其處に二間つゞきの離座敷があつて、真中は板敷になつてゐて、都合によつては、客を二組入れることが出来るやうになつてゐた。歌子の客が菊にゐるので、女將は特にこの離座敷に富田を導いたのであつた。お衆は丁度その番に當つてゐた。

案内してから煙草盆を持つてお衆が行つた時には、歌子は餉臺に向つて坐つてゐる富田とは離れて、下駄を穿いたまゝ、着物の裾をまくるやうにして腰をかけて、派手なお召の長襦袢を其處に見せて、頻りに巻煙草の吸口を長く細く引出して捻つてゐた。『何うして、こんなに入らつしやらなかつたの？ 今日でもう半月以上になるわね、』など、言つてゐた。お衆はやがて茶道具を持つて來て餉臺を拭いた。

『お風呂は？』

『今日はやめる。』

『お誂へはいつものよう御座んすか。』かう言つたお衆は絶えず眼でいろ／＼な事を言はせてゐた。

『それにしても、お前、丁度よく來てたね。』

かう富田が歌子に言ふと、

『もう少しさつき來たのよ。深川の方のお客で、いつも知つてゐる人なの。男の方二人連よ。仲の歸り

か何かで、幫間が一緒に來てゐるは。』富田の顔を見て、『貴方、今日は緩くりしてつても好いでせう？

誰か呼んで頂戴な。義理のある妓があるのよ。』

『義理は眞平だ。』

『だつて、今度のは好い妓だつて言ふ話よ。私のもとゐた家の妓だから、呼んで頂戴よ。』

『折角聘んでやつても、酒がまづくくなるやうな妓は眞平だよ。』

『そんなぢやないツていふのに……。貴方も此頃意地がわるくなつたわねえ。ねえ、お衆姐さん、元のやうにおとなしくなくなつたわねえ。』かう言つたが、『好いでせう。それにいつもの豊子姐さん——好いわねえ。』富田の黙つてゐるのにも頓着せず、『ちやお衆姐さん、かけて頂戴……。豊子さんに、眞砂屋の金平さん。』

『金平なんて、イヤな名だな。』

『まア、黙つてゐらつしやいな。』



帳場でお衆がその電話をかけて、お誂へを持って離座敷に行かうとすると、丁度角のところではつた  
りすれ違つた歌子は、

『ぢや、ちよつと、私、菊に行つてるから、……』

『え、え。』

お衆は軽く點頭いて見せた。

お衆が入つて行つた時には、富田は向うむきになつて庭の方を見てゐた。わざとゆつくり歩いて其方  
へ行くと、此方を振向いた富田は笑つて見せて、

『何うしたえ？』

『何うもしないわ。』

あとから誰か来やしないかといふやうに向うを見た富田は、

『運わるく、お前の番に當つちやつたのかえ？ 駄目だよ、知れちやア。』

『大丈夫。』

かうお衆は押しつけるやうにして言つて、座敷に上つて富田の傍に来て坐つた。お衆はちよつとの間に  
着物を着替へて、さつぱりした風をして來てゐた。翡翠の金簪が形の好い银杏返の鬢によく映つて見えて  
ゐた。

『あれからすぐ歸つたかえ？』

『え。』

『うちで何とか言つてやしなかつたかえ？』

『何とも……』

お衆は何か言はうとしたが、富田があとから人が來るのを頻りに氣にしてゐるのを見て、

『そんなに氣にしなくつても……大丈夫よ。歌ちゃん、菊に行つたから。』ちよつと富田の耳の方に顔  
を寄せて、『幫間が來てるなんてうそよ。』

富田の顔はサツと變つた。すぐそれを見て取つたお衆は、つゞいて素つば抜かうとした歌子の秘密を  
ちよつと躊躇して男の顔を見た。

『誰だえ？』

暫くしてからかう富田は訊いた。

『家のお客よ、誰でもないのよ。』かう言つたお衆はいくらか眞面目な突詰めた心持になつてゐた。『矢  
張、歌ちゃんに惚れてゐるんだ。』かういふ考へが咄嗟の間にお衆の頭を掠めて行つた。

『お酌でもしませうか。』

『うむ。』



かう言つて富田は其處に置いてあつた盃を初めて起した。お衆は黙つて酌をした。男の輕快な氣分は著しく變つて來てゐた。しかし流石にすぐ思ひ返したといふ風で、

『かけた人、皆な來るツて？』

『えゝ。』

『金平ツて何んな人だえ？』

『私、知らない。』

二人はまた暫し黙つた。

やがて押へに押へた心が溢れて漲つたといふやうに、お衆は言つた。『矢張、氣になるのね？』

『何が？』

『歌ちやんのことか——』

『さういふ譯ぢやないよ。僕だつてそんなうぶぢやないよ。』

『さう、』と言つたが、お衆はつまらなさに溜息をついて、『私も早くやめる積りよ。お秀さんも出されて了ふし、お定さんも出るツて言つてゐるし、イヤだわ、こんな處にゐるのは——』

『安心してゐたまへ。』富田はかう眞面目な顔をして言つた。

お衆は話すまいと思ひながら、歌子の客のことや、さつき電話を歌子がある處へかけた話などをすつ

かり富田に饒舌つて了つた。しかし初めの時のやうな焦燥を富田はもう顔にはあらはさなかつた。フムと言つて唯笑ひながら聞いてゐた。旋て歌子に對してよく口にした『あんな奴』といふ言葉も出なかつた。富田は唯黙つて考へてゐるやうにしてゐた。お衆は男の心を讀みかねた。

『あゝ、さうだつたね。』富田は急に思ひ出したやうに、懐の財布から五圓札を一枚出して、『此間借りたのを有難う。』

『好いのよ。』

『でも、借金は借金だから。』

『水臭いのねえ、貴方は。』

『さういふ譯ぢやないよ。僕は女に金をつかはせることが嫌ひだから。』

『ぢや、これぢや多いわ。』

『いゝから、取つてお置きよ。あまつたら何かお買ひよ。……ぐづくしてると、それ、誰か來るぢやないか。』

『さう、』と言つて、お衆は後を振返つたが、急いでそれを帯の間に挿んだ。足音は歌子であつた。急いで下駄を穿きかけたお衆の素振はいくらか狼狽へてゐた。

今、言つたことを富田は歌子に饒舌りはしないだらうか。歌子に惚れてゐればゐるだけ饒舌らずには



居られない筈だが……。かう思ふと、此方にゐる間、お糸は氣が氣でなかつた。しかし、金平が來、豐子姐さんが來て、再び其處へ行つた時には、富田の顔にも歌子の顔にも初めと變つた様子は少しも見えなかつた。歌子は快活に笑つてお糸や富田に話しかけた。

金平といふ妓は果して富田の言つた通り飲んでゐた酒が拙くなりさうな女であつた。それがちよつと立つて行つたあとで、富田は、『好い妓だね、中々。あれぢや賣れるだらう、』など、歌子に言つた。『たんとおつしやい!』といふやうな顔を歌子はして見せた。

豐子といふ姐さんは、瘦せたすらりとした好い藝者であつた。細い中に細かい曲折を持つたやうな聲で、得意な小唄ものを唄ふと、靜かな情緒が人の腸をそゝるやうにあたりには漂ひ渡つた。富田はいくらか酔つたやうな風で、黙つてそれに聞惚れてゐた。

生憎にもお糸がかけ持ちをしなければならぬやうな客がまた一組やつて來た。それは大勢の客で、後番のお定一人では間に合はないやうなお座敷であつた。お糸は藝者連に離れの方をまかせて置いて、二階の廣間の方へ階段を上つて行かなければならなかつた。さつき一言、唯一言で好いから口留めをすれば好かつた。『今言つた事を歌ちゃんに言つちや駄目ですよ。』かう言ふのを忘れた。お糸にはそれが絶えず、心配になつた。隙を見て、ちよつと行つて見たりした。二階のお客に戯談を言つてゐる間にも、富田の座敷の方のことが氣に懸つた。

## 二十一

初めは詰らなさうな顔をしてゐた富田が、中頃行つて見た時には、いつもに似合はずひどく酔つて、其處にゐる妓達に鋭い皮肉を浴せかけてゐた。しかしそれも僅かの間で、後には後に倒れて手枕をしてごろりとして了つた。お糸が枕をあてがつてやつたのも、藝者達が挨拶をして歸つて行つたのも、何も彼も知らないらしかつた。

お曰がさめたら呼んで下さい』

歌子がかうお糸に言つて置いて、菊の間の方に行つて了つた。

お糸はかういふ介抱を前にも度々したことがあつた。歌子の爲めに、富田のおを傳してやつたことも一度や二度ではなかつた。しかし今日は藝者達や客の世話をする普通の女中の心持でゐる事は出来なかつた。お糸の心は際限なく動搖した。何うして好いかわからないやうな渦巻が凄じく捲き上つてゐた。自分を信頼して好いのか、富田を信頼して好いのか、それとも自分も富田も全く信頼することが出来ないので、それが容易にわからなかつた。

お糸は別室の支度をして來てから、富田に聲をかけた。

『蚊が食ふぢやないの？ 貴方?』



かう言つても起きないので、

『貴方、貴方、富田さん。』

と今度は體を揺り動かした。

眼を覺した富田は、いつか全く夜になつて了つたのに驚いたといふやうに、あたりを見廻したが、大きな押を一つして、『もう、皆な歸つたのかえ？』

『さつき、皆な挨拶をして歸つて行つたぢやありませんか。』

『さうかなア、すつかり酔つちやつた！』

『もうそれでもいくらかは覺めて——？』

『うむ、もう好い。』蚊に食はれた足や手をほりく搔きながら、『餘程、寝たね。』

『かなり寝たわ。』お糸は笑つて見せて、『もう、お休みなさいよ。此處にこんなにしてゐると蚊に食はれますよ。』

『成るほどひどい蚊だ。』

かう言つて立上つて、別室の方へ行きかけたが、あとからついて行つたお糸は、『歌ちゃん、ちき來ますッて……』

『何を言つてるんだい！』

かういふ富田の聲につれて、二人の笑ふ聲が押し附けるやうに聞えた。

『菊かえ。』

『妬いてるのねえ。』かう言つて笑つたと思ふと、すぐ、『知らない、知らない、』といふお糸の聲が續いてした。あとはしんとして、表二階のドンチャン騒ぎが手に取るやうに聞えて來た。さつき下男が來て灯を入れて行つた小行燈は、闇の中の綠葉に青く透き通るやうに映つてゐた。軒端には蚊柱が立つて、ひとり座敷に取残された蚊遣火の烟が、細く薄青く灯の影に靡いて行つてゐた。暫くしてからお糸のこつそり其處を出て行く姿が見えた。

暫くしてお糸が二階から下りて來た時、菊の間の歌子の客は歸つて行く處であつた。『お近い中に』とか何とか言つて、大勢車の周圍を取巻いてゐたが、やがて送り出してふと、歌子はお糸の傍にやつて來て、

『今日は忙しいのね。』

『え、二階が大勢さまなもんだから。』

『何處のお客？』

『そら、頭の禿げたわる口ばかり言ふ人のお伴れよ、何でも新聞の人か何か——』

『中田さん……。中田さんツて言ふのよ、あの人。私御挨拶か何かにして呉れないかしら？ 駄目さ



「うね？」歌子はかう言つたが、「あちらに、お煙草は行つてゐて？」

『え、行つてゐるわ。』

歌子はちよつと軽い溜息をついて、何か考へ込んでゐるが、其まゝ立つて、電話口に入つて把手を廻した。歌子はまたさつきの處に電話をかけるのであつた。

その時、『お衆さん。』二階で呼ぶ聲がしたので、お衆はその電話を半分聞きかけて二階へと行つた。今度下りて來た時には、歌子はもう其處にゐなかつた。

二階には大勢藝者達が來てゐた。土地でも綺麗な方のお酌が三人に、若い妓が二人に、中姐さんが二人、それにさつきの豐子も來てゐた。丁度踊りが始まつてゐるところで、女將も廊下の處で女中達と一緒に並んで坐つて見てゐた。今年の春の新曲の手の面白いところだけを撰んで若い妓達は躍つた。三味線は湧くやうに陽氣に鳴つた。

お衆も其處でそれを見てゐるが、心は絶えず離座敷の一間の方へと行つてゐた。暗い一間の光景はすぐ眼の前にもあるかのやうに思はれた。歌子は例の巧みな手で、巧みに男の心を奪つて行つてゐるだらう。男は忽ちその心と體とを女に任せて了つてゐるだらう。富田が歌子に惚れてゐると思ふと、お衆は急に深い焦燥の全身に襲つて來るのを見た。一間の光景はまたはつきりと浮んで見えた。つゞいて富田の心は單に好奇心に留まつてゐるのではないかと思つた時には、お衆には自分のやつたさつきのことが

全く男の玩具になつてゐるとしか思はれなかつた。何故自分はあの時逃げて歸つて來なかつたらう。男の手を振切つて歸つて來なかつたらう。自分は馬鹿だ、意氣地なした。かう思つてお衆は下唇を咬んだ。一間の光景はまた浮かんで見えた。

厭な厭な何とも言はれない厭な氣がした。たまらなく歌子が憎くなつて來た。自分の言つたことを富田が歌子に話しやしないかと心配したことなどはもう何處かに行つて了つた。今はお衆はそれどころではなかつた。お衆は立つて、廊下から二階の階梯の處に行つて立ち留つて、闇の中の離座敷の方を凝と見た。

其處へお梅がソツと寄つて來た。

顔を寄せて、

『氣の毒だけど……持つてゐない。』お梅は金を貸せと言ふのであつた。

『何か、急な用でも出來たの？』

『あとで話すから。』

『ぢや……』

と言つて、お衆はさつき富田に貰つた金を帶の間から出してお梅に渡した。

『あとで話すよ。』



お梅は下りて行つて了つた。

夜風は熱したお糸の顔を吹いた。氣が附くと、考へはいつかまた歌子の上に移つて行つてゐた。離座敷をすまして歌子はさつき電話をかけた處に出かけて行くに相違ない。あれは確に情夫だ……。かう思ふと、その電話をすつかり聞かなかつたのがお糸には惜しかつた。

座敷ではいつかお酌達の踊りももう濟んでゐた。女將は『わかい人達の踊を見ると、こんなお婆さんになつても、あゝいふ年にもう一度なりたいと思ふから不思議ですね』など、言つて客の傍でお世辭を振りまいてゐた。『こちらなんか、もう何も彼もお存じなんですから……。貴方のやうに氣のお廣い方はありませんよ、』など、言ふと、客はそらお出でなすつたと言はぬばかりに、ピシヤリと禿げた頭を叩いて見せた。

『こちらは面白い方ね。あは、あは、』と女將は轉げる様にして笑つた。

暫くしてから下に下りて行つたお糸は、其處にゐたお梅に手招きされて、ちよつと廁の傍の暗い處に行つた。二人の姿は暫し其處に見えてゐたが、やがて其處から出て來たお糸の顔には、ある感動の跡が歴々と讀まれた。『好いのよ、そんなこと心配しないで……。』かうお糸は言つた。今朝、お梅は男のことで女將にひどく叱られて、一時間以上も皆なのゐる前で口汚く意見された。『それはね、私もわるいのよ。でもあんなに言はなくつても好い、』など、お梅は晝間も口惜しがつて眼を赤くしてゐた。お梅はと

ても勤まらないから、今夜遅く黙つて出て行くといふ話であつた。着物などは晝の中にこつそり隣の植木屋へ運んで置いた。『お前さんには黙つては行けないから、話すんだがね……。出るまでは知らない顔をしてゐてお呉れよ。今のお金はすぐ返すから。』かうお梅は言つた。お糸はお梅に同情せずには居られなかつた。此方に來た時には、お糸は胸が塞るやうな氣がして、涙が頬を傳つて落ちた。

氣になつた離座敷の方からは、いつまで経つても歌子は出て來なかつた。何うしたかと思つてゐると、十一時過ぎになつて、離座敷のベルが始めて鳴つた。急いで行つて見たお糸は、長襦袢のまゝで蚊帳の外に出てるた歌子を見た。歌子は、『今夜はお泊りになるんですッて。』かうつまらなさうに言つて、『姐さん、もう何時？』

『もう時間よ。』

『さう？ もうそんなになるの？』

『歌ちゃん、歸るの？』

『いゝえ、私も泊つて行くわ。』かう言つた歌子は、もう一度電話をかけてから向うに行きかけたが、また戻つて來て、煙草を二つ出して貰つた。

『女將さん、もうおやすみ？』

『もう、とくに。』



『早いね。……』

お衆は歌子と一緒に離座敷の方へと出かけて行つた。暫くの間、室を片附けたり雨戸を締めたりしてゐるが、やがて蚊帳の傍に置いてある歌子の着物と富田の着物を一まとめに風呂敷に包んで、『お休みなさい、』と挨拶して、それを持つて其處から出て來た。富田がむかうむきになつて、足を投げ出してぐつすり寝込んでゐるのが蚊帳の中にはつきりと見えてゐた。

歌子の着物と富田の着物を一緒に包む時にもお衆は一種の衝動を體に覺えて厭な氣がした。男の着物も帶も、此間旅で見たのと同じであつた。同じ鐵色が、つた組の羽織で、同じ縮緬のへこ帶であつた。

お衆は川沿ひの旅館で、その羽織を疊んだ時のことなどを頭に繰返しながら此方へと歩いて來た。

ついさつきまで月の間では、まだ客が騒いでゐるが、それもいつ靜まるとなく靜まつて、歸るものは歸り、寝るものは寝て了つた。それからまた一時間ほど経つた。その頃には、女中達ももう寝る支度をした。お梅はまだ其處にゐた。『紅葉には誰？ 絹枝さん？ 竹には？』など、お定は訊いてゐた。

お仙はある姐さんが思ひもかけない客と出來たといふ話をさもめづらしいものを見たやうにして話してゐた。『そんなことが出来るものかね。それがお前さん、二度か三度逢つたつきりの人だよ。旦那もわるいのさ、若いのを伴れて來たりなんかして、散々あの人を焦らしたり何かしたんだけど……けどもねえ、あの年になつて、あの名高い姐さんで、そんな氣が起るもんかね。私は吃驚したよ、私がね、

姐さんがゐないから、何うしたのかと思つて、呼んで見たのよ。けども返事がないんだらう。不思議にしながら、奥の萩に行つて見ると、其處にゐるぢやないの？ 男と二人で。』

『これで？』お妻は腕を首にあてる眞似をして、驚いたやうな顔をして見せた。

『私、わるいと思つたから、さつさと此方に來ちやつた。』お仙は笑ひながら、『イヤだねえ、本當に……いくら何でも……』

こんな話をしながら、女中達は蚊帳を釣つたり、入口の雨戸をしめたりした。お衆は翌日は早く起きる番なので、そんな話を好い加減に聞きながら、入口の傍の六疊に入つて行つたが、種々なことが思ひ出されて、枕を着けても容易に眠られなかつた。男と女の間柄が何處まで行つたら好いのかお衆にはわからないやうな氣がした。離座敷のことが浮んだり、今聞いた姐さんの話が思ひ出されたりする中に、ある秘密なシーンがはつきりと眼の前にちらついて、黒い影が執念く體に絡み附いた。男の爲めに今夜こつそりぬけ出して逃げて行くお梅のことなども考へられた。しかし幸ひに體は疲れてゐた。お衆はいつか眠りに落ちて行つた。

裏通りにあるその二階屋の上さんの眼には前の男とは丸で違つた立派な旦那が映つた。お衆とは年が



違ひすぎてゐるけれど、がつしりした體格と崩さない服裝と落附いた態度とは、十分に世間の波に浸つた中年の男を思はせた。言葉にも素振にも他人の氣を兼ねるとかきまりがわるるとかいふやうなところは少しもなかつた。平氣で入つて来て、平氣で二階に上つて行つた。『えらい人を伴れて来たもんだ。今度のは情夫ぢやないな、金だね。』上さんは一目見てすぐさう思つた。富田はまた富田で、厭にお世辭の上手な卑しい狡るさうな笑ひ方をする上さんを見た。

店にある煙草の入つた棚、縁の取れた長火鉢、暗い窓の上に置いてある安物の植木鉢、木版の美人畫の張つてある枕屏風、さういふものが前の男の眼に映つたと同じやうに、矢張富田の眼にも映つた。富田も矢張隣から来る節屋の小さな金槌の音を氣にして、『何だえ？ あれは？』とお衆に訊いた。

『えらい處があるんだね。』

こんなことを言つて富田はあたりを見廻した。矢張同じやうに上さんの素性やら、何うしてお衆が上さんと戀意になつたかといふ事やらを富田は訊いた。『君方にはかういふ宿が一軒づゝあると見えるね。これぢやどんな男でも呼んで來られるぢやないか。』かう富田が笑ひながら言ふと、『だつて、私、そんなぢやない……。私つい三月ばかり前に戀意になつたんですもの、』など、眞面目な顔をしてお衆は言つた。

お衆は逃げて行つたお梅の話から女中達の話をした。『だつて、お女將さんも解らないんですもの、お定さんも、もうちき出るかも知れない。』初めはこんなことを言つてゐたお衆は、段々男の口から詳しく此

間の夜のことを探らうとした。あの夜はいつものやうに面白くなかつたことは薄々ながら歌子の口裏からお衆は判じた。何でも、男はそれとはなしに菊の間の客のことを歌子に言つたらしかつた。電話をかけた話も別の話にして言つたらしかつた。しかし思つたほどさう深く露骨には言はなかつたらしいのがお衆には嬉しかつた。また、歌子が何も知らないのも——夕暮の蚊柱の軒下の光景も何も知らないのもお衆には得意であつた。その夜も、男に對して自分の占めてゐる位置の疑惑が一番強く頭の中に繰返されたが、その疑惑の解けて行くにつれて、お衆の結ばれた心も忽ちにして開けて行つた。

『駄目ですよ、本當に……。そんなことを言つて了つては——』

お衆は後にはこんな風に言つた。

しかしそれも逢つて話をしてゐる中だけで、——むしろ逢つた當座一日二日の間で、暫く逢はずに居ると、その疑惑は忽ち元のやうに生きて動いて來るのをお衆は見た。時には、『そんなことをやきもき思つたつて仕方がない。男の出やうを待つて見てゐるより他仕方がない。男の出やうで何うにても出来る。』こんな風に考へることもあるが、歌子の容色や腕や巧い言葉などを思ひ浮べると、さう暢氣にはしてもゐられなかつた。久しく逢はない時には、何處か別な處で、富田は歌子に逢つてゐるはしないかといふ疑念が熾に起つた。



田舎の方で家を持つといふ話も度々出たけれど、お衆も富田もそれを實行する心持にはまだなつてゐなかつた。田舎に圍はれるのも好いが、それには男の心をもつと確かりつかまなければ駄目だとお衆は思つてゐた。『こんな二階汚なくつて仕方がない。』『こんなことを言ひながら、富田はそれでも二三度は其處にやつて來てゐた。』

そのまゝで一と月二た月は經つて行つた。お衆に歌子に富田、かう三人顔を合せることも其の間には幾度かあつた。番に當らない時にも、お衆はいつも其處に顔を出した。暑い日影に華やかな夾竹桃の咲いてゐる室で二人が晝酒を飲んでゐる傍に行つて見たこともあれば、朝早く浴衣がけて隣の花園に草花を見に行く歌子と富田とを見たこともあつた。お衆は初めは何うかして二人の仲を割かうと思はぬではなかつたけれど——歌子がゐるではとても十分に富田を自分のものにすることは出來ないと思つたけれど、しかもそれを押詰めて行けば、歌子と富田との間ばかりではなく、自分と富田の間も矢張同じやうに破壊されて了ひさうな細かな心の關係があるので、當分はをり／＼の二階の會合だけで満足してゐなければならぬといふことを段々お衆は知つてゐた。お衆に取つては、富田は好い情夫ではないが、好い旦那ではあつた。富田は指環だの蝙蝠傘だのを賣つてやつた。『好い旦那だね、お前さん。あゝいふ旦那なら、あんな處の女中なんかしてゐないだつて、家なんかいくらでも持たして呉れるだらう、』など、二階の上さんは言つた。

忙しく賑かな空氣の中でお衆は矢張同じやうにして其の日／＼を送つて行つた。大勢の藝者を伴れて土手下の船からやつて來るお客を迎へに行つた時には、月が美しく川に碎けて、藝者達の纏れるやうに歩いて來る黒い影が丸で繪か何ぞのやうに見えた。

河岸にはいつも一艘のモーターボートが繫がれてあつた。それは近所にゐるある人が持つてゐるもので、お客はよくそれを借りて、藝者などを乗せて川に涼みに行つた。富田が歌子とお酌とを伴れて出かけて行つた時には、お衆は好い鹽梅に番に當つて矢張一緒について行つた。それは四人乗るには窮屈な位な小さなボートで、眞中に料理を入れると、一人は傍に腰をかけてゐなければならなかつた。ぼんやりついた提燈の置處がないので、お衆がそれを持つてあつかつてゐると、富田は戯談にそれを自分の襟にさして見たりした。お衆は富田の傍に腰をかけてゐた。

『今日は主人が運轉手ね。』

お酌はこんなことを言つて、『だって、いつももう一人の書生さん見たいな人がするんだけど、今日はあの人よ。』

『さう、あの人を持つてゐるの?』



歌子はめづらしさうに鬚の生えた肥った男の方を見た。男は脊を丸くして頻りにボートの器械の加減をはかつてゐた。

モーターの音がけたましくあたりを響いて、ボートはやがて川へと出て行つた。岸に臨んだ水樓や涼しい風に開放された二階の室や、長く水に落ちて動いてゐる幾條の灯の影や、さういふものは皆な逸早く目まぐるしく眼の前を動いて通つた。華やかな灯を載せて靜かに上流に上つて行く涼み舟からは、三味線が流るゝやうに聞えた。

ある大きな料理屋の納涼棚の傍を通つた時には、そこには電燈が眩ゆくかゝやいて、女と男の影が幾組ともなく明かるい光線の中に動いてゐた。『今日はお客が大變入つてゐるのね、』など、歌子はお衆に言つた。

都會の賑やかな夏の夜の納涼が其處にあつた。摩れ違つて通つて行く數艘のモーターボート、多い船の中を人を満載して縫つて行く渡船、岸の向うに美しく輝いて見えるイルミネーション、土手の上にチラチラする白地の浴衣、岸に連つて構へられてある遊泳所、大きな會社の煙突、長い橋の下を通る時には、車馬の音や人の足音が轟くやうに頭の上に聞えた。『丸で活動寫眞を見てるやうね。』橋を過ぎて光線の漲りわたつた方へ行く時、歌子はいかゞ富田に言つた。

『其處に腰をかゝてるちや危ないよ。』富田はいかゞ既に何遍となくお衆に注意した。『其處で、ぐらつと

船が動けば、すぐ落こつて了ふよ。はひれないかな、此方に?』など、も言つた。お衆はその度毎に、『大丈夫ですよ、しつかりつかまつてゐるから、』など、言つてゐるが、後には、『落こつて死んだつて好いんですよ、私なんか。誰も泣いて呉れるやうな人はゐないから、』など、言つて笑つた。お衆の顔は闇に白く見えてゐた。

富田は枝だのうで玉子だのをお衆に取つてやつた。歌子は、『お衆姐さん、私が代つて上げようか。』

『いゝえ、好いのよ、大丈夫よ。』

ボートがその次の橋の下を通る時分には、それでもお衆は歌子と並んで富田の前の處に小さく割込んで入ることが出来た。皆な膝と膝とが觸れ合つた。

『窮屈ねえ、無理ねえ。三人しか乗られないのね、これは。』

『でも好いよ、この方が――。落こつちや大變だからな。それこそこんなにしてゐられやしない。』かう言つた富田は始めて安心したやうに盃をお衆の方にやつた。漲るやうな光の都會はまたその前に近づいて來てゐた。岸の灯、橋の轟き、赤く青く變る廣告燈、交叉する度にピカピカ光る電車の線、開放した料理店の一と間、その中を黒く光つた水は溶々として漲り流れてゐた。

『柳橋ね、もう此處は? 早いわねえ。』

歌子はいかゞ言つたが『でも、三味線はこれでは駄目ね。モーターの音がイヤね。本當なら、矢張屋形



か何かの方が好いわねえ。』

橋を越えてから、ボートはぐるりと廻つて、元來た流れを今度は上流の方へと行つた。歌子は、うて玉子をボートの持主にやつたりした。鬚の生えたその持主は、やがてモーターの機械の説明などをして聞かせた。

『もつと上流に行きますか？』

出て行つた河岸近く來た時、ボウトの持主は訊いた。

『もう少し行つて見ませうね。』歌子は富田の方を見てかう言つたが、急に思ひ附いたやうに『大橋あたりまで行つて見ませうか？』

『千住の？』

『え、』

『大變だ……あそこまで行くのは——まあ、そこらまで少し行つて見よう。』

『ちきよ、この早さでは——』

『でも、千住までは遠いわねえ。』

お糸は傍から言つた。

少し溯ると、下流の賑やかな光景は、あれは幻影であつたかと思はれるやうにあたりがしんとする

た。岸の灯の影も少く、船の往來も稀に、モーターの音ばかりさびしく水に響いて聞えた。をりからのさし潮に岸の蘆のたぶく動いてゐるのや、渡場の森の黒い影や、大きな工場の夜業の灯などが闇の中にそれと指さされた。上からモーターが一艘下りて來たが、それは静かな處で操縦の修練でもやつてゐるといふやうに、少し行つては、また引返して上流の方へ溯つて行つた。

『秀さんかも知れないわ。』

お酌はモーター通のやうな口の利き方をして、河岸の近くに住んでゐるモーター道樂の人の話などをした。と、歌子は、『澤ちゃん、よく知つてるのね……。さう？ あの人もモーターを持つてるの？ 雪ちやんの旦那でせう？』

『え、さうよ。私、雪ちやんと一緒によく乗せて貰つたわ。』

『旦那が運轉手で？』

『え、』

此時富田が盃を出したので、お糸は其處にある徳利を取つて酌をした。提灯の蠟燭はもう残り少なになつて、灯が底の方にチ、と瞬いてゐた。『もう蠟燭はないの？』かう富田に訊かれて、『い、え、持つてゐます、』と言つて、お糸は船縁のところに置いた蠟燭を闇にさぐつて、モーターの機械の一端にかけて置いた提灯を取つて、それを膝の上に置いたまゝ、静かに疊んだ。短くなつた蠟燭は急に明るくお糸



の顔を照した。お糸の顔は美しく白く見えた。

河風に消えさうになるのを皆で袖で被つて、辛うじて新しい蠟燭をそれにつぎ足した。その時お糸は富田の膝からある微かな暗示を受けてすぐそれを返した。お糸は消えないやうに静かに提燈を開いていた。

河に臨んだ料理店のあるところまで行つて、其處からボートは引返して來た。灯の澤山ついてゐるさつきの舟の中からは、行く時の騒ぎに引かへて、『河風についさそはれし涼み舟、文句もどうか口説して……』など、いふ小唄が静かにきこえてゐた。『まア、お月様が……』ボートが元の河岸に着いた時、かうお酌は聲を立て、言つたが、それは丁度前の黒い森から毬のやうに浮び上つた遅い月であつた。土手の上には河風が行く人々の袖を涼しく吹いた。

## 二十四

歌子は此頃富田が種々なことを知つてゐるのを不思議にした。前にも何うしてあんなことを知つてゐるだらうと思つたことも一度や二度ではなかつたが、新聞か何かに出たのかも知れない位に思つて、別にそれを氣にも留めずにゐた。『貴方、此頃、餘程何うかしたわねえ。人を疑つてばかりゐるわねえ。大變人がわるくなつたわねえ、』など、言つて笑つて過ぎて來た。

勿論、富田も正面からそれを言ふのではなかつた。いつもと違つたやうな處は少しも見せないでゐて、知らん顔をてちよいちよい真相に突込んで行つたやうな口裏を見せた。歌子は黙つて富田の顔を見た。

『私、そんな女に見えて？』かうは口には言つてゐる歌子も、腹の中ではよく狼狽した。逢ふ度に不思議の影は愈々濃かになつて行つてゐた。歌子は自分の身の周囲を振返つて見たりした。何處か別な待合なんか富田は出かけて行つて、他の藝者からさうした種々なことを聞くのではないかと思つても見た。それから歌子は、富田の知つてゐる待合や藝者などを注意して見た。しかし、何處にもさういふ影も形もなかつた。自分の知つてゐる範圍では、何處の待合にも富田らしいと思ふ客は見えなかつた。『不思議だねえ。』かう歌子は竊かに腹の中で思つてゐた。

『お前は水臭いから厭さ……。それは稼業だから、何とも言ひやしないがね。しかし、そんなに隠さなくつたつて好いちやないか。』こんなことを言ふかと思ふと、時には、押黙つて相對して、歌子の體がそんな體であるのをさもめづらしいといふやうに見た。歌子はいつも自分の上に深く閃めいてゐる富田の眼を見た。

誰も知つてゐる筈のないある客筋との關係を富田が知つてゐるやうな口吻を見せた時には、歌子は思はずはつとした。『何うして貴方、そんなことを知つてゐるの？』と思はず口から出ようとした。歌子は富田の顔を凝と見た。



歌子がかまをかけて、種々のことを裏から探つた。『貴方、此頃玉の屋に行きやしない？……うそ……うそ、屹度行つたんだよ、貴方。イヤねえ、屹度、春子さんと出来てるんだよ。』

『何故だえ？』

『だつて……』でなくつてはそんなことを知る譯がない。かう言はうとして、慌て、よして、『屹度さうよ。』

『それちや思ひ當ることがあるんだね、』

富田は静かな皮肉な調子で言つた。

しかし、その玉の屋にも富田が行くやうな風は見えなかつた。不思議は愈々不思議になつて行つた。それに富田の態度も此一月二た月非常に變つて行つてゐた。『駄目よ、そんなに氣を廻しちや、誰か好い加減なことを言ふのよ。誰？ 一體？ そんなことを貴方に言ふのは？』歌子は甘えた調子で、男に絡みつくやうに言つた。

歌子は具合が好かつたら、此の頃富田から少し金を引出さうと考へてゐた。かねて抱妓を一人置きたいと思つてゐて、一二度はその話を富田にしたこともないではなかつた。富田はその時、『僕などでなくつても、もつと好い氏が澤山ゐるだらう、』など、言つてゐた。が、しかし押して行けば押切ることの出来ないこともないやうな口吻であつた。それが俄に調子が變つて行つた。此間、それとなく當つて見首を傾けた。

た時には、『それは人が違ふぢやないか、』と言つたきり、富田は巧みに話を他に外して了つた。

それにも懲りずに、歌子はその話を種々にして持出して見た。歌子は白い腕と濃い髪と暗い灯の影とが男の心をいかに蕩かし得べきかといふことを、人一倍深く知つてゐる女であつた。酔つた時の男の心に乘つて行くことなども上手であつた。しかし、今度はその巧みな表情も、美しい容色も、髪も腕も總ていつものやうな滑らかな効果を奏さないのを歌子は見た。歌子は種々に男の心やら態度やらを想像して首を傾けた。

後には歌子はその不思議をわざと顔にも口にも現はさないやうにして、唯素直に靜かに男の態度にのみ注意した。『私なんか、もう飽きたんでせう、』など、言つて軽く笑つた。

この不思議の容易に解けない中に月日は経つて行つた。その間には二度も三度も歌子は富田に逢つてゐた。一方には、富田の言葉に鋭い皮肉やわる口が多くなつて行くと共に、一方には藝者なんか仕やうのないもんだ——女なんかは玩具にさへしてゐれば好いもんだといふやうな調子が色濃く出て來てゐた。お定を前に置いて『女ツて言ふものは玩具にして置くにかぎるよ。眞劍になつたらおしまひだ。すぐ引張られて行つて了ふからね、』と言つたりした。ある時はかなり酔つてゐた。女將をつかまへて、『女なんて、なアに、わけはないよ。ちき何うかなつて了ふもんだ。女の要求の方が男の要求よりも強いかも知れないんだからな。少し話して聞かせないか。女將なんかさういふ經驗を澤山持つてゐるんだらう？ 持



つてゐない？ うそを言つてる。女はだから嫌ひさ。『こんなことを言ふと、女將は例の轉げる様な笑ひ方をして、『貴方が女がきらひ？ 貴方が？ さう？ 貴方が女がきらひ？』わざと繰返すやうにして言つた。

ある時には、男と女とは内所であると思へば、いつまでも兩方で内所にして置かれるものだらうかといふ話から始まつて、不倫な關係をした男と女の話を長く／＼富田は話した。『さうね、さう兩方で内所に出来たら面白いでせうね。でも駄目でせうよ、屹度。何うしてもわかるでせうよ。』その時歌子はこんなことを言つたが、不思議にもその富田の話が後までも忘れずにはつきりと歌子の頭に残つてゐた。歌子はそこから不思議の絲をひき出して來ることが出来るやうな氣がした。

## 二十五

ある晩、歌子と富田と土手の上を歩いてゐると、ちよつと摩れ違つた婆さんが、笑ひながら歌子に挨拶して行つた。夕暮でよくはわからなかつたけれど、何處かで富田は見たやうな氣がしたので、

『誰だえ？』

『なアに、ちよつと知つてるお婆さんよ。』歌子は打消すやうにして、『このちき下にゐる人よ。貸二階なんかしてゐるのよ。』

『君方のよく行く處かえ？』

『また、あんなことを……。私はそんなちやないつて言ふのに……』かう言つたが、『でも、此間まで照江さんのお客で、その二階を借りてゐた人があつたわ。』

『今はゐないのかえ？』

『照江さん、すつかり絞つて了つたんでせう。何でも、何處かの若旦那よ。まだわかい學生見たいな人よ。』

今でこそこんなことを言つてゐるけれど、一二年前には、歌子も一度その婆さんの二階の厄介になつたことがあつた。その男を今でも歌子は時々思ひ出した。『あの人がもう少し何うかした男だつたら？』などと思つた。芝あたりのかなりの骨董商の息子で、二三年前に父親が死んで、家は餘り評判のよくない母親と番頭とがやつてゐた。歌子の爲めには前後に澤山ない位に利益になつたお客であつた。金なども一時湯水のやうに使つた。唯、厭なのは、其男が執こく、嫉妬深いことで、朝から晩まで女の顔を見てゐなければ承知が出来ないといふ人であつた。歌子はある待合からその男をその二階に引張つて來て、半年ほど其處で逢つてゐた。別れた時には、もうかなり男の手元はあやしくなつてゐたが、それでもまだ無理をすれば少しは何うにか出来る位は持つてゐた。歌子はずく／＼顔を見るのが厭になつて別れたのだから、さう大して未練はなかつたけれど、そのあとに小照といふ妓と出來て、小照の家に新しく抱